新潟県埋蔵文化財調査報告書　第281集

日本海沿岸東北自動車道(国道7号朝日温海道路)関係発掘調査報告書１

上野遺跡Ⅰ　第１次調査

２０１９

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道（国道7号朝日温海道路）関係
発掘調査報告書１

上野（かみの）遺跡Ⅰ　第１次調査

２０１９

新　潟　県　教　育　委　員　会

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道（日沿道）は、新潟県から青森県の日本海側主要都市を結ぶ延長約 322km の自動車専用道路です。このうち、新潟･山形県境の約 40.8km は、平成 25 年に「朝日温海道路」として事業化されました。日沿道は、日本海側に高速交通・通信体系等を整備することにより、社会、経済、生活、文化等の諸機能をネットワーク化し、新たな国土の主軸を形成する「日本海国土軸」構想の一翼を担う道路として、早急な整備が求められています。

本書は、朝日温海道路の建設に先立ち、平成 29 年度に実施した発掘調査の報告書です。調査では、竪穴建物などの生活の痕跡は見つからなかったものの、土石流堆積物の中から縄文時代後期の遺物が大量に出土し、周辺における集落の存在や、その衰退の引き金となった災害の実態が明らかとなりました。日沿道関係では、同じ村上市の長割遺跡で縄文時代後期の大規模な集落が発掘調査されていますが、これまで発掘調査事例の少なかった高根川流域にも同時代の集落が営まれていたことがわかりました。今回の調査成果が、地域の歴史を解明するための基礎資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

この調査に関して多大な御支援と御協力をいただいた村上市教育委員会、並びに地元住民の方々、そして、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2019 年 2 月

新潟県教育委員会

教育長　池　田　幸　博

例　　言

1　本報告書は、新潟県村上市猿沢に所在する上野遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は朝日温海道路の建設に伴い国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委の依頼を受けた公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成 29 年度に実施した。発掘作業、整理作業及び関連諸工事等の一部業務は小柳建設株式会社に委託した。発掘調査面積は延べ 3,355m^2 である。

4　出土品及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合せ願いたい。

5　出土遺物には、原則として調査年度（西暦下２ケタ）と遺跡の略称を合わせた「17 カミノ」に続けて通し番号を付し、位置情報及び遺物の属性を記入したデータベースと関連付けた。

6　遺構図版に付した方位記号の北は国家座標Ⅷ系の座標北を示す。

7　遺跡の土層及び出土遺物の色調は、『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2004］に基づき記述した。

8　引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、Ⅵ章を除き巻末に一括して掲載した。

9　作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。

10　調査成果の一部は、埋文事業団の年報（平成 29 年度）、広報誌『埋文にいがた』No.101 で公表しているが、本書をもって正式な報告とする。

11　調査区を覆う土石流堆積物について新潟大学災害・復興科学研究所の卜部厚志准教授に現地指導を賜り、分析結果を第Ⅵ章に掲載した。

12　中・近世の墓から出土した人骨について新潟医療福祉大学の奈良貴史教授に現地指導を賜り、分析結果を第Ⅵ章に掲載した。

13　花粉分析、放射性炭素年代測定、及び炭素・窒素安定同位体分析は株式会社パリノ・サーヴェイに委託し、その結果を第Ⅵ章に掲載した。

14　第Ⅵ章を除く執筆は、小柳建設株式会社の櫻井和哉（第Ⅴ章３・４）・宮嶋佑也（第Ⅴ章 2A・C）、埋文事業団の小野本敦（その他）が分担し、編集は小野本が行った。

15　遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は有限会社不二出版に委託した。

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、村上市教育委員会・建設課日沿道対策室・産業建設課、猿沢集落・檜原集落の皆様、金内元氏（株式会社ノガミ）から多くのご協力をいただいた。

17　図書館等（著作権法第 31 条第１項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 1

A　本発掘調査 …… 1

B　整 理 作 業 …… 2

C　調査・整理の体制 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1　地理的環境 …… 4

2　縄文時代後期の遺跡 …… 4

3　中世以降の猿沢と出羽街道 …… 6

第Ⅲ章　調査の概要 …… 7

1　調査の概要 …… 7

2　グリッドと調査区の設定 …… 7

3　基 本 層 序 …… 8

4　遺跡の成り立ち …… 8

A　遺物の出土状況から見た土石流と流路 …… 8

B　土石流に襲われた縄文時代の集落 …… 14

第Ⅳ章　中・近世の遺構と遺物 …… 15

1　概　　要 …… 15

2　遺構と遺物 …… 15

A　SZ1 …… 15

B　SZ2 …… 15

第Ⅴ章　縄文時代の遺物 …… 16

1　概　　要 …… 16

2　土　　器 …… 17

A　資料の抽出と分類 …… 17

B　時期区分と出土傾向 …… 18

C　各　　説 …… 19

1）D1 層出土土器 …… 19　　2）D2 層出土土器 …… 20

3）D3 層出土土器 …… 21　　4）D4 層出土土器 …… 22

5）D5 層出土土器 …… 22

3　土　製　品 …… 23
A　概　　要 …… 23
B　各　　説 …… 23

4　石器・石製品 …… 24
A　概　　要 …… 24
B　各　　説 …… 25

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 27

1　花 粉 分 析 …… 27
A　試　　料 …… 27
B　分 析 方 法 …… 27
C　結　　果 …… 27
D　考　　察 …… 28

2　放射性炭素年代測定 …… 29
A　試　　料 …… 29
B　分 析 方 法 …… 29
C　結　　果 …… 30
D　考　　察 …… 33
1）堆積層（基本土層）出土炭化材・土器付着炭化物 … 33　2）火葬墓 …… 34

3　炭素・窒素安定同位体比分析 …… 34
A　試　　料 …… 34
B　分 析 方 法 …… 34
C　結果及び考察 …… 34

4　SZ1・SZ2 出土人骨について …… 37
A　は じ め に …… 37
B　SZ1 人 骨 …… 37
1）遺 存 状 況 …… 37　2）年　　齢 …… 37
3）性　　別 …… 37　4）その他特記事項 …… 38
C　SZ2 人 骨 …… 39
1）遺 存 状 況 …… 39　2）年　　齢 …… 39
3）性　　別 …… 39
D　ま　と　め …… 39

5　村上市上野遺跡における砂礫層の形成過程 …… 40
A　は じ め に …… 40
B　地形・地質概要 …… 40
C　砂礫層試料の解析 …… 42
1）粒 度 組 成 …… 42　2）構成粒子の形状と組成 …… 42
D　砂礫層の起源と形成過程 …… 43

第Ⅶ章　調査のまとめ …… 48
1　中・近世の墓 …… 48
2　縄文時代の環境と集落 …… 48
A　集落の立地 …… 48
B　土石流の暦年代と集落の関係 …… 48
C　上野遺跡から考える縄文時代後期の遺跡動態 …… 51

≪要　　約≫ …… 52
≪引用・参考文献≫ …… 53
≪観　察　表≫ …… 55

挿図目次

第 1 図　朝日温海道路と上野遺跡の位置 …… 1
第 2 図　試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査必要範囲 …… 2
第 3 図　遺跡周辺の地形 …… 4
第 4 図　三面川水系の縄文時代後期の遺跡 …… 5
第 5 図　猿沢周辺の中世遺跡と出羽街道 …… 6
第 6 図　グリッド設定図 …… 7
第 7 図　基本層序 …… 9
第 8 図　土石流堆積物と遺物の分布 …… 10
第 9 図　D1 層の遺物出土状況 …… 11
第 10 図　D2 層の遺物出土状況 …… 11
第 11 図　D3 層の遺物出土状況 …… 12
第 12 図　D4 層の遺物出土状況 …… 13
第 13 図　D5 層の遺物出土状況 …… 13
第 14 図　調査区周辺の地形 …… 14
第 15 図　土器の層位別重量比 …… 16
第 16 図　南三十稲場式土器（深鉢）の分類と部位名称 …… 17
第 17 図　突起上面観の模式図と名称 …… 17
第 18 図　編み方模式図 …… 17
第 19 図　石器の部位名称 …… 25
第 20 図　軽石製不明石製品の類例 …… 26
第 21 図　花粉化石およびプレパラート内の状況 …… 28
第 22 図　暦年較正結果（1） …… 31
第 23 図　暦年較正結果（2） …… 32
第 24 図　暦年較正結果（3） …… 33
第 25 図　土器付着炭化物 …… 35
第 26 図　炭素・窒素安定同位体比分析結果と食材の比較 …… 35
第 27 図　第Ⅵ章 1 ～ 3 の試料採取位置と炭化物付着土器 …… 36
第 28 図　歯の遺存状況 …… 37
第 29 図　SZ1 出土人骨 …… 38
第 30 図　近遠心径偏差折線 …… 38
第 31 図　頬舌径偏差折線 …… 38
第 32 図　SZ2 出土焼骨 …… 39
第 33 図　上野遺跡周辺地域の地形 …… 41
第 34 図　上野遺跡付近の扇状地状の地形と崩壊地形の分布 …… 41
第 35 図　村上市朝日地区の高根川流域の地質図 …… 41
第 36 図　調査区における砂礫層試料の採取位置 …… 42
第 37 図　各砂礫層試料の粒度組成 …… 43
第 38 図　各砂礫層試料の 1mm 粒度階の構成粒子 …… 44
第 39 図　D1 層～ D3 層の 0.25mm 粒度階の構成粒子 …… 45
第 40 図　D5 層、Ⅶ層の 0.25mm 粒度階の構成粒子 …… 46
第 41 図　上野遺跡付近の地形と砂礫層の供給方向 …… 47
第 42 図　放射性炭素年代測定暦年較正値と土器型式 …… 49
第 43 図　土器編年と堆積イベントの関係 …… 50

表 目 次

第 1 表　土器の層位別出土量 …… 16
第 2 表　土器型式と時期区分 …… 18
第 3 表　掲載土器集計表 …… 18
第 4 表　花粉分析結果 …… 27
第 5 表　放射性炭素年代測定試料 …… 29
第 6 表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 …… 30
第 7 表　炭素・窒素安定同位体比分析結果 …… 34
第 8 表　永久歯の計測値（mm） …… 37

図 版 目 次

【図面図版】

図版 1　全体図
図版 2　分割図 1
図版 3　分割図 2
図版 4　中世の銭貨・縄文時代の土器（1）
図版 5　縄文時代の土器（2）
図版 6　縄文時代の土器（3）
図版 7　縄文時代の土器（4）
図版 8　縄文時代の土器（5）
図版 9　縄文時代の土器（6）
図版 10　縄文時代の土器（7）・土製品
図版 11　縄文時代の石器・石製品

【写真図版】

図版 12　調査区（1）
図版 13　調査区（2）･基本層序（1）･遺物出土状況（1）
図版 14　調査区（3）・基本層序（2）・旧河川セクション・遺物出土状況（2）
図版 15　遺物出土状況（3）
図版 16　遺物出土状況（4）・SZ1・SZ2
図版 17　縄文時代の遺物
図版 18　中世の銭貨・縄文時代の土器（1）
図版 19　縄文時代の土器（2）
図版 20　縄文時代の土器（3）
図版 21　縄文時代の土器（4）
図版 22　縄文時代の土器（5）
図版 23　縄文時代の土器（6）
図版 24　縄文時代の土器（7）・土製品、石器・石製品

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（日沿道）は、新潟県・山形県・秋田県の主要都市を結び青森県に至る延長約 322km（新潟空港 IC ～青森 IC）の自動車専用道路である。日沿道は、日本海側に高速交通・通信体系等を整備することにより、社会、経済、生活、文化等の諸機能をネットワーク化する「日本海国土軸」の一翼として、早急な整備が求められている。新潟県内においては、新潟空港 IC から朝日まほろば IC の区間が平成 23 年 3 月までに供用されている。

第 1 図　朝日温海道路と上野遺跡の位置
（国土地理院 20 万分 1 地勢図「村上」に加筆）

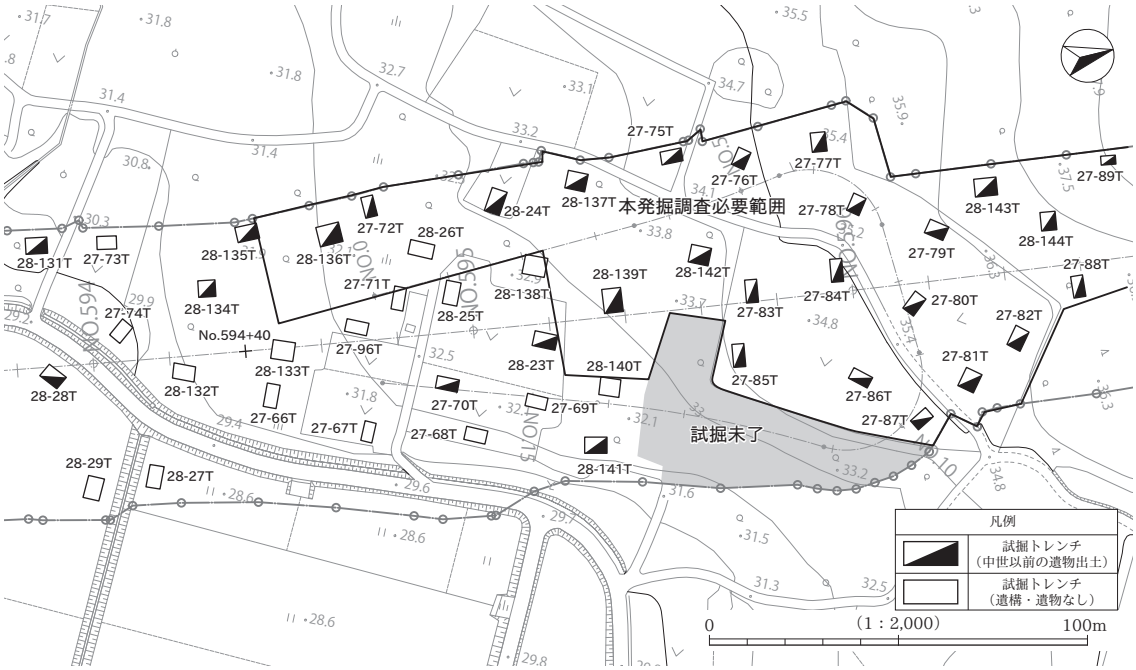
朝日まほろば IC から山形県鶴岡市のあつみ温泉 IC までの延長約 40.8km の区間は、平成 25 年に「国道 7 号朝日温海道路」として事業化された。これにより、国交省と県教委との間で建設用地内における埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。村上市川端・猿沢・檜原地区においては、平成 27・28 年度に県教委による試掘確認調査が行われた。この結果、杭 No.592+80 以北のトレンチにおいて、砂礫層を中心に縄文時代の遺物が出土した。これにより、周知の遺跡である上野遺跡の範囲が南へ広がることが判明し（第 2 図）、県教委は国交省に対し杭 No.594+40 以北について本発掘調査の必要性がある旨を報告した［新潟県教育委員会 2017・2018］。

試掘確認調査の結果を受け、国交省は平成 29 年 3 月 28 日付で県教委に対し調査必要範囲の南端 3,000m^2 について本発掘調査を依頼した。県教委は、平成 29 年 4 月 10 日付で埋文事業団に調査を委託した。

2　調　査　経　過

A　本 発 掘 調 査

5 月 25 日に、重機による表土掘削を調査区北側から開始した。表土掘削は 6 月 12 日に完了し、6 月 5 日から並行して人力による包含層掘削を開始した。後述のように（第Ⅲ章）、遺物包含層は基本的に西側の山地の崩壊による砂礫層であり土質に違いがなく、試掘調査結果との対比が極めて困難であった。そのため、表土掘削の段階で遺物をほとんど含まないⅡ層中の砂礫層を厚く掘り残していたことが後に判明した。そこで 6 月 22 日からは調査員が地層を確認しながら小型の重機を使用してⅡ層の掘削を行った。なお、人力掘削においては、遺物を含む土石流の発生回数や方向等から遺跡の形成過程を検討する目的で遺



第２図　試掘確認調査のトレンチ位置と本発掘調査必要範囲
（国交省提供計画図に加筆）

物の出土座標値を１点ずつ記録して取り上げた。

８月17日、9Cグリッド付近で中世の土葬墓（SZ1）を検出した。中世の遺構の存在は想定外であったため上部は削平してしまったが、人骨と銭貨は原位置で確認できた。人骨の取り扱いについては８月23日に新潟医療福祉大学の奈良貴史教授に現地で御指導を賜り、25日に取り上げを行った。９月２日には6Aグリッドで火葬墓（SZ2）を検出し、SZ1出土分もあわせて奈良教授に人骨の分析を依頼した（第Ⅵ章４）。この間、８月30日に新潟大学災害・復興科学研究所の卜部厚志准教授から堆積状況についての御指導をいただいた。卜部准教授に依頼した分析結果は第Ⅵ章５に掲載した。

調査終盤の９月27日、NHK新潟放送局による「金よう夜きらっと新潟・イラスト紀行」の取材を受け、発掘調査の状況を紹介した。同番組はNHK総合で10月20日（金）19時30分から放映された。

10月４日、掘削が完了した段階で再度卜部准教授に御指導をいただいた。10月５日、ラジコンヘリによる全景空撮を行い、県教委による終了確認を受けた。その後、調査区に設定したベルトを掘削するなどの補足作業を10月12日まで行った。

調査の進捗が予定より早まったため、調査区北側を拡張することとした。10月10日に拡張区の重機による表土掘削を開始し、11日からベルトコンベアを設置して人力掘削を行った。拡張区の掘削深度は、試掘調査の結果や南側での遺物の出土状況を考慮してⅣ層上面までとした。拡張区の調査は11月２日に完了し、再度県教委による終了確認を受けた。調査区の埋め戻しは11月22日に完了し、11月27日に国交省に現地を引き渡した。

B　整　理　作　業

整理作業は、現地調査と併行して遺物の洗浄・注記・重量計測などの基礎的な作業を進め、現地作業終了後に本格的に着手した。11月末までは現地の事務所と小柳建設株式会社の整理室（新潟市西蒲区）で並行して作業を行った。12月以降は後者に一本化し、観察表作成、本文執筆、遺物の実測･写真撮影等を行っ

た。今回の調査は検出遺構が非常に少なかったため、遺物の分類・接合・実測が主な作業となった。出土座標値を取得した約 20,000 点の遺物については、三次元位置情報と遺物の属性（重量・部位・文様等）を入力したデータベースを作成した。この作業により、遺物の分類や定量的な分析をスムーズに行うことができた。

編集作業は、有限会社不二出版に各種原稿・原図・レイアウト図案を支給し、印刷用データで納品を受けた。以上の作業を 3 月 31 日までにすべて完了し、遺物・データ類を事業団に収納した。

C　調査・整理の体制

【試掘確認調査】

調査期間　平成 27 年 6 月 4・5・8 ～ 12・15 ～ 19・22 ～ 26 日、10 月 13 ～ 16・19 ～ 23・26・27 日、11 月 5・6・9 ～ 11 日、12 月 14・15 日
　　平成 28 年 7 月 26 ～ 29 日、10 月 4 ～ 7 日、平成 29 年 2 月 27 日～ 3 月 10 日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）
総　　括　斎藤　靖則（新潟県教育庁文化行政課　課長）平成 27 年度
　　午腹　　明（　　同　　）平成 28 年度
管　　理　斉藤　　尚（　　同　　課長補佐）
調査指導　滝沢　規朗（　　同　　埋蔵文化財係長）
調査担当　石川　智紀（　　同　　専門調査員）
調 査 員　佐藤　友子（　　同　　）平成 27 年度
　　加藤　元康（　　同　　主任調査員）平成 27 年度
　　牧野　耕作（　　同　　文化財調査員）平成 27 年度
　　田中　祐樹（　　同　　）平成 28 年度
　　長谷川大旗（　　同　　）平成 28 年度
　　工藤　祐大（　　同　　）

【本発掘調査】

調査期間　平成 29 年 5 月 25 日～平成 29 年 11 月 22 日
整理期間　平成 29 年 11 月 2 日～平成 30 年 3 月 31 日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　池田　幸博）
調　　査　公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　清野　一善（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　事務局長）
管　　理　松田　　祐（　　同　　総務課長）
庶　　務　星野　美奈（　　同　　班長）
調査総括　沢田　　敦（　　同　　調査課長）
指　　導　佐藤　友子（　　同　　調査課長代理）
調査担当　小野本　敦（　　同　　班長）
支　　援　小柳建設株式会社
現場代理人　金子　　彰
調 査 員　櫻井　和哉
補 助 員　宮嶋　佑也　　小林　　睦　　坂之井真弓　　前崎　朋子　　渡邊　藤子　　飯塚　直美

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

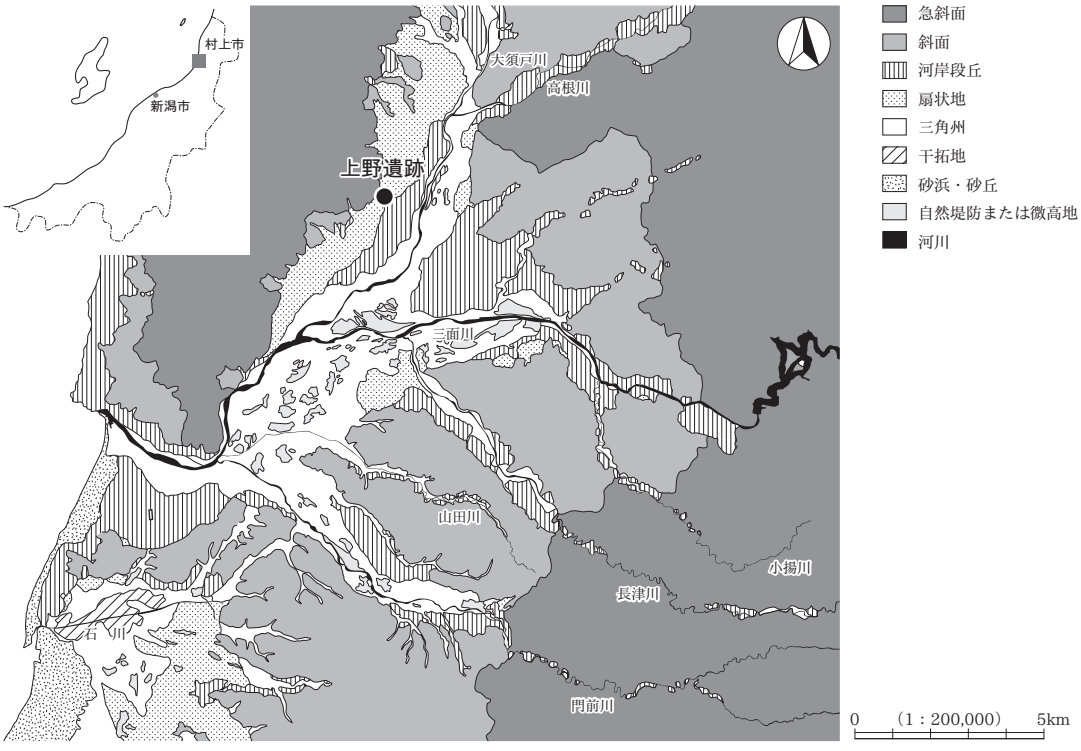
上野遺跡が所在する村上市は、新潟県の最北に位置し、北・東は山形県、南は関川村及び胎内市と隣接する。面積は約 1,174km^2 で、県域の約 1 割を占める。市域の大半は山地であり、平地は飯豊山系・朝日山系を水源とする河川の流域に広がる。遺跡周辺は、平成 20 年の合併以前は三面川水系を村域とした朝日村に属していた（第 3 図）。

調査地の猿沢は、鷹取山・虚空蔵山・新保岳などが連なる丘陵地の東裾に立地し、丘陵沿いに南下する高根川の右岸に位置する。地形は、丘陵から高根川へ流れ込む小河川によって形成された扇状地である。標高は 32 ～ 34m であり、南東側に広がる水田面とは約 4m の比高差がある。

2　縄文時代後期の遺跡

上野遺跡の出土遺物は、縄文時代後期前葉の南三十稲場式土器を主体とする。県北の縄文時代の様相については、『長割遺跡』で詳しく検討されているため［坂上 2011］、それに依拠しながら三面川水系の縄文時代後期の遺跡を概観する。

上野遺跡が立地する高根川・大須戸川流域では、早くに古四王林遺跡の発掘調査が行われ［上原 1959］、高橋保雄らによって遺物の再整理がなされた［高橋ほか 1998・1999］。遺構は検出されず、遺物



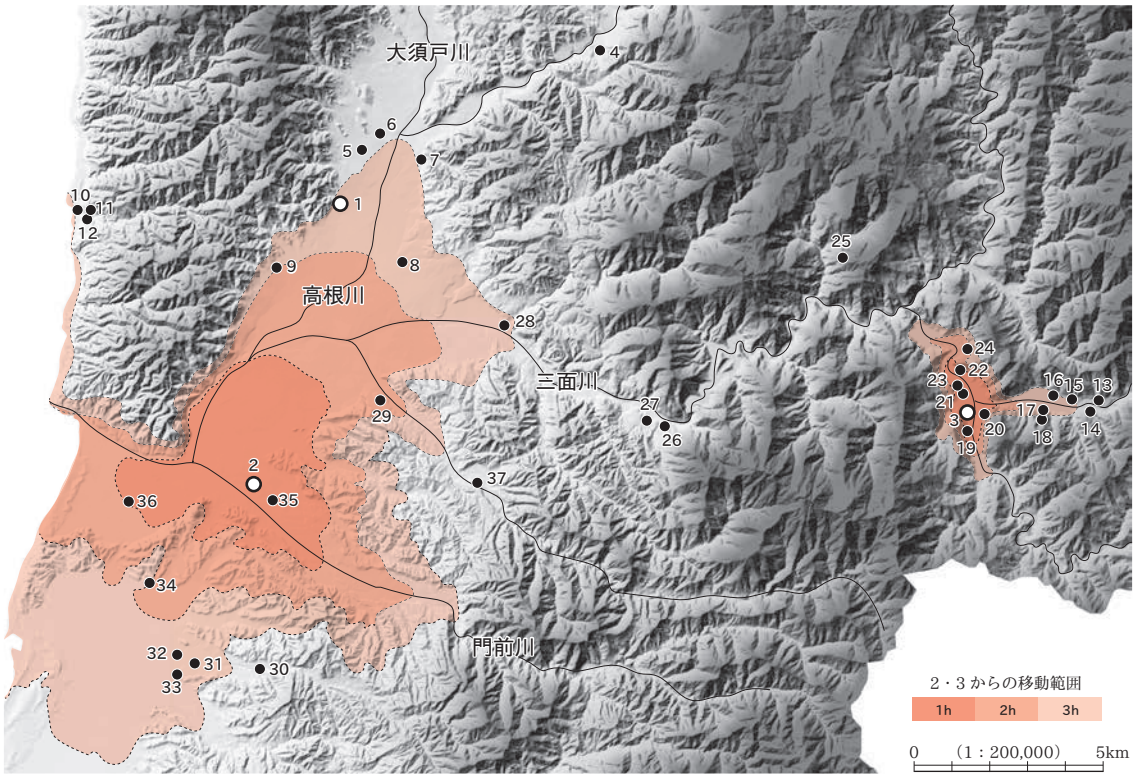
第 3 図　遺跡周辺の地形
（新潟県農地部［1989］に加筆）

は後期後葉～晩期を中心とする。このほか、上流域に竜山寺裏遺跡、下流域左岸に田中遺跡・向野遺跡、右岸に谷地尻遺跡・古寺跡が知られるが、発掘調査は行われておらず不明な点が多い［横山 1980・奥三面を考える会 2001］。

門前川（もんぜんがわ）の自然堤防上に立地する長割遺跡［滝沢ほか 2011］は、後期前葉を主体とする大規模集落遺跡である。上野遺跡からは直線距離で 5km 強の位置にある。集落の約 1/8 を調査したとされ、竪穴建物 1 棟、平地建物 166 棟、掘立柱建物 21 棟などが検出された。掘立柱建物には長軸が 18m 以上のものが 3 棟含まれており、床面積は県内最大である。

三面川上流部に位置する奥三面遺跡群では、後期前葉に最も遺跡数が増加する。アチヤ平遺跡上段［富樫ほか 2002］は中期末葉から後期前葉の集落遺跡で、直径約 60m の環状集落が形成され、建物 99 棟、配石 110 基、土坑 111 基、埋設土器 133 基などが検出された。

上野遺跡と同時期の三面川水系において突出した規模を持つ長割遺跡・アチヤ平遺跡は「拠点的集落」と理解されている［坂上 2011］。縄文時代の領域について、谷口康浩［2003］は中期の関東地方南西部



No.	遺跡名	時期	草	早	前	中	後	晩
1	上野	後期					○	
2	長割	中・後期				○	○	
3	アチヤ平	前～後期			○	○	○	
4	竜山寺裏	中・後期				○	○	
5	谷地尻	中・後期				○	○	
6	古四王林	後・晩期					○	○
7	田中	後期					○	
8	向野	後・晩期					○	○
9	古寺跡	中・後期				○	○	
10	柏尾	後期					○	
11	玄場平	後期					○	
12	向平	後期					○	
13	長通り	中・後期				○	○	

No.	遺跡名	時期	草	早	前	中	後	晩
14	脇ノ沢	前～晩期			○	○	○	○
15	黒渕	草～後期	○	○	○	○	○	
16	上向い	中～晩期				○	○	○
17	元屋敷	早～晩期		○	○	○	○	○
18	本場平	前～晩期			○	○	○	○
19	落合向い	前・後期			○		○	
20	樽口	草～晩期	○	○	○	○	○	○
21	沼ノ沢	前～晩期			○	○	○	○
22	竪岩	後・晩期					○	○
23	坂巻	前・後期			○		○	
24	下ゾリ	前～後期			○	○	○	
25	長者岩屋岩陰	前～晩期			○	○	○	○
26	沼田	後期					○	

No.	遺跡名	時期	草	早	前	中	後	晩
27	岩崩上ノ山	後期					○	
28	寺尾	後期					○	
29	熊登	後・晩期					○	○
30	中村	後・晩期					○	○
31	城田	中・後期				○	○	
32	樋渡	中～晩期				○	○	○
33	堀下	中～晩期				○	○	○
34	八太郎	中・後期				○	○	
35	下相川	後期					○	
36	観音寺裏	後期					○	
37	中平	中・後期				○	○	

第 4 図　三面川水系の縄文時代後期の遺跡

（国土地理院基盤地図情報数値標高モデル（10m メッシュ）に加筆）

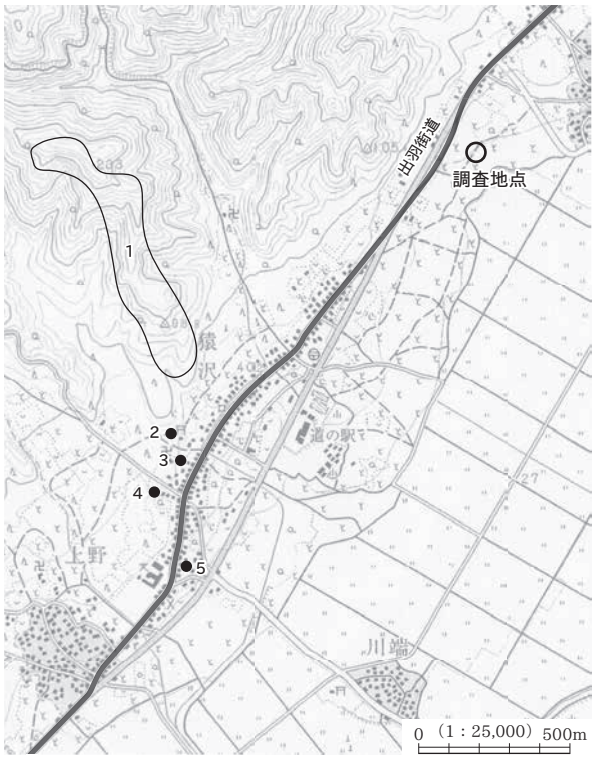
の分析をもとに、拠点集落から「おおむね徒歩２時間前後の距離」の範囲内とした。時期差・地域差を考慮する必要はあるが、これを参考に長割遺跡・アチヤ平遺跡から３時間以内の移動範囲を第４図に重ねて表示した[1)]。これによると上野遺跡は長割遺跡の仮想領域内に含まれ、高根川・門前川を利用した長割遺跡との日常的な結び付きが想定できる。一方、三面川上流部の遺跡はアチヤ平遺跡の仮想領域内に密集する。三面川水系の縄文時代後期の遺跡は、平野部と山間部の「拠点的集落」を中心に分布する状況がうかがえる。

3　中世以降の猿沢と出羽街道

今回の調査では、２基のみであるが中・近世の遺構（墓）が検出されているため、これらを理解する背景となる中世以降の猿沢集落周辺の状況を確認しておく。

村上市域には仁平３年（1153）に金剛心院領小泉荘が成立する。その本庄（旧村上市周辺）の支配者は鎌倉時代から小泉氏、南北朝期以降は本庄氏を名乗った。猿沢城は、尾根を利用した大小の廓と南麓の根小屋からなる堅固な構造であり、慶長２年（1597）頃成立の瀬波郡絵図に「村上ようがい」とみえる本庄城（近世の村上城）とともに本庄氏の重要拠点であった［伊藤 1980］。永正５年（1508）に本庄時長が上杉氏・長尾氏との抗争の末ここに隠居した記録や（「本庄氏記録」）、永禄 11 年（1568）、上杉輝虎と本庄繁長の交戦中に武田方の使者が到来した記録が残る［『上越市史』別編 1-630］。

猿沢は、正保２年（1645）作成の越後国絵図に石高 1200 石と表される有力村であり、出羽街道の馬次の役を担った。出羽街道は村上城下から葡萄峠を越えて出羽国の鶴岡城下へ至る道である。昭和 40 年（1965）に開通した国道７号はこのルートをほぼ踏襲している。出羽街道の成立時期は不明であるが、建武２年（1335）の交戦記事から、14 世紀前半には平林城（旧神林村）から樺沢城（旧山北町塔下）まで軍勢が進める規模の交通路が存在したと推測される［小松 1996］。上述した 16 世紀の騒乱記事に猿沢城が散見することは、猿沢の交通上の重要性が関係しているのだろう。集落内の瑞雲寺には石仏が、猿沢神明神社には板碑が存在し、上野地遺跡では珠洲焼が採集されている。今回の調査区は中世以降、猿沢城および城下町の北のはずれに位置したこととなる（第５図）。



1　猿沢城跡　　2　猿沢神明神社板碑　　3　端雲寺石仏
4　上野地遺跡　　5　猿沢の石造仏

第５図　猿沢周辺の中世遺跡と出羽街道
（国土地理院２万５千分１地形図「塩野町」に加筆）

1)　作成には GRASS GIS の r.walk モジュールを利用した。コスト距離の算出基礎は近世の歩行データによるデフォルトのパラメータである。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　調 査 の 概 要

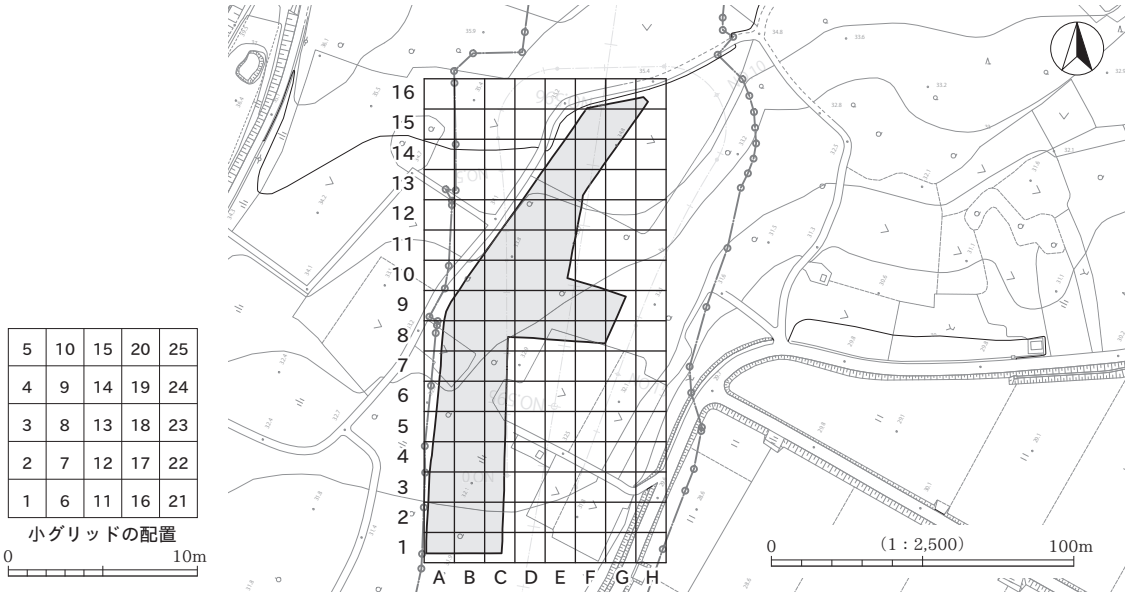
上野遺跡は、村上市猿沢に所在する。国道７号朝日温海道路の建設に伴い、平成 29 年５月から 11 月まで現地調査を行った。今年度の調査面積は 3,355m^2 である。

調査では、中・近世と縄文時代の遺構・遺物を検出した。中・近世の遺構は、墓２基である。１基は土葬墓、もう１基は火葬墓で、いずれも銅銭が供えられていた。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、土器をはじめとする遺物は収納箱（内寸 54cm × 34cm × 10cm）約 90 箱分が出土した。縄文時代の遺物は、後期前葉の南三十稲場式土器を主体とし、土偶などの土製品、石鏃などの石製品をわずかに含む。遺物の大半は、調査区を覆う砂礫層（土石流堆積物）から出土した。土石流は国道７号の西側に位置する山地の崩落によるものと考えられ、５回にわたり調査区を襲ったことが判明した。１～３回目と４・５回目の土石流は調査区への流入方向が異なることから、調査区周辺には複数の集落が存在したと考えられる。

2　グリッドと調査区の設定

国家座標Ⅷ系に沿って 10m の方眼を組み、大グリッドとした（第６図）。大グリッドの呼称は、南西隅の 1A（ X=254620、Y=90000）を起点に北へアラビア数字で１・２・３……、東へアルファベットの大文字でＡ・Ｂ・Ｃ……とした記号を組み合わせ、1A・2A……のように表記した。さらに大グリッド内を 2m 四方で 25 分割し、南西隅が 1、北西隅が 5、南東隅が 21、北東隅が 25 となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで「10C15」のように表記した。



5	10	15	20	25
4	9	14	19	24
3	8	13	18	23
2	7	12	17	22
1	6	11	16	21

小グリッドの配置

0　10m

第６図　グリッド設定図
（国交省提供計画図に加筆）

3 基 本 層 序

調査区は、河川敷に由来する礫を基層（Ⅷ層）とする。Ⅷ層の上面の標高は調査区の西側へ落ち込んでおり、全体的には南へ向けてゆるやかに傾斜する。この状況から、調査区は南北に流れる河川とその左岸にあたり、その上部に土石流と砂質シルトが交互に堆積することによって現在の地形が形成されたことがわかる（第７図）。

土石流堆積物は、発生順に層名を与えた（以下、D1 層～ D5 層と呼称する。また、土石流を D1 ～ D5 と呼称する）。これらは調査区北西側の山地の崩落に由来するもので、明黄褐色の花崗岩質の角礫を主体とする。層厚や礫の粒径は、層ごとの特徴があるわけではなく、各層とも流入源に近い部分は堆積が厚く、礫の粒径が大きい。流入源から離れるほど、層は薄く、礫は細かくなり、上下の砂質シルト層と混じって黒みを帯びる。いずれの層も後期前葉を主体とする縄文土器を含む。調査区内での土石流堆積物の分布、また土石流堆積物内の遺物の分布にはそれぞれ偏在性がある（第８図）。

Ⅱ層は、花崗岩礫を多く含むが、土壌化して褐色味を帯びる点でD1層～D5層と区別できる。12Cグリッド付近より北では、Ⅱ層中にも複数次の土石流堆積物が層状に確認できるが、出土遺物が少ないことから調査対象とせず、細分はしていない。

Ⅲ～Ⅵ層はやや砂質のシルト層である。それぞれＤ５層～ D2 層の下位に堆積し、縄文時代の遺物をごくわずかに含む。Ⅲ･Ⅳ･Ⅵ層については花粉分析を行ったが、いずれも花粉化石をほとんど含まない（第Ⅵ章 1）。調査ではⅥ層に覆われる D1 層の分布範囲を除き、原則としてⅥ層上面までを対象とした。ただし、A-A' ラインより北側の拡張区については第８図に示したように D2 層・D3 層の遺物が広がらない状況が判明していたため、Ⅳ層上面までとした。

以下に、Ⅰ～Ⅶ層の標準的な土質について記す。

Ⅰ層　黒色土　表土。

Ⅱ層　褐色土（10YR4/4）　1cm 以下の角礫を多く含む。

Ⅲ層　褐色砂質シルト（10YR4/4）

Ⅳ層　褐色砂質シルト（10YR4/4）　上層に炭化物を含む。

Ⅴ層　褐色砂質シルト（10YR4/4）　粗砂を多く含む。旧流路内にのみ存在する。

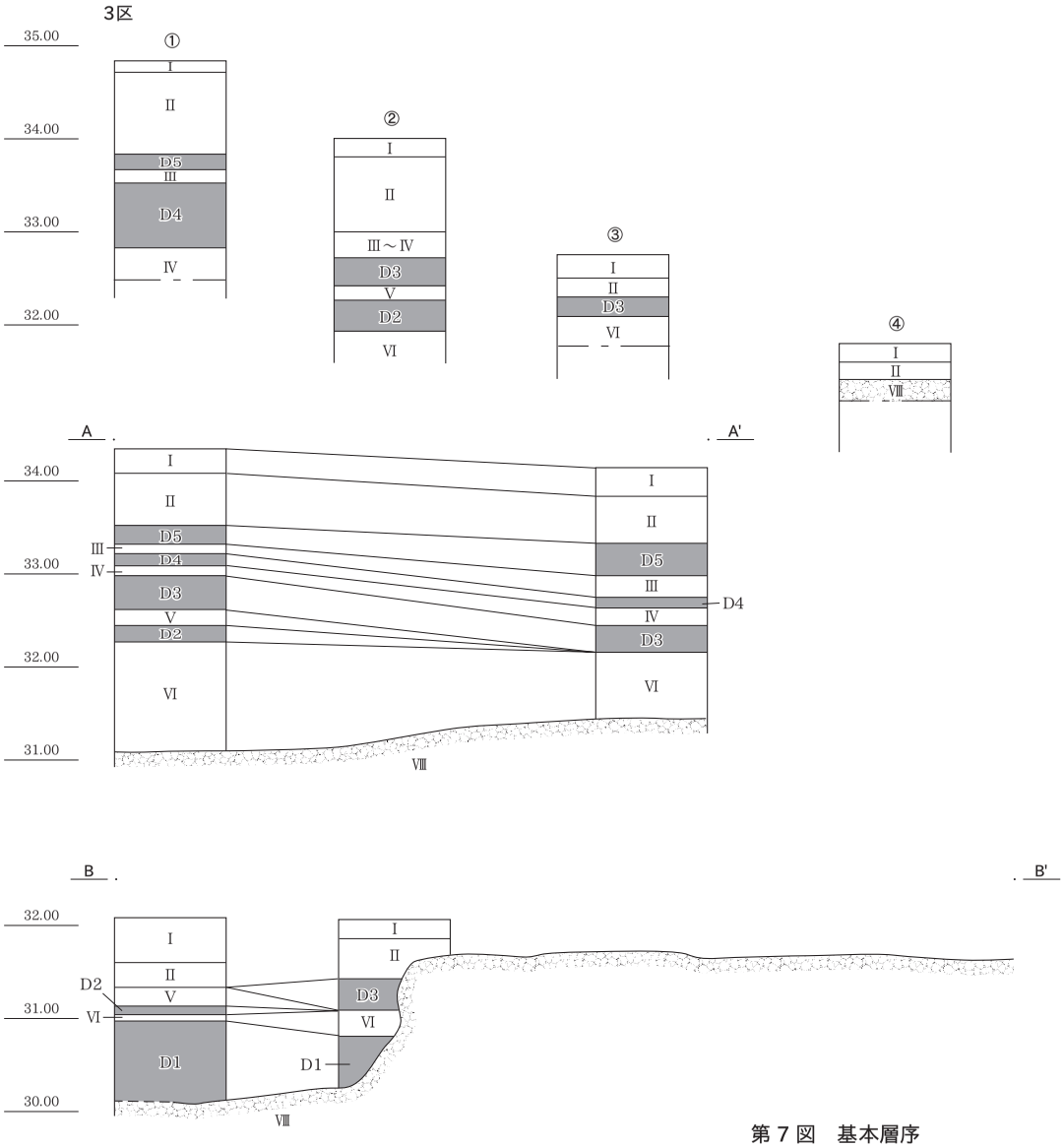
Ⅵ層　にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　しまりあり。

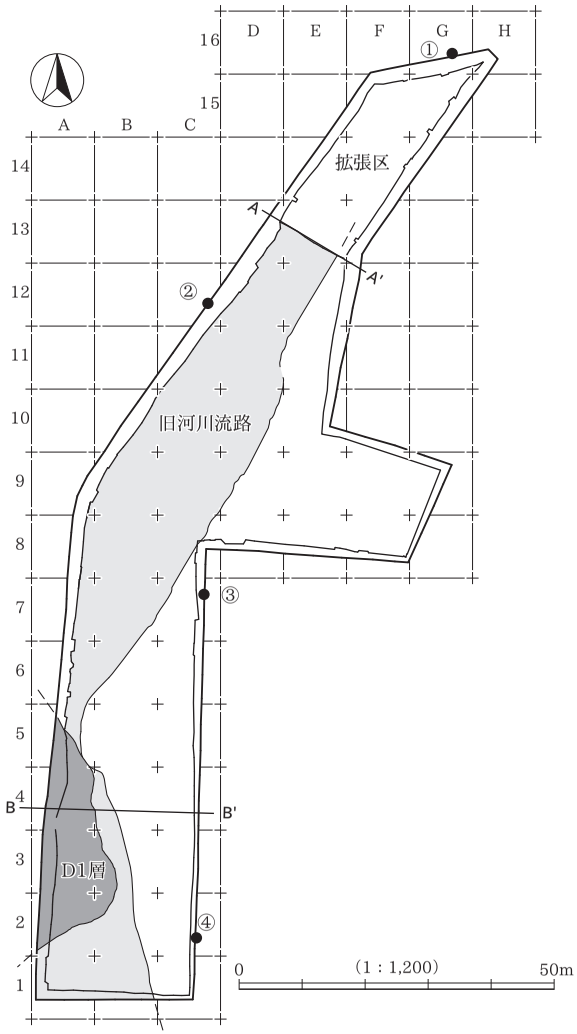
Ⅶ層　にぶい黄褐色砂（10YR5/4）　旧流路内に堆積した砂層。１・2A・B 付近にのみ存在する。

4　遺跡の成り立ち

A　遺物の出土状況から見た土石流と流路

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土石流とともに調査区外から運ばれてきたものである。遺物の動きには人為的な作用が全く加わっていないため、出土状況について次の２つの前提が立てられる。①：すべての遺物は地形の傾斜に従い標高の低い方へ移動する。②：土器片は土砂よりも質量が大きく、移動には相対的に大きなエネルギーが必要であるため、土石流の中心に近いほど分布密度が高く、周辺ほど低くなる。これを利用すると、遺物の出土状況から土石流の動きをかなりの程度復元できる。

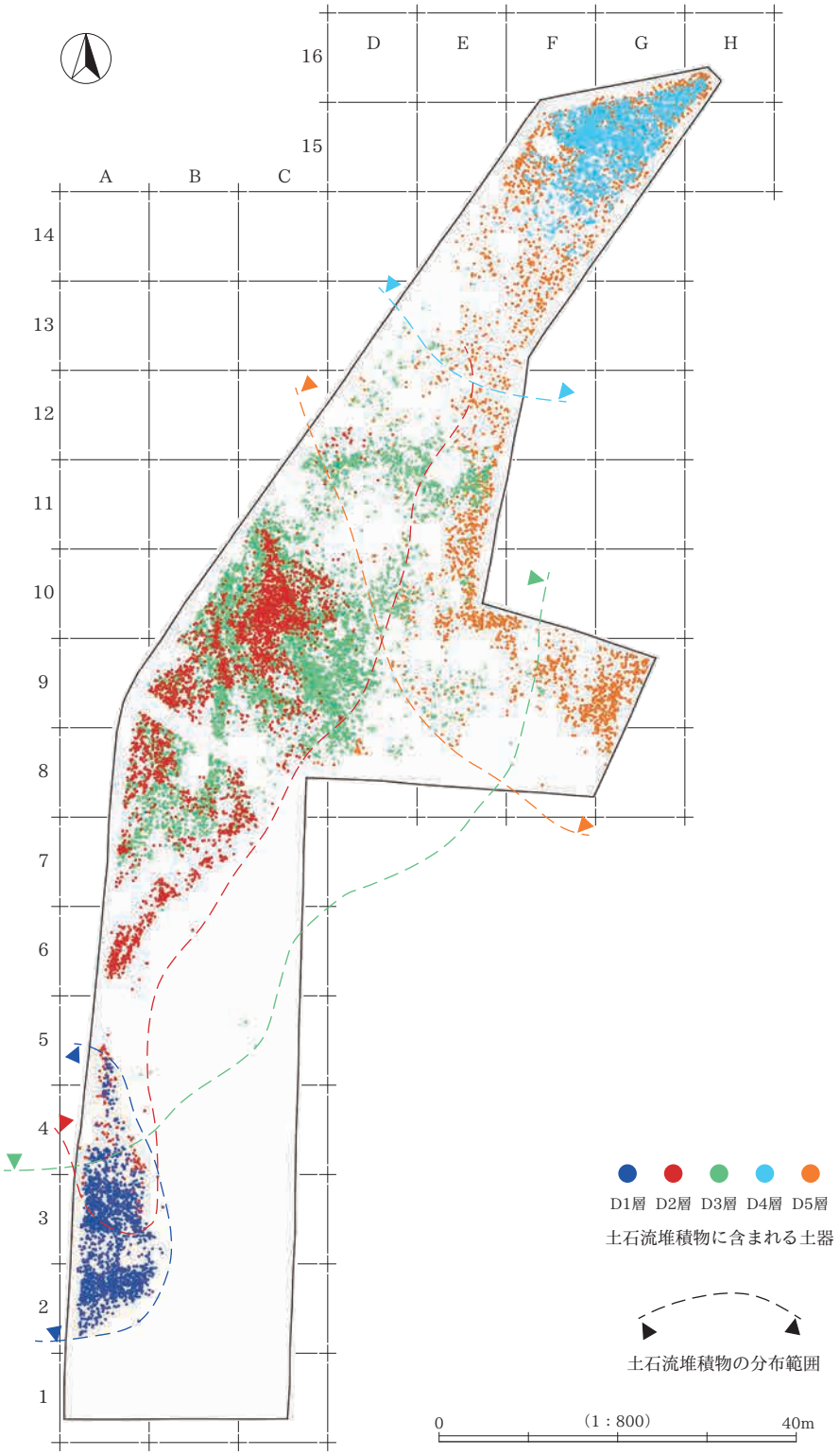

3区
①
②
③
④
35.00
34.00
33.00
32.00
31.00
30.00
I
II
III
III～IV
IV
V
VI
VIII
D1
D2
D3
D4
D5
A
A'
B
B'


A
B
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
①
②
③
④
A
A'
B
B'
拡張区
旧河川流路
D1層
0
(1：1,200)
50m

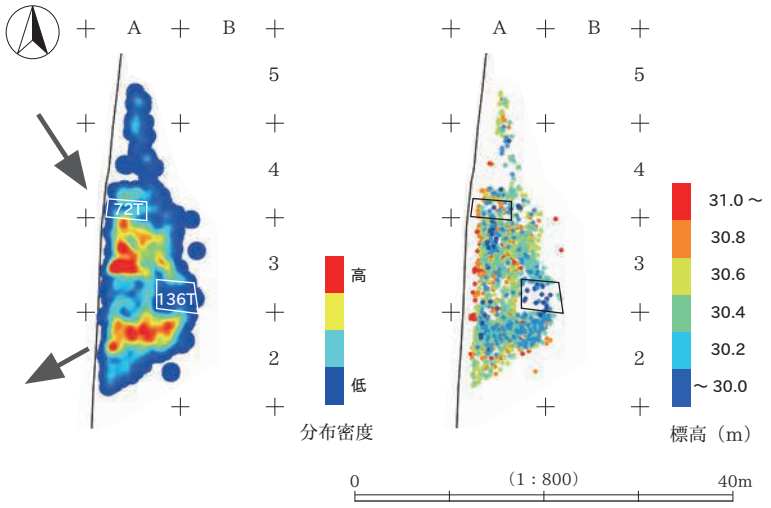
第７図　基本層序

調査では原則としてすべての遺物の位置情報を 1 点ごとに記録して取り上げを行った。ここでは土石流堆積物から出土した土器 19,456 点のデータを用いて遺跡の形成過程を検討する。

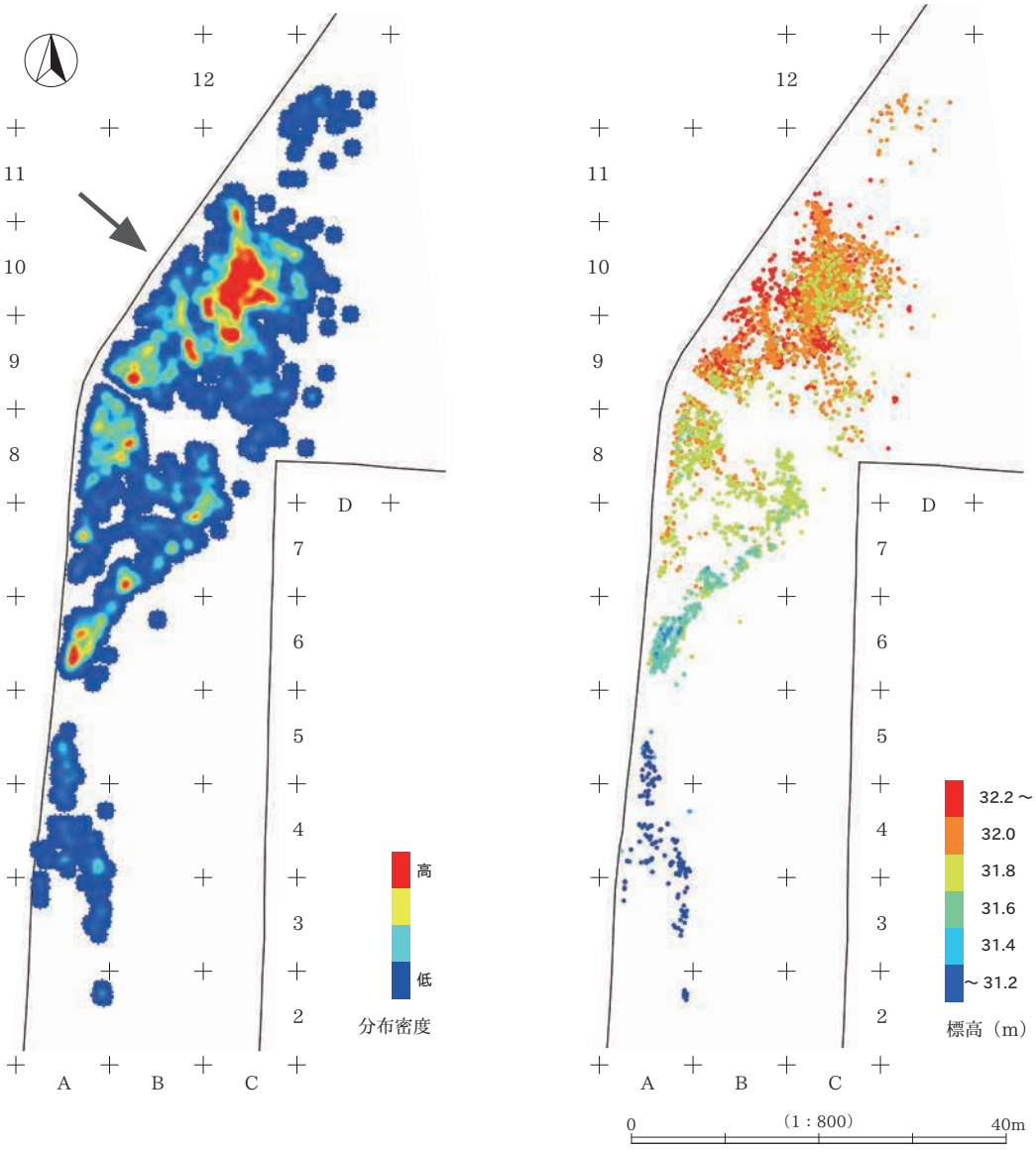
D1 の動き（第 9 図）　Ⅶ層により河川が埋没しつつある段階にⅦ層を切り込んで流入している。遺物の分布密度は 3A20・25 付近が希薄であるが、これは試掘トレンチ（28-136T）と重なるためである。試掘



第 8 図　土石流堆積物と遺物の分布



第 9 図　D1 層の遺物出土状況



第 10 図　D2 層の遺物出土状況

調査では 136T から 922g もの土器が出土していることから、本来は半弧を描くように分布密度の高い地域が存在したことがわかる。調査区周辺の全体的な傾斜を考慮すると、D1 は 4A の西側から調査区に侵入し、旧河川の左岸の立ち上がりにぶつかって進路を変え、南西へ抜けていったと考えられる。左図の矢印は土石流の推定進行方向を示す（第 10 図～第 13 図も同じ）。

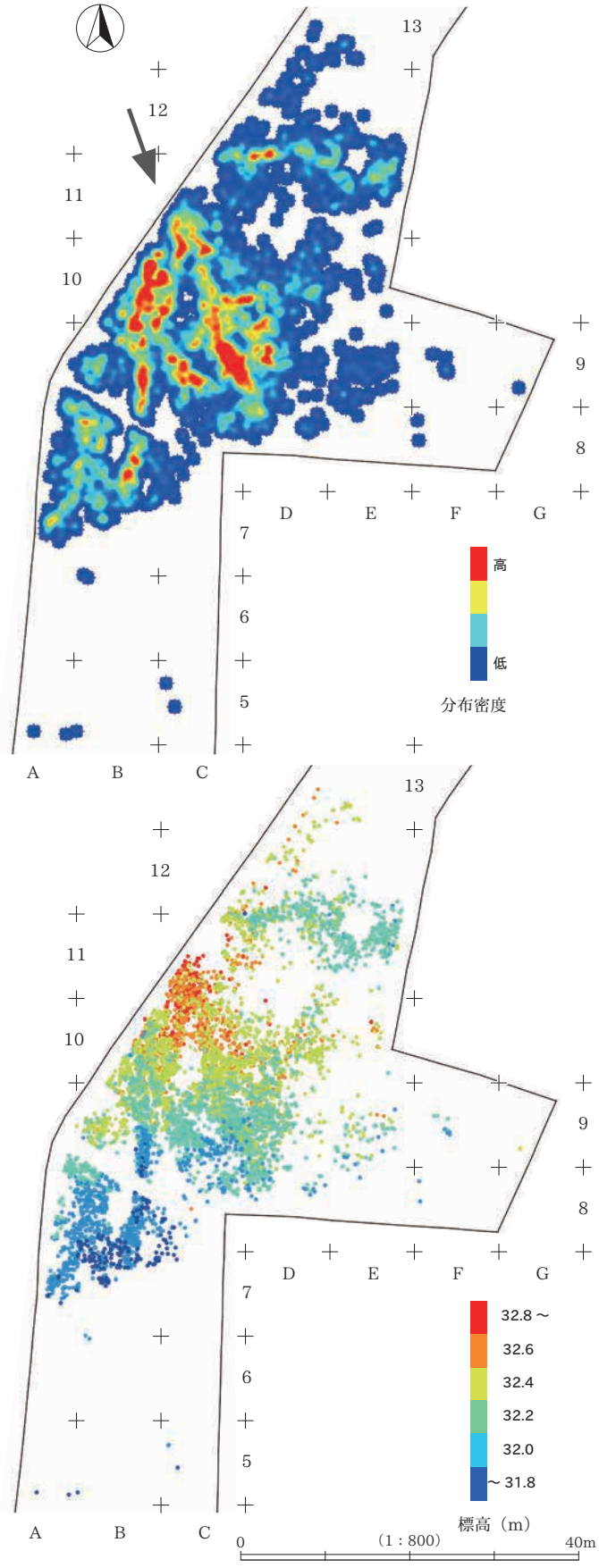
第 9 図右は遺物の出土位置を出土標高によって色分けして示したものである（第 10 図～第 13 図も同じ）。濃い青のドットの分布状況から、土石流の経路の中心に近い部分ほど深くまで土器が入りこんでいることがわかる。

D2・D3 の動き（第 10 図・第 11 図）

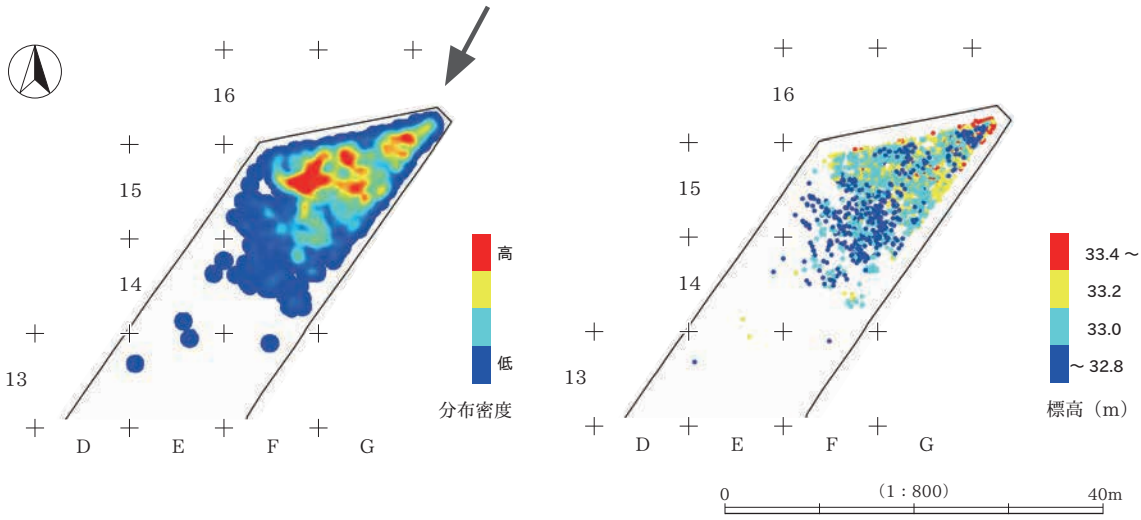
いずれも 10C 付近に分布密度の中心がある。調査区壁のセクションで各層の厚さを見ると、9A ～ 10B が最も厚く堆積しており、調査区への流入口と考えられる（図版 13 の 10B グリッド層序を参照）。D2 層は 10C より北へはほとんど広がらず、遺物の出土標高も北から南へ低くなっていくことから、調査区へ流入後、旧河川の窪地を流下したことがわかる。これに対し D3 層の分布範囲は D2 層ほど南に広がらず、10C を中心に放射状に展開する。これは、D2 層によって旧河川が埋没し、周辺の地形がほぼ平坦化していたためと理解できる。

D4・D5 の動き（第 12 図・第 13 図）

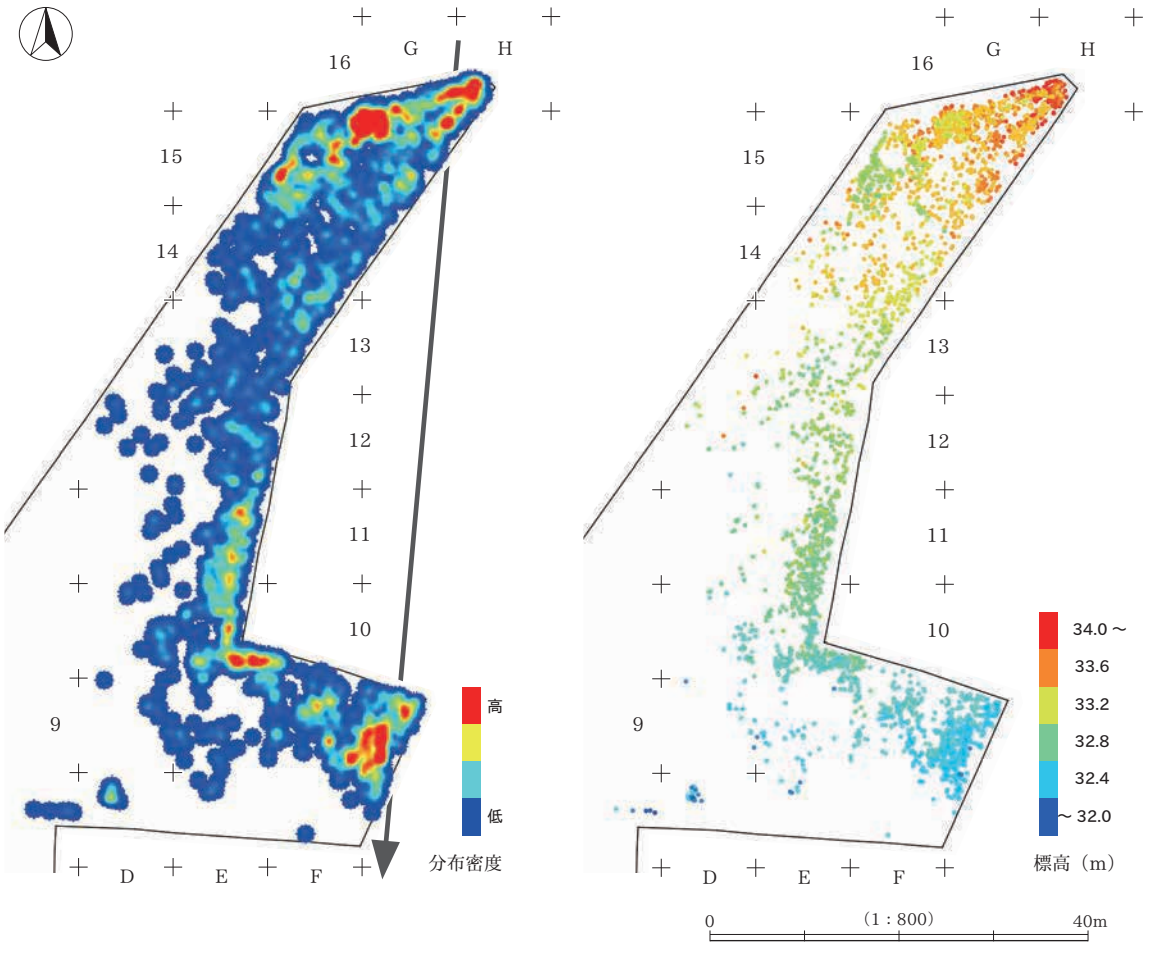
いずれも調査区北端の分布密度が高く、北から調査区へ流入したことがわかる。D4 層に含まれる遺物は 14F 付近で希薄となり、層そのものも 13E 付近で途切れ、南へ広がらないことか



第 11 図　D3 層の遺物出土状況



第 12 図　D4 層の遺物出土状況

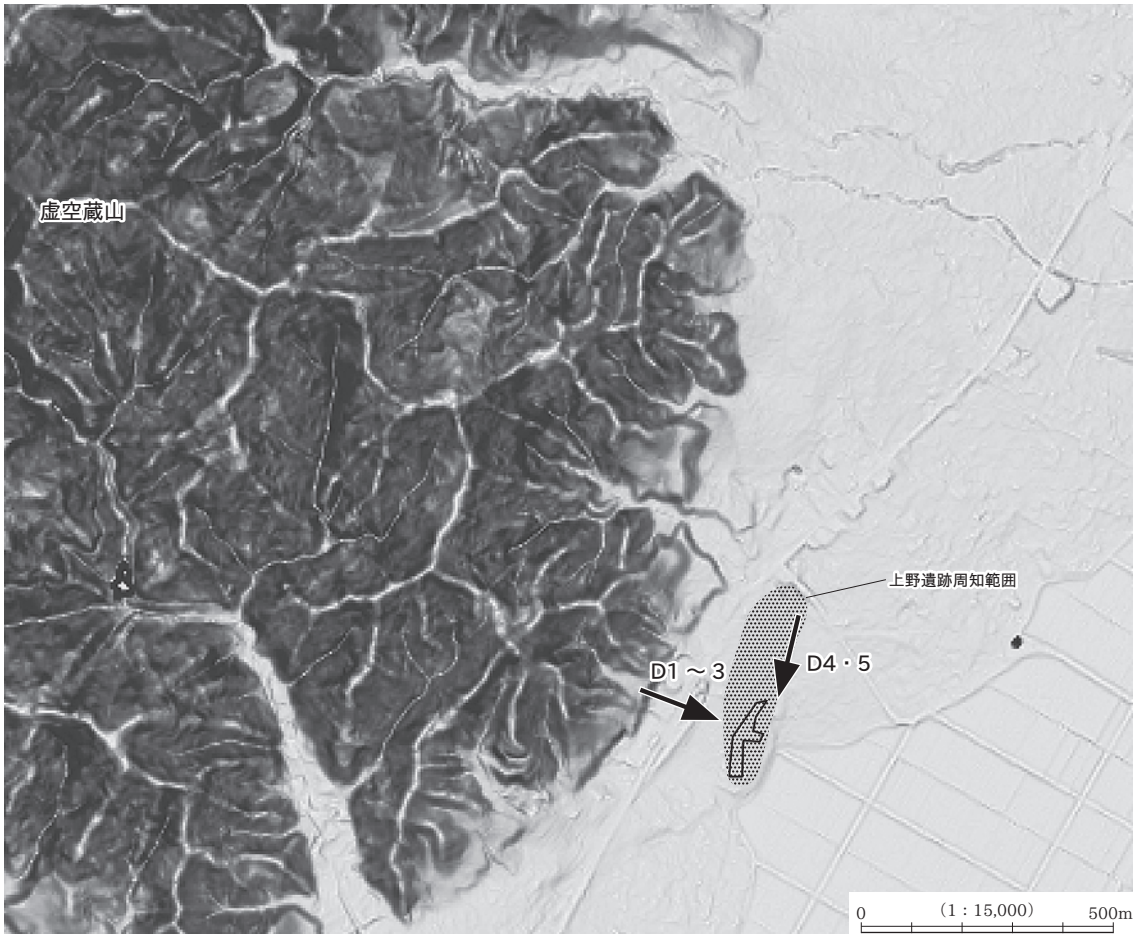


第 13 図　D5 層の遺物出土状況

ら、D4 は調査区へ流入した段階でほぼ推進力を失っていたと理解できる。D5 層は 9G・10E にも分布密度の高い地域があり、西側ほど分布が希薄となることから、調査区の東側をかすめて南下したと考えられる。

B　土石流に襲われた縄文時代の集落

以上のように D1 ～ D5 はそれぞれ特徴的な動きを示すが、調査区への流入方向によって、北西方向からの D1 ～ D3 と北東方向からの D4・D5 に大別できる（第 14 図）。従って、調査区には北側と西側に立地する異なる居住域から流れ込んだ遺物が存在すると結論できる。なお、以上の検討結果は、土石流堆積物及び周辺地形の地質学的分析結果とも一致する（第Ⅵ章 5）。それぞれの集落の詳細については、第Ⅴ章で出土遺物の様相を把握した後に第Ⅶ章でまとめる。



第 14 図　調査区周辺の地形
（国土地理院基盤地図情報数値標高モデル（5m メッシュ）に加筆）

第Ⅳ章　中・近世の遺構と遺物

1　概　　要

中・近世の遺構は、墓２基（以下、SZ1・SZ2 と呼称）である。いずれも縄文時代の包含層を掘削中に検出した。2 基は直線距離で約 30m を隔てて構築されており、SZ1 は土葬墓、SZ2 は火葬墓と葬法も異なることから、両遺構の関連性は薄い。このほか、表土掘削中に珠洲焼の片口鉢の小片が出土した。

2　遺 構 と 遺 物

A　SZ1（図版３・４・16）

8C5・10、9C1・6 に位置する土葬墓である（図版３・16）。平面形は楕円形を呈し、長軸 112cm、短軸 88cm を測る。長軸は北北西を向く。遺構検出面からの深さは 31cm で断面形は箱状を呈する。掘り込み面をⅡ層上面と仮定すると本来の掘削深度は約 70cm となる。覆土は、１層は基本層序Ⅱ層による埋め戻し土であり、遺体付近の２層も同質であるがやや粒子が細かく粘性が高い。

遺体は成人女性と推定される（第Ⅵ章 4）。骨の残存状況から、前屈姿勢で頭部を北とし、東向きに埋葬されたと推定される。頭骨と大腿骨は埋葬時の解剖学的位置を比較的良好にとどめているが、全体的に植物根や小動物の攪乱により遺存状況は悪い。

銭貨は遺構東側を掘削中に出土したことから、遺体の胸元に置かれたか、握られていたと推定される。6 枚が重なって錆着していたが、中心の孔の位置は揃っていたため、紐を通してまとめられていた可能性がある。開元通宝（初鋳 621 年）・熙寧元宝（1068 年）・淳化元宝（990 年）・皇宗通宝（1038 年）・元豊通宝（1078 年）・天聖元宝（1023 年）の順に重なっている（図版 4-1 ～ 6）。

B　SZ2（図版２・４・16）

6A14・19 に位置する火葬墓である（図版２・16）。北側を撹乱により欠失するが、平面形は１辺約 50cm の隅丸方形と考えられる。遺構検出面からの深さは 16cm で断面形は皿状を呈する。掘り込み面をⅡ層上面と仮定すると本来の掘削深度は約 65cm となる。覆土は火葬時の燃料に由来すると考えられる炭化物を主体とする黒色土である。出土した人骨は僅かであるため性別は判別不能であるが、成人と推定される（第Ⅵ章 4）。

遺物は開元通宝が１点出土した（図版 4-7）。SZ1 出土例に比べ摩耗しており非常に薄い。開元通宝は唐代の銭貨であるが、遺構の構築年代は、覆土中の炭化材の放射性炭素年代測定値から 17 世紀中葉以降と推定される（第Ⅵ章 2）。

第Ⅴ章　縄文時代の遺物

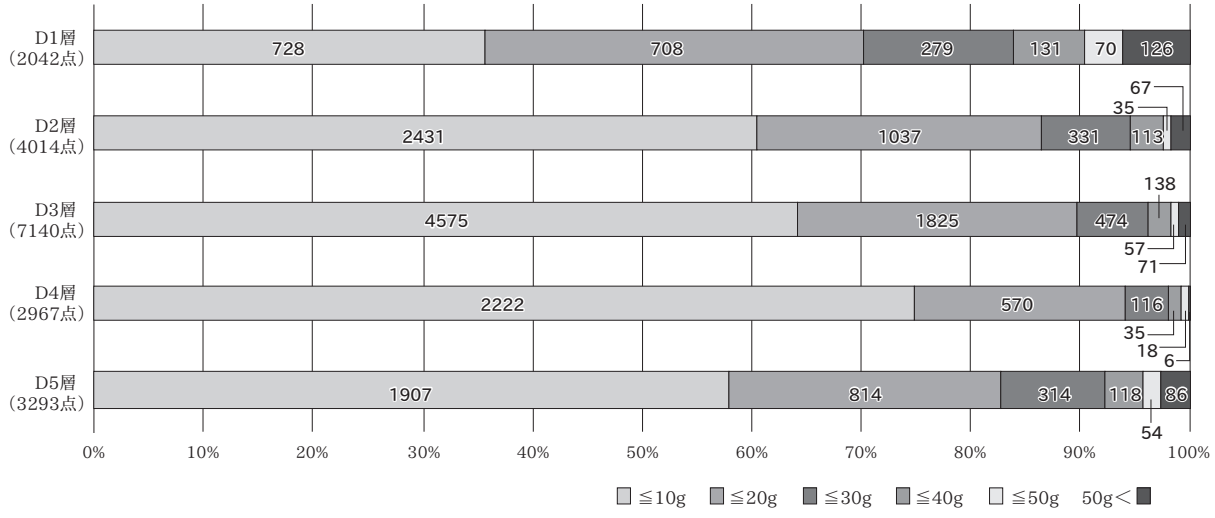
1　概　　要

縄文時代の遺物は、収納箱（内寸 54cm × 34cm × 10cm）約 90 箱分が出土した。内訳は土器・土製品・石器・石製品からなる。大部分は土器であり、土製品は図化した 9 点がすべてである。石器・石製品については、土石流堆積物から出土するという当調査区の性質上、自然礫との識別が極めて困難であり、現場で見落とした遺物も多いと思われる。こうした状況から、確実な加工痕や使用痕を伴うもののみを石器と認定し、これらはすべて掲載対象とした。

	出土点数	総重量（g）	平均値（g）	中央値（g）
D1 層	2,042	43,010	21.1	13.1
D2 層	4,014	57,351	14.3	8.2
D3 層	7,140	80,250	11.2	7.7
D4 層	2,967	24,247	8.2	6.2
D5 層	3,293	42,459	12.9	8.5
計	19,456	247,317	12.7	8.1

第 1 表　土器の層位別出土量

調査は、出土遺物の位置情報を 1 点ごとに記録する方針で進め、結果的に遺物総体の 8 割強について実施した。出土位置情報を持つ遺物は、整理作業においてすべて重量計測を行った。第 1 表・第 15 図はその結果から土器のみを抽出し、出土層ごとに集計したものである。出土点数 19,456 点は第Ⅲ章 4 で使用したデータと一致する。第 1 表によると、土器片 1 点当たりの平均重量は D1 層が突出して高い数値を示す。これは、D1 層において完形ないし半完形で 1 か所にまとまって出土する土器が多いことと関連する（図版 13～15）。また、第 15 図によると D1 層出土土器は 50g 以上の大破片が多いだけでなく、10g 以下の小破片の割合が D2 層～ D5 層に比べて極めて低い点も指摘できる。以上のように、重量の点で D1 層と D2 層～ D5 層出土土器には有意な差が見出せ、調査区への流入状況の相違が示唆される。次節では、こうした相違が土器の型式や年代とどのような関係にあるのかという点にも留意しながら検討を進める。



第 15 図　土器の層位別重量比

2　土　　器

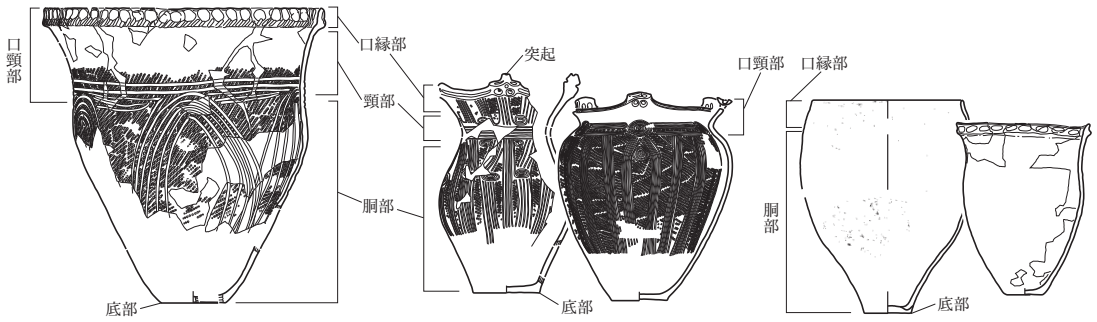
A　資料の抽出と分類

Ⅲ章で述べた調査区の特性上、出土土器の大半を小破片が占める。土石流堆積物ごとの包含遺物の様相を定量的に把握するため、一律に 40g 以上の比較的大きな破片を抽出し、そこに文様や器種の明らかな小破片を加え掲載の対象とした。分類に際しては金子［2002a］や滝沢［2011a］を参考としたが、細分可能な個体数が少ないことから大まかな分類にとどめ（第 16 図）、各説において詳細を記述する。

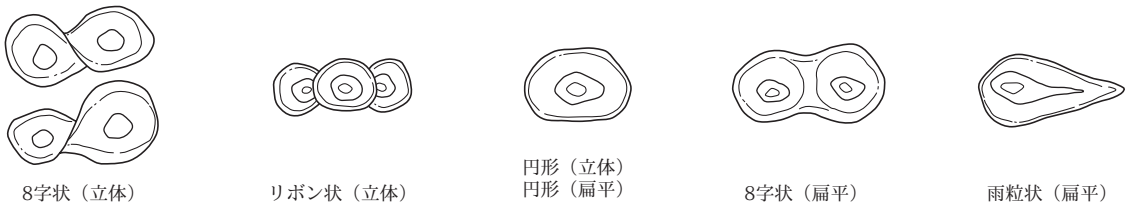
出土土器は、新潟県域の縄文時代後期の在地の土器型式である三十稲場式・南三十稲場式と、非在地系の土器群で構成される。これに「その他」を加えた 4 分類を大分類とし、それぞれ以下のように分類する。

三十稲場式土器　蓋受け状の口縁形態、胴部の刺突文、口端部と頸部を繋ぐ橋状把手、器面を区画する隆帯などを特徴とする。器種によって深鉢・注口土器・蓋に分類する。すべて三十稲場式の新段階に相当し、時期的には南三十稲場式古段階に併行する。

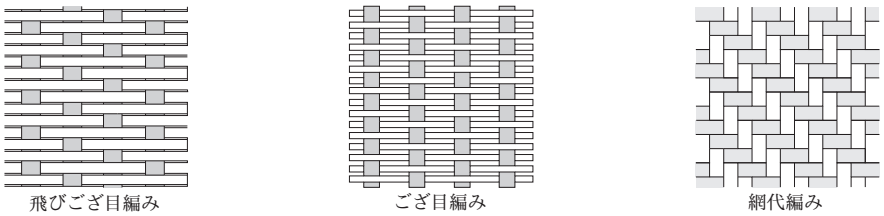
南三十稲場式土器　胴部が張り頸部でくびれる器形、発達した口縁部文様帯と沈線による施文を特徴とする。確認できた器種は深鉢のみである。時期差を示すとされる施文方法によって、A 類（沈線文系土器群）と B 類（多条沈線文系土器群）に細分する。前者は、無文あるいは縄文地に太く浅い沈線を施すもので、施



第 16 図　南三十稲場式土器（深鉢）の分類と部位名称



第 17 図　突起上面観の模式図と名称（金子 2000b より転載、再トレース）



第 18 図　編み方模式図（滝沢 2001 より転載、再トレース）

文後に縄文を磨り消すものを含む。後者は、縄文地に細密な集合沈線を施文するもの、または沈線施文後に縄文を充填するものである。A 類は南三十稲場式古段階、B 類は新段階～最新段階に相当する。最新段階は、集合沈線が細密化し、口縁部に横位に巡らせる特徴によって判別できる。なお、沈線の集合化の傾向が認められるものの、沈線が太く細密化が不十分で 2 期と断定できないものは 1 ～ 2 期とした。

非在地系土器　関東の堀之内式・加曾利 B 式、東北南部の門前式、綱取式の影響を受けたもの、系統不明なものなど多様であるが、客体的な存在であるためここに一括する。器種は深鉢を主体とし、浅鉢・台付土器がわずかに存在する。

その他　在地系の粗製土器・型式不明の土器・底部のみの破片をここに帰属させる。底部片については、滝沢［2011b］を参考に外面の敷物圧痕を分類した（第 18 図）。

B　時期区分と出土傾向

第 2 表に本書で使用する縄文時代後期の時期区分と土器型式の関係を示す。時期区分と在地の土器型式の呼称は金子［2002a］に従い、4a 期と 4b 期は資料が少ないため 4 期にまとめた。非在地系の主体である関東の土器型式との並行関係は金内［2009･2013］を参照した。第 3 表はこれに基づいて掲載遺物を集計したものである。「その他」及び型式不明の「非在地系」は時期不明として扱った。A で述べた資料の抽出方法を採ったことにより、掲載資料の構成比は出土土器全体の傾向をある程度反映していると考えられる。以下ではそのことを前提に、各層の土器の特徴を把握していきたい。なお、時期比定の根拠は各説において示す。

時期区分		在地系	非在地系（関東）
1 期	後期前葉	三十稲場式新段階・南三十稲場式古段階	堀之内 1 式
2 期	後期前葉	南三十稲場式新段階	堀之内 2 式（古･中）
3 期	後期前葉	南三十稲場式最新段階	堀之内 2 式（新）
4 期	後期中葉		加曾利 B1 式
5 期	後期中葉		加曾利 B2 式

第 2 表　土器型式と時期区分

層位		1 期	1 ～ 2期	2 期	2 ～ 3期	3 期	4 期	5 期	不明	合計
D1 層	在地	5	4	16					13	38
	非在地									
D2 層	在地	10		15		3			11	41
	非在地				1		1			
D3 層	在地	9		16		19			18	71
	非在地		1		1	5		2		
D4 層	在地	5		2		2			6	16
	非在地						1			
D5 層	在地	22		4		2			9	40
	非在地	2					1			

第 3 表　掲載土器集計表

まず全体的な傾向として、後期前葉～後期中葉の遺物が確認できるが、前者が多く、後者は 1 割に満たない。また、後期中葉は在地系と断定できる土器が認められない。県内において後期中葉は資料数が減少する時期とされる[品田 1996]。当該期の在地の土器型式として三仏生式が提唱されたこともあるが[長岡市立科学博物館 1957、國島 1988]、現状では否定的な見解が多い［田中・渡邊 1999］。調査区における遺物の様相は、以上のような県内の動向と一致する。

D1 層出土土器は 38 点を掲載する。時期不明を除くとすべて 1 期から 2 期の遺物である。3 期以降の遺物が確認できない点が、D2 層～ D5 層との相違点である。上述のように同一個体片がまとまって出土するものが比較的多いが、時期比定が可能なものはすべて 2 期の所産である。

D2 層出土土器は 41 点を掲載する。2 期の構成比が高い点は D1 層と同様であるが、3 期以降も少量存在する。D1 層と異なり小破片が多いが、49・75 は同一地点でまとまって出土した。

D3 層出土土器は 71 点を掲載する。出土点数は最多である。1 期から 5 期までの遺物が存在する。D1 層・D2 層と異なり、3 期の割合が最も高い。

D4 層出土土器は 16 点を掲載する。1 期から 4 期までの遺物が存在する。1 期の 5 点はいずれも三十稲場式新段階である。

D5 層出土土器は 40 点を掲載する。1 期から 4 期までの遺物が存在する。1 期の 22 点のうち 14 点を三十稲場式新段階が占めること、2 期以降が少ないことは、D4 層と同様の傾向である。

以上をまとめると、2 期が主体の D1 層・D2 層、3 期が主体の D3 層、1 期（三十稲場式新段階）が主体の D4 層・D5 層という 3 群にグルーピングが可能である。第Ⅲ章では、土石流の流入方向の点から、北西方向からの D1 ～ D3 と北東方向からの D4・D5 に大別した。D1 層～ D3 層において漸移的に新しい時期の遺物が加わること、D4 層・D5 層の時期別遺物構成比がほぼ一致することは、第Ⅲ章の分析結果と調和的である。さらに、D1 層出土土器の最新相である 2 期に完形ないし半完形の個体が多く認められることは、D1 の発生と 2 期が時間的に接近することを示唆している。また、D1 層～ D3 層と D4 層・D5 層を比較すると、相対的に後者の出土土器が古い様相を示し、土石流の発生順と土器様相の新旧が逆転することから、D4・D5 の発生時点で土器の給供源の集落はすでに衰退または廃絶していたことが推定される。

C　各　　説

1）D1 層出土土器（図版 4 ～ 6、18 ～ 20）

三十稲場式土器（8 ～ 10）

8・9 は口縁部である。浅鉢としたが断定はできない。上端に半裁竹管による刺突列と 2 条の平行する沈線が巡らされ、8 はこれに弧状及び縦位の集合沈線が加わる。10 は無文の胴部に隆帯が貼り付けられ、刺突が施される。隆帯の連結部には円形窩文が施文される。

南三十稲場式土器（11 ～ 32）

11 は口縁部、12 は胴部である。太く浅い沈線により A 類に分類され、1 期に位置付けられる。

13 は口縁部、14 ～ 16 は胴部である。13 ～ 16 は沈線の集合化が認められるが、沈線が太く細密化が不十分であるため 1 ～ 2 期とした。

17 ～ 32 は縦位または斜位の集合沈線が施されることから B 類に分類され、2 期に位置付けられる。17 はほぼ完形で、口縁部に 8 字状突起が 3 方に配される。それぞれの突起下に 2 個 1 対で穿孔される。口縁端部には突起を繋ぐ沈線が施され、その間に 2 つの円形刺突が施される。口頸部は無文である。頸部は横位集合沈線、2 条の刺突列、渦巻文によって区画される。渦巻文は突起と円形刺突の真下に対応する位置に施されている。胴部には縄文地に縦方向に 6 条 1 束の集合沈線が施される。突起下の渦巻文の下には集合沈線を左右に振り分け、分け目に渦巻文を配置する。18 は口縁部にリボン状突起が付き、突起下に 2 個 1 対で穿孔される。口縁部上端は突起を繋ぐように横位に沈線が施される。頸部は横位の集合沈線により区画され、口頸部と胴部の文様は縄文地に縦位の集合沈線と渦巻文によって構成される。19 ～ 26 は口縁部、27 ～ 32 は胴部である。22 は波状口縁の波頂部に穿孔される。24 ～ 26 は口縁端部に刻みが施される。27 は横位の集合沈線によって頸部が区画され、縦位の集合沈線、渦巻文が施される。24・27・28・32 は文様間に縄文が充填される。

非在地系土器（33・34）

33 は深鉢の口縁部である。口縁部に突起を有し、口縁端部には沈線と円形刺突、棒状工具の側面による刻み目状の押圧が施される。突起下には円形刺突、縦位沈線、縄文が施される。34 は器種不明の胴部

である。隆帯が貼り付けられ、棒状工具の側面による押圧が施される。隆帯下には斜位の沈線が施される。2点とも形式・時期は不明である。

その他（35 ～ 45）

すべて深鉢である。35 は条線、37・40 は縦位の沈線（40 は集合沈線）、41 は格子目状の沈線、39・43・44 は縄文、36 は条痕が施される。38 は口縁部に両側から焼成後に穿孔されており、補修痕と考えられる。42 ～ 45 は底部で、43 の外面には網代編みの圧痕が残る。

2）D2 層出土土器（図版 6・7、20・21）

三十稲場式土器（46 ～ 48）

46 は深鉢の口縁部である。波頂部に 8 字状突起を有し、頸部と胴部の境に鎖状の沈線が巡る。胴部は縄文地に突起下端から垂下する沈線が施文される。47 は胴部の破片である。横位の隆帯を貼り付け後、隆帯下位に沿って刺突列が施される。48 は蓋と考えられる。

南三十稲場式土器（49 ～ 72）

49 ～ 54 はＡ類に分類され、1 期に位置付けられる。49 は口縁部の上段に指頭圧痕を巡らし、下段に斜位の刻みを施す。頸部は横位の沈線によって区画され、それより上位は無文である。胴部には縄文地に逆Ｕ字状の沈線が施される。以上の特徴から、柏崎市十三本塚北遺跡Ｂ群土器を標準とする小仙塚類型に比定できる［品田ほか 2001・品田 2002］。50・54 は口縁部である。50 は先端の鋭い棒状の工具による刺突列、横位の凹線、縄文が施される。54 は波頂部に穿孔され、沈線間の縄文が磨り消される。51 ～ 53 は胴部である。53 は沈線間の縄文が磨り消される。

55 ～ 69 はＢ類に分類され、2 期に位置付けられる。55 ～ 61 は口縁部である。56、57 は 8 字状突起を有し、突起下に穿孔される。60 は上端に刻みが施される。61 は上端に沈線が施され、波頂部には穿孔の痕跡が残る。頸部は横位集合沈線と円形刺突列によって区画され、区画より上位は縄文が施される。55・58・59 は文様間に縄文が充填される。62 ～ 69 は頸部から胴部にかけての破片である。64 は弧状の集合沈線が施される。67 は沈線間に 1 条の円形刺突列が巡らされる。

70 ～ 72 はＢ類に分類される。口縁部に横位の集合沈線が施される特徴から南三十稲場式最新段階であり、3 期に位置付けられる。口縁部上端には刻みが施される。

非在地系土器（73・74）

73 は深鉢の口縁部である。波頂部に 3 条の沈線がＵ字状に施される。口頸部に縄文を施文後、横位沈線により区画を描き、縄文が磨り消される。東北系の影響を受けた土器で、2 ～ 3 期の所産と考えられる。74 は加曾利 B1 式の深鉢の口縁部である。4 期に位置付けられる。口縁部に並行する横位沈線の間に縄文が充填される。

その他（75 ～ 86）

すべて深鉢である。75 はほぼ完形で、口縁部に南三十稲場式古段階に特徴的な指頭圧痕が巡らされる。胴部が無文であり、粗製土器に分類されるためここに含めたが、第 3 表では 1 期として集計している。78 ～ 80 は胴部であり、78・80 は縦位沈線、79 は縄文を施す。81 ～ 86 は底部であり、81 ～ 84 は外面に飛びござ目編みの敷物圧痕が残る。

3）D3 層出土土器（図版 7 ～ 9、21 ～ 23）

三十稲場式（87・88）

87・88 は蓋の口縁部である。外面を沈線で区画した後、刺突が施される。

南三十稲場式（89 ～ 130）

89・90 はＡ類に分類されることから、91・93・95 は口縁部に施文され、口頸部に縄文が施される特徴から、94 は口頸部が無文である特徴から、それぞれ 1 期に位置付けられる。92 の口縁部の指頭圧痕も 1 期の南三十稲場式古段階の特徴である。

96 ～ 107 は口縁部であり、集合沈線が確認できないものも含め、2 期の特徴である口縁部上端の刻みを有する。102 は 8 字状突起の下に穿孔され、孔の左右に沈線が巡らされる。107 は口縁部に刻みと横位沈線､その下位に縦位及び斜位の集合沈線が施される。口縁部内面にも刻みと沈線が施される。口頸部～胴部の 108 ～ 111 はＢ類に分類され、2 期に位置付けられる。110 は沈線間に縄文を充填する。

112 ～ 130 はＢ類に分類される。口縁部に横位の集合沈線が施される特徴から南三十稲場式最新段階であり、3 期に位置付けられる。112 ～ 120 は突起を有する口縁部である。突起の形状は 112 ～ 116 が 8 字状、117 ～ 120 が円形である。114・117 は突起下に穿孔される。114 は孔から左右に沈線が巡らされ、口頸部の横位沈線間には 1 条の円形刺突列が施される。115 は突起下の 2 個 1 対の孔から左右に沈線が巡らされる。112 ～ 114、117 ～ 124 の口端部には刻みが施される。

非在地系土器（131 ～ 140）

131 は深鉢の口縁部で、波頂部下に対応する横位隆帯上に円形窩文が施される。口頸部には逆Ｕ字状の沈線が施される。これらの特徴には東北南部の門前式の影響が看取でき、1 ～ 2 期に位置付けられる。132 は深鉢の口縁部である。矢羽根状の刻みが在地の土器にない特徴であるためここに含めたが、型式は不明である。133 は堀之内 2 式の深鉢の口縁部としたが、浅鉢の可能性もある。口端部に沈線、内面に横位集合沈線と弧線文が施される。2 ～ 3 期に位置付けられる。134 は口縁部の 4 方に突起を配し、端部に刻みが施される。胴部に 9 条の横位の集合沈線が巡らされ、突起の真下に対応する位置で区画文が上描きされる。底面には飛びござ目編みの敷物圧痕が残る。135 は連鎖状文が施される。136 は縄文地に沈線を施文した後、縄文が磨り消される。137 は横位の集合沈線、連鎖状文が施される。134 ～ 137 は精選された胎土が使用されており、器壁が非常に薄く硬質である。表面は丁寧に磨かれ、光沢のある黒色を呈する。堀之内 2 式新段階に並行する石神類型である［秋田 1997］。138 は深鉢の口縁部である。内側の上部に 8 字状貼付文を伴う球状の突起が付く。内面には横位の沈線が施される。堀之内 2 式新段階と考えられる。139 は深鉢の口縁部である。沈線間に縄文が充填される。波頂部と頸部の沈線間に円形刺突が施される。140 は台付土器の底部である。縄文地に横位沈線が施された後、沈線間に円形刺突が施される。その横に穿孔される。底部内面に網状葉類の木葉痕が残る。139・140 は加曾利 B2 式と考えられる。

その他（141 ～ 157）

141 は台付土器の底部である。内底部に丁寧なナデ、外面は底部ケズリ調整ののち、台部貼付のためのナデ調整が確認される。142 ～ 148 は深鉢の口縁部である。144 は縄文地に 2 条の横位沈線が巡らされる。145 は穿孔を有する。146 は胴部にかけて残存する。器形は胴部に緩やかな膨らみを持ち、口縁がやや内傾する。外面は斜位の条痕が残る。149 ～ 157 は深鉢の底部である。149・150 は飛びござ目

編み、151 はござ目編み、152 は網状葉脈の木葉痕の敷物圧痕が残る。153 の底部外面はナデによって仕上げられる。

4）D4 層出土土器（図版 9・10、23）

三十稲場式土器（158 ～ 162）

158 ～ 160 は深鉢である。158 は口縁部で、蓋受け状の口縁形態を呈する。縦位の貼付文上に棒状工具の側面による押圧が施される。端部に残る孔の痕跡から、紐かけ状の突起を持つと推測される。159・160 は胴部である。159 は沈線施文後に縄文が施される。160 は横位に隆帯を貼り付けた後、隆帯端に円形窩文が施される。円形窩文下から U 字状に別の隆帯が貼り付けられる。隆帯外には刺突が施される。161 は蓋の口縁部、162 は蓋の摘みである。沈線と刺突が施される。

南三十稲場式系土器（163 ～ 166）

163・164 はＢ類に分類され、2 期に位置付けられる。深鉢の口縁部である。163 は上端に刻みが施される。

165・166 はＢ類に分類される。細密化した集合沈線が施される特徴から南三十稲場式最新段階であり、3 期に位置付けられる。166 は口縁部である。波頂部に円形突起を有し、突起下に穿孔される。

非在地系土器（167・168）

167 は深鉢の口縁部である。縄文地に横位沈線を施した後、縄文が磨り消される。加曾利 B1 式と考えられる。168 は深鉢の口縁部である。口縁部の横位沈線間に縄文が充填される。型式は不明である。

その他（169 ～ 173）

169 は深鉢の口縁部である。縄文が施される。170 は口縁部、173 は底部である。器壁が薄い特徴や、出土地点が近いことから、同一個体の可能性があり、その場合、胴部から口縁部まで直線的に伸びるコップ形の器形に復元される。171 は深鉢の口縁部、172 は底部である。

5）D5 層出土土器（図版 9・10、23・24）

三十稲場式土器（174 ～ 187）

174 ～ 181 は深鉢の口縁部である。174・177・179 はねじれる橋状把手を有する。174 は口縁部と胴部が鎖状文によって区画され、鎖状文及び隆帯上に刻み目が施される。175 は波頂部に 8 字状突起を持つ。突起頂部は皿状に窪み、突起下半に円形窩文が施される。口縁部と胴部を区画する鎖状文は円形窩文に連結される。胴部は縄文が施される。176 は突起頂部に円形窩文が、隆帯に棒状工具の側面による押圧が刻み目状に施される。隆帯より上位に楕円形文が施される。178 は橋状把手の側面に刻みが施される。179 の把手は欠損しているが、8 字状と推測される。側面に刻みが施される。180・181 は隆帯によって口縁部と胴部が区画され、口縁部は無文である。180 は隆帯上に横方向からの刺突、181 は刻みが施される。

182 ～ 186 は深鉢の胴部である。182 は縦位と横位の隆帯上に刺突と円形窩文が施される。183・185・186 は刺突が斜位または横位に並ぶ。184 は突瘤文が施されるが、摩耗が著しい。

187 は注口土器の口縁部である。渦巻状にねじれた突起を伴う把手が付く。把手の側面には刻みが施される。把手の直下から斜め上方向へ突き出す注口を有する。

南三十稲場式土器（188 ～ 201）

188 ～ 190・192 ～ 195 はＡ類に分類されることから、191 は波頂部に大形の穿孔を伴うことから、それぞれ１期に位置付けられる。188 ～ 192 は口縁部である。188 は波頂部に施された円形窩文の周囲に沈線がＵ字状に巡らされる。上端に横走する沈線の端部に円形刺突が施される。頸部には逆Ｕ字状に沈線が施される。189 は円形窩文とそれを囲う沈線が施される。193 ～ 195 は胴部である。193 は沈線間の縄文が磨り消される。

196･197･199 はＢ類に分類されることから、198 は２個１対の穿孔を伴う円形突起を有することから、それぞれ２期に位置付けられる。199 は沈線間に縄文が充填される。

200・201 はＢ類に分類される。口縁部に細密化した集合沈線が施される特徴から南三十稲場式最新段階であり、３期に位置付けられる。200 は円形突起を有し、上端に刻みが施される。

非在地系土器（202 ～ 206）

202 は深鉢の頸部である。頸部に隆帯が貼り付けられた後、連結部に円形窩文が施される。胴部は縄文地に沈線が施される。門前式と考えられ、１期に位置付けられる。203 は深鉢の口縁部である。円形窩文と凹線が施された隆帯がＣ字状に貼り付けられ、上部の孔の周囲を巡ると推測される。胴部は縦位の条痕が施される。綱取Ⅰ式と考えられ、１期に位置付けられる。204 は深鉢の口縁部である。縄文地に横位の沈線が施される。加曾利Ｂ1 式と考えられ、４期に位置付けられる。205･206 は深鉢の口縁部である。205 は外反する端部に刻みが施される。206 は横位の隆帯上に刻みが施される。型式は不明である。

その他（207 ～ 213）

207 ～ 209 は深鉢の胴部である。207・208 は縄文が施される。209 は隆帯による渦巻文が施される。施文方法から中期に遡る可能性がある。210 は台付土器である。上辺の一部に粘土が貼り付けられた痕跡が残る。211 ～ 213 は底部である。211 の外面には飛びござ目編みの敷物圧痕が残る。

３　土　　製　　品

Ａ　概　　要

土製品は９点の土製品が出土しており、その内訳は土偶３点・ミニチュア土器２点・不明土製品２点・土錘１点・耳飾１点である。出土点数がわずかであるため、細分は行わない。また、特定の層位から出土するといった傾向も認められないため、記述は上記の内訳の順に行う。実測図の縮尺は、222 が 1/2、それ以外は 1/3 である。

Ｂ　各　　説（図版 10、24）

土偶

214 は頭部から頸部にかけての破片である。頭頂部の一部と鼻を欠損するが、ハート形土偶と推測される。顔の表現は、眉・鼻梁・小鼻のみで、目・口については省略される。眉及び鼻は細い粘土紐をなで付けることで作出されており、顔面は丁寧なナデ調整によって仕上げられている。円盤状の頭部に太めの粘土紐を粗雑なナデにより貼付け、頸部としている。なお、破損面も含めて全体的にやや磨滅を伴う。D1 層から出土した。

215 は胴部破片である。指頭押圧による乳房の作出の後、縦位の極細の沈線が正面、側面、背面に施

される。また、両側面から押圧を加えることで腰部に浅い括れが表現されているが、沈線施文後に行われたため、側面の沈線は潰れ、磨り消された状態である。破損面も含めて全体的に磨滅が著しい。D5 層から出土した。

216 は腕部破片である。器面は丁寧なナデ､側縁に工具の木口端部を用いた刻みが施される。形状･紋様･調整等の観察では左右どちらの腕部であるかの判断がつかないが、便宜的に実測図上では右腕として取り扱った。D5 層から出土した。

ミニチュア土器

217 は、底部から胴部下位にかけての破片である。胴部は平底から直線的に立ち上がり、器面はナデ調整により仕上げられる。残存部位の形状から深鉢を模倣したものである可能性がある。破損面の観察から底部と胴部の境界に接合帯剝離が認められ、粘土円盤に粘土紐巻き上げまたは輪積みにより成形されたと考えられる。また、器厚も一定に整形され、深鉢に近い成形技法で丹念に製作されたものと判断される。D2 層から出土した。

218 は、底部から口縁部にかけての破片である。不整形な鉢状の形態を呈する。断面には底部と胴部の境界に接合痕が観察される。塊状の粘土円盤に粘土紐を積み足したものと判断されるが、整形は粗雑な指頭押圧・ナデのみで成され調整は施されず、技法的には手づくねに近い。217 とは形態・技法に明確な相違が認められる。破損面も含めて磨滅が著しい。D5 層から出土した。

不明土製品

219 は円錐の頂部を水平に切断した形状の環状土製品の一部と推定される。焼成は良好で、器面はナデ調整を施し平滑に仕上げるなど、比較的丁寧に造形されている。D3 層から出土した。

220 は 219 と同様の形状で直径が 2 倍程度のものと推定されるが、器形の歪みから楕円形の可能性もある。焼成は堅緻で器面調整はミガキが施される。法量の相違は認められるものの、形態や調整は 219 と近似する。Ⅱ層から出土した。

土錘

221 は、平面形は長楕円、断面形は楕円形を呈し、完形である。器面はケズリ・ナデによる調整が施され平滑に仕上げられる。長軸方向に紐掛け用の溝が巡らされているが、擦れなど使用痕跡は認められない。D1 層から出土した。

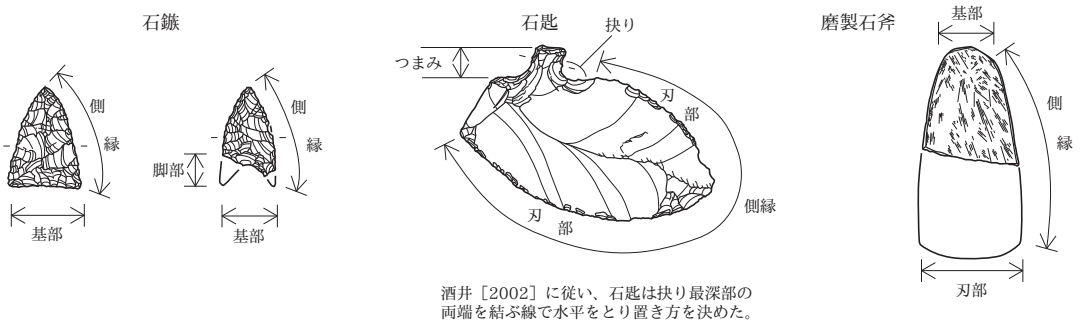
耳飾

222 は、形態は滑車状を呈し、表面径に対し背面径がわずかに狭い。外面は縦位のミガキ調整によって仕上げられる。内面もミガキ調整を施すが、粗雑で下地にナデなどの調整痕を残す。きめ細かい生地土が用いられ、焼成も良好である。器面は少々磨滅を伴う。D5 層から出土した。

4　石器・石製品

A　概　　要

石器・石製品と判断したものは 74 点出土した。内訳は、石鏃 4 点・石匙 1 点・板状石器 1 点・磨製石斧 1 点・不明石製品 1 点・磨石類 3 点、砥石 1 点のほか、剝片類・石核などがある。剝片類・石核を除く 12 点をすべて図化した。土製品と同様、出土点数が少ないため、細分は行わない。また、D5 層の出土割合がやや高いものの、層位ごとの石器の特色は認められないため、記述は上記の内訳の順に行う。



酒井［2002］に従い、石匙は抉り最深部の
両端を結ぶ線で水平をとり置き方を決めた。

第 19 図　石器の部位名称

石器の観察・分類・図化には次の文献を参照した［鈴木 1991、滝沢ほか 2002・2011、田中 2004］。色調及び石材は観察表に記載した。実測図の縮尺は、石鏃は 2/3、石匙・板状石器は 1/2、それ以外は 1/3 である。第 19 図に、石器・石製品の部位名称及び図面の凡例を示す。

B　各　　説（図版 10、24）

石鏃（223～226）

223 は平基無茎石鏃である。側縁は緩やかに湾曲する。平基としたが基部は浅く弧状に凹む。正面は全体に二次加工が施される。裏面は周縁に二次加工を施し、素材獲得時の主要剥離面を大きく残す。略完形で、右側脚部の先端をわずかに折損する。D2 層から出土した。

224 は円基鏃である。側縁は直線的で、基部の作り出しは不明瞭である。正面は全体に二次加工を施す。裏面は周縁に二次調整を施し、素材の主要剥離面をわずかに残す。D5 層から出土した。

225 は平基無茎石鏃である。側縁は直線的だが先端へ向かってわずかに湾曲する。両面に丁寧な二次加工が施され、側縁両側からの剥離により鏑状の稜が作出される。先端付近を中心に微細な剥離・欠損が認められる。出土層位は不明である。

226 は凹基無茎石鏃である。側縁は緩やかに湾曲する。正面及び裏面に二次加工が施される。先端付近に微細な剥離が認められる。右側側縁の一部、脚部の左側先端及び右側の大部分を折損する。D4 層から出土した。

石匙（227）

227 は横形石匙である。木の葉状の縦長剥片を素材とし、周縁に二次加工を施し製作されている。刃部となる側縁は裏面側に押圧剥離され、片刃状に作り出されている。素材の打面は無調整で残されており、自然面である。正面の下側縁に部分的に残る微細な剥離は使用痕の可能性がある。D3 層から出土した。

板状石器（228）

228 は、平面形は不整円形を呈する。小型で扁平な自然礫の正面全周を加工して、刃部を片刃状に作り出している。微細な剥離痕が下側縁から横側縁にかけて認められ、使用痕の可能性がある。D5 層から出土した。

磨製石斧（229）

229 は、刃部側を大きく折損するが、基部側にすぼまる撥形と推定される。全面を丁寧な研磨により整形する。正面及び右側面の一部に研磨痕に切られる敲打痕が確認される。D5 層から出土した。

不明石製品（230）

230 の平面形は台形を呈し、上下・両側が面取りされる。石質が軟質で、器面には細密な条痕や石材が含有する鉱物粒の引きずりに伴う条痕が観察されることから、ケズリによって器形が整形されたと推定される。中心よりやや上位に小孔が穿たれるが貫通していないことから、未成品の可能性がある。用途・機能は不明だが、穿孔を伴う軽石製石製品は村上市長割遺跡（第 20 図 1）や旧朝日村熊登遺跡［横山 1976］に類似のものがあり、浮子として報告されている。一方で丹念に面取りされる形状から垂飾等の装身具の未成品の可能性もある。類例（第 20 図）は東北地方から北海道にかけて認められる［日本考古学会 2016 年度弘前大会実行委員会 2016］。D5 層から出土した。

磨石類（231）

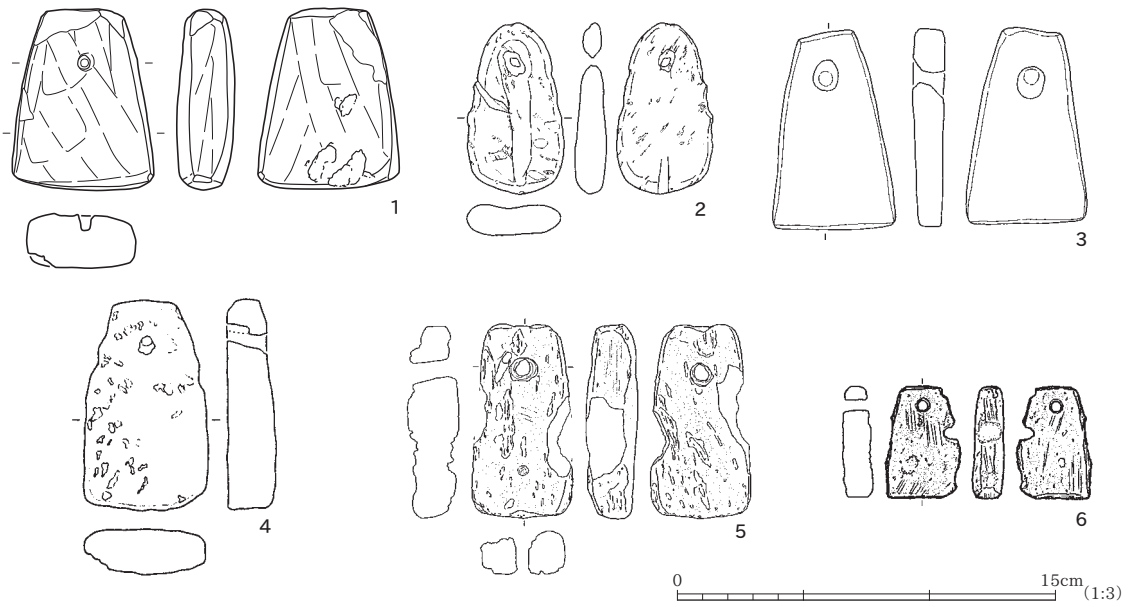
231 は楕円礫を素材とする凹石である。正面及び裏面に凹痕が確認される。正面の一部及び裏面上半に磨痕が観察される。D5 層から出土した。

232 はやや扁平の楕円礫を素材とする凹石である。下半を折損する。表面及び裏面に凹痕が観察される。右側縁に打撃痕が確認できるが人為的なものかは不明である。D5 層から出土した。

233 は長楕円礫を素材とする敲石である。上下両端が敲打により潰れて面を成しており、ハンマーとして使用されたと判断される。右側面上方に弱い磨痕が認められる。Ⅱ層から出土した。

砥石（234）

234 は、大型の板状礫の正面及び裏面の全体に磨面が観察される。大きく欠損し本来の形状は不明である。D5 層から出土した。



1 上野遺跡　2 長割遺跡　3 八木遺跡（秋田県）　4 大石平Ⅱ遺跡（青森県）　5・6 川目 A 遺跡（岩手県）

第 20 図　軽石製不明石製品の類例

第Ⅵ章　自然科学分析

1　花　粉　分　析

斎藤崇人（パリノ・サーヴェイ株式会社）

A　試　　料

試料は、発掘調査時に確認された堆積層のうち、基本土層のⅢ層（No.1）、Ⅳ層（No.2）、Ⅵ層②（No.3）およびⅥ層①（No.4）より採取された堆積物試料４点である。

これらの試料の室内観察では、Ⅲ層（No.1）がにぶい黄褐色を呈するシルト、Ⅳ層（No.2）が灰黄色シルト～極細粒砂が混じるオリーブ褐色を呈する砂質シルト、Ⅵ層②（No.3）が炭化物が僅かに混じる褐色を呈するシルト、Ⅵ層①が黄褐色を呈するシルトからなる。

B　分　析　方　法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や［島倉 1973］、［中村 1980］、［三好ほか 2011］等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類を－（ハイフン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

C　結　　果

結果を第４表に示す。分析に供された堆積物試料４点はいずれも、花粉化石の産出が少ない。また、検出された花粉化石の多くは花粉外膜が破損・溶解しているなど保存状態が悪い。

各試料の産状についてみると、Ⅳ層（No.3）からは花粉化石は１個体も検出されず、他のⅢ層（No.1）、Ⅳ層（No.2）およびⅥ層①（No.4）は花粉化石が僅かに産出するが、いずれも 10 個未満である。なお、3 試料より検出された種類は、木本花粉ではマツ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属、草本花粉ではイネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科などである。

種類	Ⅲ層 No.1	Ⅳ層 No.2	Ⅵ層② No.3	Ⅵ層① No.4
木本花粉				
マツ属	2	－	－	2
ハンノキ属	1	－	－	－
コナラ属コナラ亜属	－	1	－	－
ブナ属	1	－	－	－
ニレ属－ケヤキ属	－	1	－	1
草本花粉				
イネ科	2	1	－	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	2	－	－
アカザ科	1	－	－	－
不明花粉				
不明花粉	2	1	－	－
シダ類胞子				
シダ類胞子	45	40	12	16
合　計				
木本花粉	4	2	0	3
草本花粉	3	3	0	1
不明花粉	2	1	0	0
シダ類胞子	45	40	12	16
合計（不明を除く）	52	45	12	20

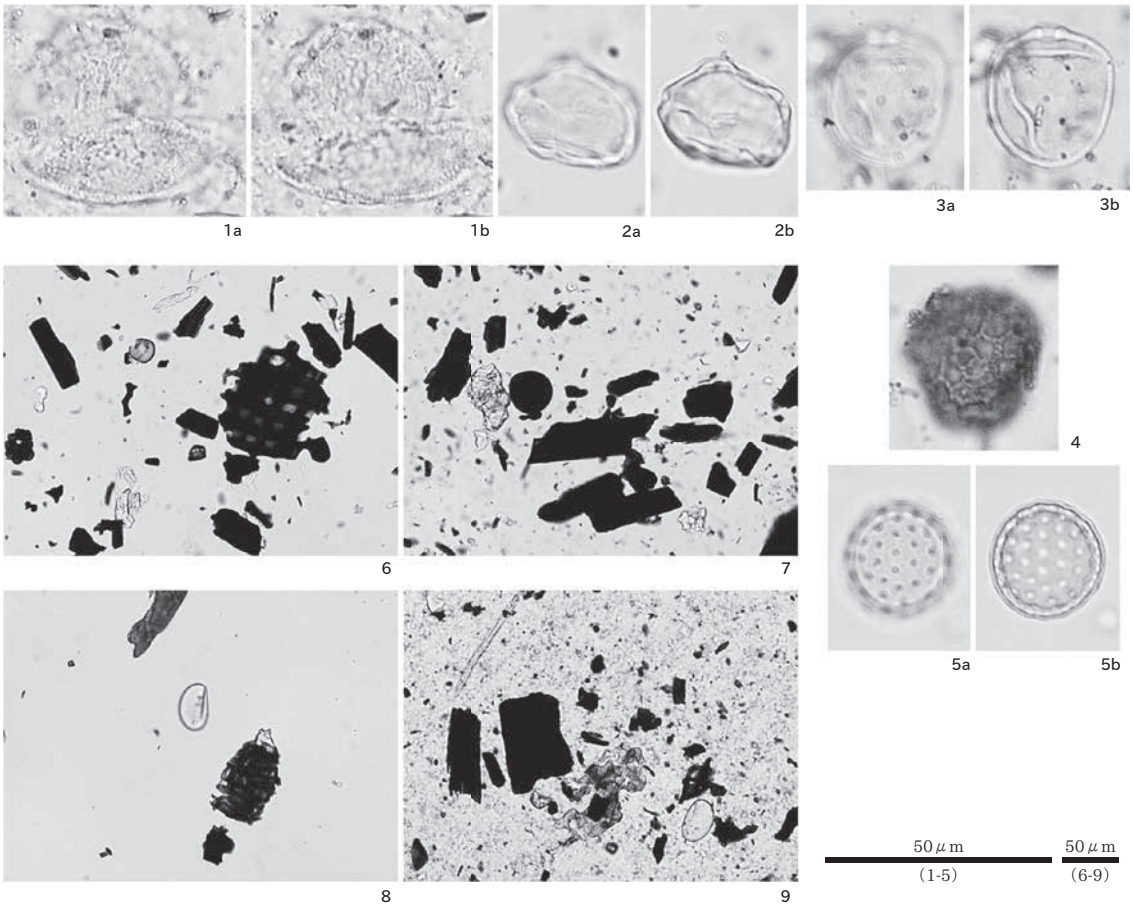
第４表　花粉分析結果

D 考　　察

Ⅲ層、Ⅳ層およびⅥ層より採取された堆積物試料の花粉分析の結果、いずれの試料も産出状況が悪く、とくにⅣ層（No.3）は無化石であった。

花粉化石やシダ類胞子は、好気的環境下に曝されていると酸化や土壌微生物により分解・消失することが知られている［中村 1967、徳永・山内 1971、三宅・中越 1998 など］。検出された花粉化石は保存状態が悪かったことを踏まえると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が経年変化により分解・消失したことなどが推定される。また、前述した調査所見などを参考とすると、好気的環境にあった堆積物の（再）堆積や堆積速度が速く花粉化石が取り込まれ難かったなどの要因も考えられる。

今回の花粉化石の産状からは、古植生変遷などの推測は困難であるが、針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属などの樹木花粉は、周囲に分布した二次林や河畔や渓谷沿い、および周辺の山地などに分布した森林植生に由来すると考えられる。また、イネ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科などの草本花粉は、調査地周辺の開けた明るい場所に生育した草地を反映すると思われる。



1. マツ属（Ⅵ層①；4）
2. ハンノキ属（Ⅲ層；1）
3. イネ科（Ⅳ層；2）
4. サナエタデ節－ウナギツカミ節(Ⅳ層;2)
5. アカザ科（Ⅲ層；1）
6. プレパラート内の状況（Ⅲ層；1）
7. プレパラート内の状況（Ⅳ層；2）
8. プレパラート内の状況（Ⅵ層②；3）
9. プレパラート内の状況（Ⅵ層①；4）

第 21 図　花粉化石およびプレパラート内の状況

2　放射性炭素年代測定

田中義文・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

A　試　　料

試料は、調査区内の堆積層（基本土層）より出土した炭化材 9 点（No.1 ～ 9）、SZ2 より出土した炭化材 1 点（No.10）および出土した縄文土器の内面に付着する炭化物 3 点（取上 No.1920，10446，14547）の計 13 点である。

これらの試料のうち、炭化材試料については、形状、年輪数および樹皮の有無などを確認した後、必要量を採取し放射性炭素年代測定に供している。土器付着炭化物は、後述する炭素･窒素安定同位体比測定（次節）にも供する試料とするため、候補試料のうち、縄文土器内面に付着し、炭化物が厚く残存するものを選択し、測定に供している。なお、各試料の詳細（出土位置（遺構）、性状、観察所見など）は一覧として第 5 表に記したので参照されたい。また、炭化材試料については履歴に関わる情報を得るため、樹種の確認も行った。その結果も第 5 表に併記した。

B　分　析　方　法

試料表面の土砂などの付着物をメスやピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸（HCl）や水酸化ナトリウム（NaOH）を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸－アルカリ－酸（AAA）処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M ～ 1M まで濃度を上げ、試料の状況をみながら処理を進める。1M の水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合は AAA と記す。一方、試料が脆弱で 1M の水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

上記した処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、

遺構	層位	試料番号 取上番号	性状	観察所見など					備考
				形状	樹皮	年輪数	測定試料	種類	
	Ⅱ層	No.1	炭化材	不定形	無	3 年	半割	広葉樹	
	Ⅲ層	No.2	炭化材	ミカン割状	無	16 年	外側 10 年	ケヤキ	
	Ⅳ層上層	No.3	炭化材	ミカン割状	無	7 年	全量	ブナ属	
	D3 層	No.4	炭化材	板目板状	無	2 年	ほぼ全量	ニレ科	
	D2 層	No.5	炭化材	柾目板状	無	19 年	外側 10 年	広葉樹	
	Ⅵ層	No.6	炭化材	ミカン割状	無	3 年	全量	エゴノキ属	
	Ⅵ層	No.7	炭化材	不定形	無	不明	全量	広葉樹	
	D1 層	No.8	炭化材	ミカン割状	無	6－7 年	全量	カエデ属	
	D1 層上面	No.9	炭化材	不定形	無	3 年	全量	クリ	2 片より 1 片を選択
SZ2	－	No.10	炭化材	芯持材状	無	6 年	半割	ブナ属	底面出土
	D5 層	1920	土器付着炭化物						土器内面
	D2 層	10446	土器付着炭化物						土器内面
	D1 層	14547	土器付着炭化物						土器内面

第 5 表　放射性炭素年代測定試料

^{14}C 濃度($^{14}C/^{12}C$)を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

$\delta\ ^{13}C$ は試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma ; 68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う［Stuiver & Polach 1977］。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

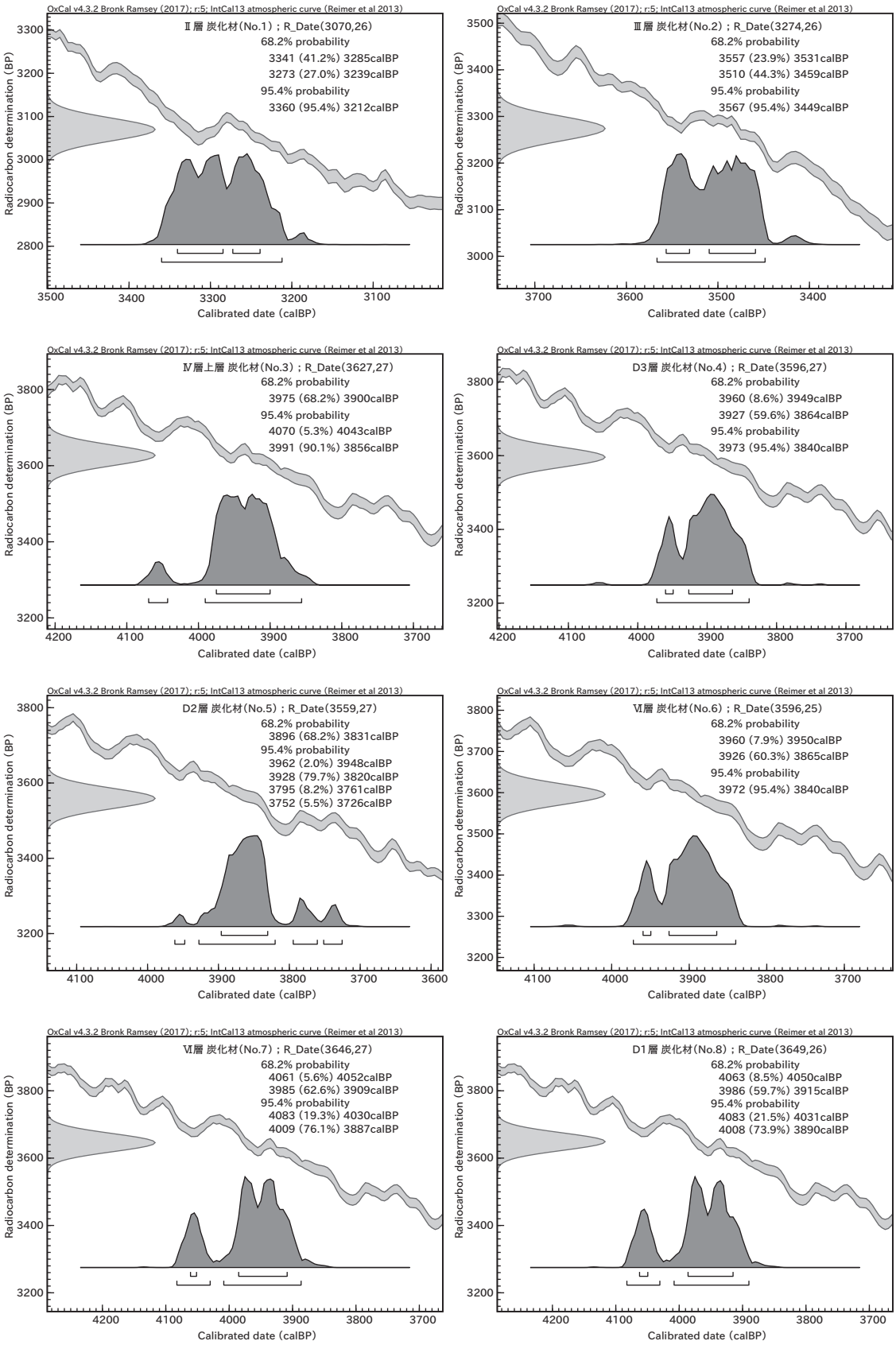
なお、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、OxCal 4.3.2［Bronk 2009］を使用し、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線（Intcal13［Reimer *et al.*,2013］）を用いる。暦年較正結果は 1 σ・2 σ（1 σは統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95.4% の確率で存在する範囲）の値を示す。

C　結　　果

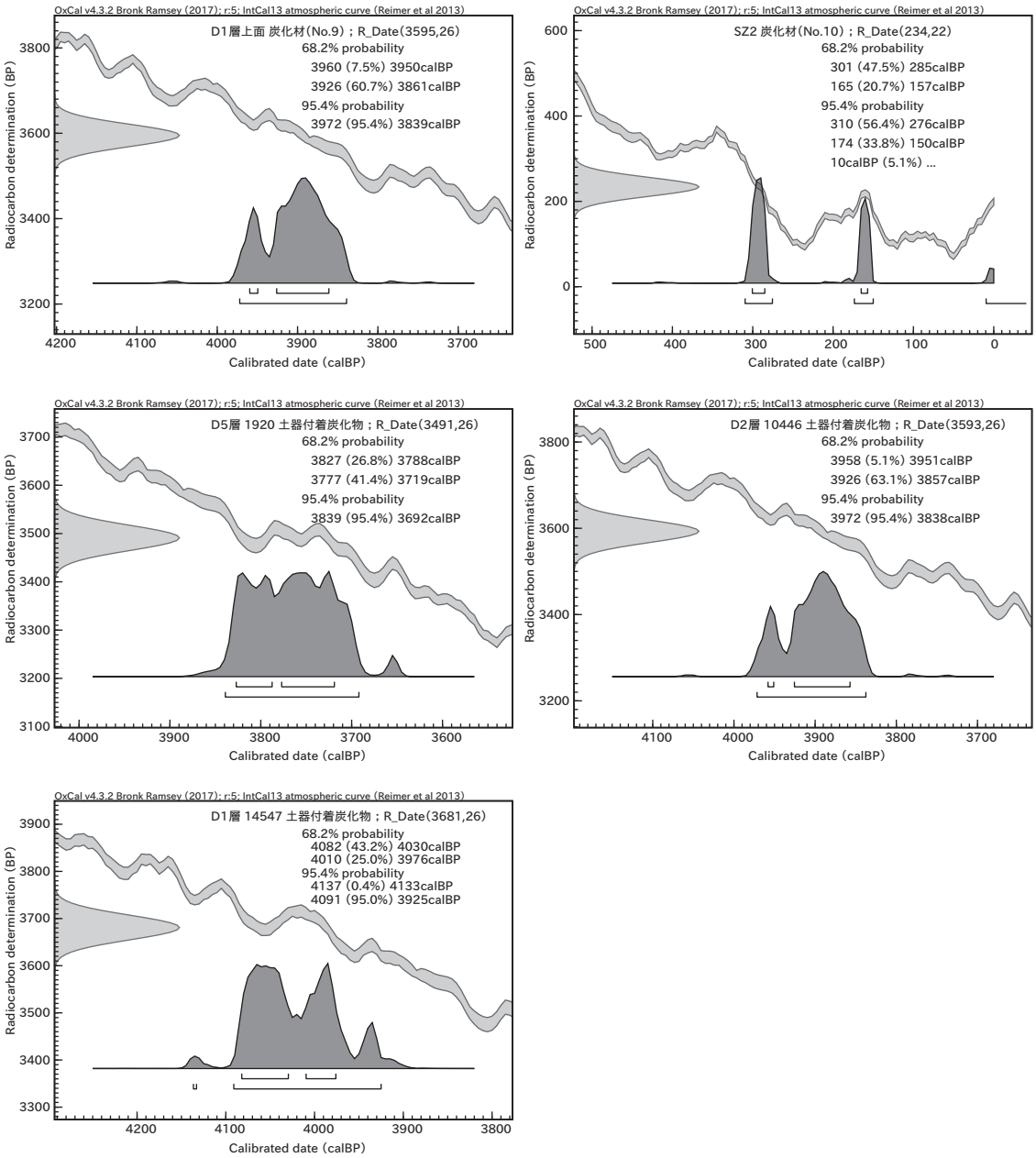
炭化材および土器（内面）付着炭化物の同位体補正を行った年代値（補正年代）は、Ⅱ層 炭化材（No.1）が 3070 ± 25BP、1 区Ⅲ層 炭化材（No.2）が 3275 ± 25BP、Ⅳ層上層 炭化材（No.3）が 3625 ± 25BP、D3 層 炭化材（No.4）が 3595 ± 25BP、D2 層 炭化材（No.5）が 3560 ± 25BP、Ⅵ層 炭化材（No.6）が 3595 ± 25BP、Ⅵ層 炭化材（No.7）が 3645 ± 25BP、D1 層 炭化材（No.8）が 3650 ± 25BP、D1 層上面 炭化材（No.9）が 3595 ± 25BP、SZ2 炭化材（No.10）が 235 ± 20BP、D5 層 1920 土器付着炭化物が 3490 ± 25BP、D2 層 10446 土器付着炭化物が 3595 ± 25BP、D1 層 14547 土器付着炭化物が 3680 ± 25BP を示す（第 6 表)。

試料名	処理方法	補正年代（BP）	$\delta\ ^{13}C$（‰）	補正年代（暦年較正用）（BP）	暦年較正結果		測定番号
					1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	
Ⅱ層　炭化材（No.1）	AAA	3070 ± 25	−28.3 ± 0.4	3070 ± 26	3341（41.2%）3285calBP 3273（27.0%）3239calBP	3360（95.4%）3212calBP	TKA-18521
Ⅲ層　炭化材（No.2）	AAA	3275 ± 25	−28.1 ± 0.4	3274 ± 26	3557（23.9%）3531calBP 3510（44.3%）3459calBP	3567（95.4%）3449calBP	TKA-18522
Ⅳ層上層　炭化材（No.3）	AAA	3625 ± 25	−27.8 ± 0.4	3627 ± 27	3975（68.2%）3900calBP	4070　（5.3%）4043calBP 3991（90.1%）3856calBP	TKA-18523
D3 層　炭化材（No.4）	AAA	3595 ± 25	−28.3 ± 0.4	3596 ± 27	3960　（8.6%）3949calBP 3927（59.6%）3864calBP	3973（95.4%）3840calBP	TKA-18524
D2 層　炭化材（No.5）	AaA	3560 ± 25	−28.4 ± 0.4	3559 ± 27	3896（68.2%）3831calBP	3962　（2.0%）3948calBP 3928（79.7%）3820calBP 3795　（8.2%）3761calBP 3752　（5.5%）3726calBP	TKA-18525
Ⅵ層　炭化材（No.6）	AAA	3595 ± 25	−26.6 ± 0.4	3596 ± 25	3960　（7.9%）3950calBP 3926（60.3%）3865calBP	3972（95.4%）3840calBP	TKA-18526
Ⅵ層　炭化材（No.7）	AaA	3645 ± 25	−29.7 ± 0.4	3646 ± 27	4061　（5.6%）4052calBP 3985（62.6%）3909calBP	4083（19.3%）4030calBP 4009（76.1%）3887calBP	TKA-18527
D1 層　炭化材（No.8）	AaA	3650 ± 25	−29.7 ± 0.4	3649 ± 26	4063　（8.5%）4050calBP 3986（59.7%）3915calBP	4083（21.5%）4031calBP 4008（73.9%）3890calBP	TKA-18528
D1 層上面　炭化材（No.9）	AAA	3595 ± 25	−28.9 ± 0.4	3595 ± 26	3960　（7.5%）3950calBP 3926（60.7%）3861calBP	3972（95.4%）3839calBP	TKA-18529
SZ2　炭化材（No.10）	AAA	235 ± 20	−28.7 ± 0.3	234 ± 22	301（47.5%）　285calBP 165（20.7%）　157calBP	310（56.4%）　276calBP 174（33.8%）　150calBP 10calBP（5.1%）……	TKA-18530
D5 層 1920 土器付着炭化物	AaA	3490 ± 25	−26.4 ± 0.4	3491 ± 26	3827（26.8%）3788calBP 3777（41.4%）3719calBP	3839（95.4%）3692calBP	TKA-18531
D2 層 10446 土器付着炭化物	AaA	3595 ± 25	−24.9 ± 0.4	3593 ± 26	3958　（5.1%）3951calBP 3926（63.1%）3857calBP	3972（95.4%）3838calBP	TKA-18532
D1 層 14547 土器付着炭化物	AaA	3680 ± 25	−26.9 ± 0.4	3681 ± 26	4082（43.2%）4030calBP 4010（25.0%）3976calBP	4137　（0.4%）4133calBP 4091（95.0%）3925calBP	TKA-18533

第 6 表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

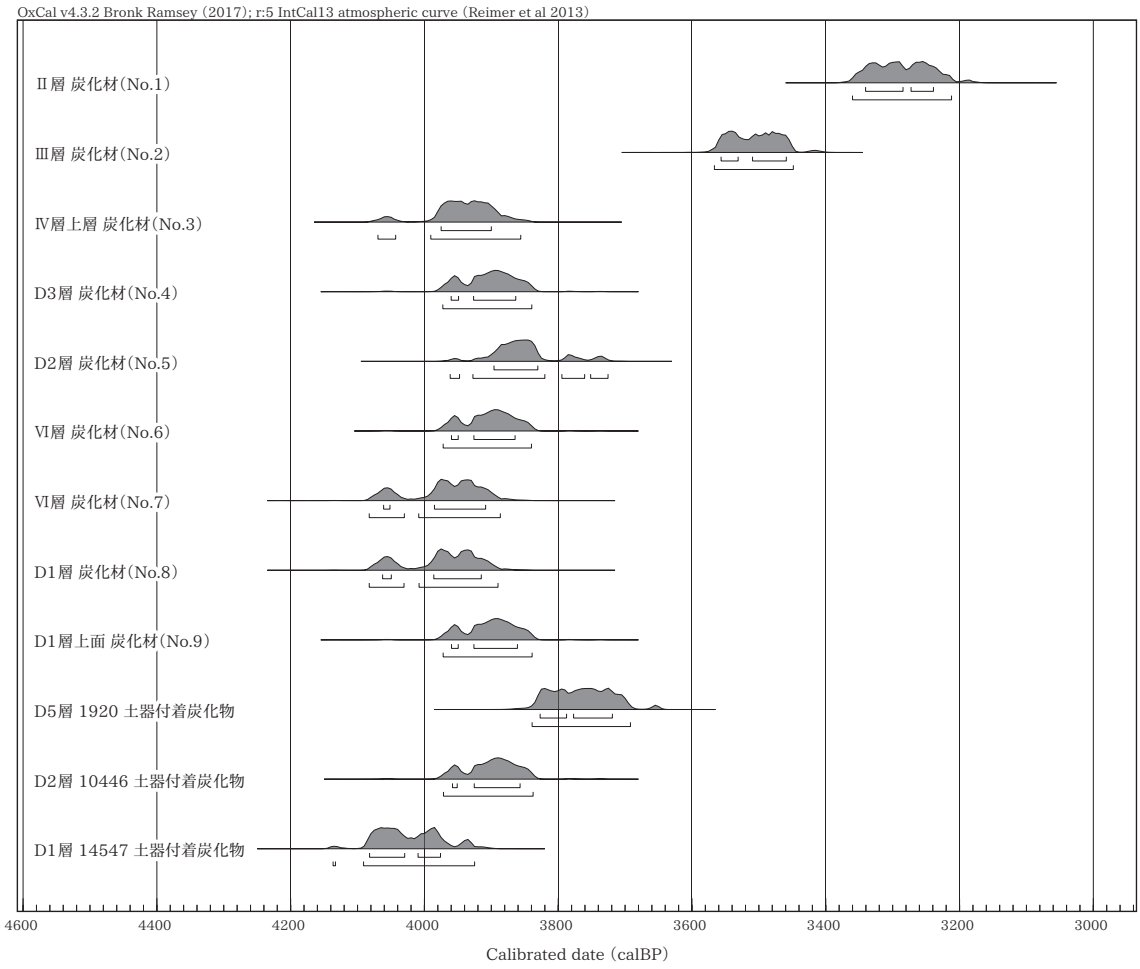


第 22 図　暦年較正結果（1）



第 23 図　暦年較正結果（2）

また、暦年較正年代（2σ暦年代範囲）は、Ⅱ層 炭化材（No.1）が 3360－3212 calBP、Ⅲ層 炭化材（No.2）が 3567－3449 calBP、Ⅳ層上層 炭化材（No.3）が 4070－3856 calBP、D3 層 炭化材（No.4）が 3973－3840 calBP、D2 層 炭化材（No.5）が 3962－3726 calBP、Ⅵ層 炭化材（No.6）が 3972－3840 calBP、Ⅵ層 炭化材（No.7）が 4083－3887 calBP、D1 層 炭化材（No.8）が 4083－3890 calBP、D1 層 上面 炭化材（No.9）が 3972－3839 calBP、SZ2 炭化材（No.10）が 310－10 calBP（以降）（calAD 1,641 ～ calAD 1,941（以降））、D5 層 1920 が 3839－3692 calBP、D2 層 10446 が 3972－3838 calBP、D1 層 14547 が 4137－3925 calBP である（第 6 表、第 22・23 図）。



第 24 図　暦年較正結果（3）

D 考　　察

1）堆積層（基本土層）出土炭化材・土器付着炭化物

堆積層（基本土層）より出土した炭化材試料（No.1 ～ 9）の暦年較正年代（2σ）は、およそ 4100 ～ 3200 calBP という範囲を示した（第 24 図）。これらの結果について、［小林 2008・2017］などを参考とすると、Ⅱ層（No.1）が縄文時代後期後葉頃、Ⅲ層（No.2）が縄文時代後期中葉頃、Ⅳ層～ D1 層（No.3 ～ 9）が縄文時代後期前半頃に相当する。とくに、Ⅳ層上層～ D1 層試料は 4100 ～ 3800 calBP の間にまとまる傾向を示すが、堆積物の累重関係と得られた年代の新旧は必ずしも一致しない。この点については、測定に供された炭化材試料の年輪部位による影響（古木効果）を考慮する必要がある。また、縄文土器（内面）付着炭化物 3 試料の暦年較正年代（2σ）は、D5 層 1920 が縄文時代後期前半～中頃、D2 層 10446 および D1 層 14547 が縄文時代後期前半に相当する。このうち、D2 層 10446 や D1 層 14547 の暦年代範囲は、上記したⅣ層および以深の層準の炭化材試料（No.3 ～ 9）の暦年代範囲とほぼ重複する。

以上の結果および調査所見を参考とすると、Ⅳ層および以深の層準の試料（炭化材、土器付着炭化物）は同様の履歴（埋積過程など）を示すとともに、縄文時代後期前葉頃の人間活動を間接的に示す資料と推定される。なお、堆積物の年代については、測定に供された試料が異地性のものである場合、その形成年代を反映しない可能性もある。そのため、得られた年代の評価にあたっては、堆積層の形成過程や現地性の

高い出土遺物による考古学的な検討とともに、古土壌や現地性の高い試料を対象とした放射性炭素年代測定による検証が望まれる。

2）火　葬　墓

SZ2 から出土した炭化材（No.10）の暦年較正年代（2 σ）は 310-10 calBP（以降）（calAD 1641-calAD 1941（以降））に相当する。この結果を参考とすると、出土炭化材は近世前半および以降の資料と推定される。

3　炭素・窒素安定同位体比分析

田中義文・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

A　試　　料

試料は、前節の放射性炭素年代測定に供した縄文土器（内面）付着炭化物 3 点（D5 層 1920、D2 層 10446、D1 層 14547）である。肉眼及びルーペによる観察では、いずれも残存状態の良好な黒褐色を呈する炭化物であり、小塊状を為す（第 25 図）。

B　分　析　方　法

試料の状態を観察した後、不純物（土器胎土、土壌など）を除去する。分析は、安定同位体比質量分析装置（EAIRMS：元素分析計 / 質量分析計、元素分析計：EuroEA 3028-HT（EuroVector 社製）、質量分析計：IsoPrime（Micromass 社（現 Elementar UK 社）製）により測定を行う。測定条件等は、［Yoshida *et al.*2013］等に基づく。また、今回の分析では、試料に残存した脂質等も含めた安定同位体比を計測するため、酸やアルカリによる前処理を行なっていない。なお、測定および測定結果の解析は吉田邦夫氏・宮内信雄氏（東京大学総合研究博物館タンデム加速器分析室）の協力を得ている。

C　結果及び考察

結果を第 7 表に示す。また、炭化物の由来を検討するため、［Yoshida *et al.*2013］を参考とした判定図に結果を図示する（第 26 図）。土器付着炭化物 3 点（D5 層 1920、D2 層 10446、D1 層 14547）はいずれも、炭素含有率が 50% を超える、残存状況の良好な炭化物であった。また、同位体比も近しい値を示した。$\delta^{13}C$ は－23‰～－4‰で、比較的大きめではあるが、C_3 植物や C_3 植物を摂取した動物の領域にある。$\delta^{15}N$ は、0‰を下回る程度の値を示す。C/N 比は 25 を超える。さらに $\delta^{13}C$ と C/N 比から判断すると、C_3 植物に由来する炭化物であり、タンパク質の少ない堅果類のような食材が主体であったと推定される。

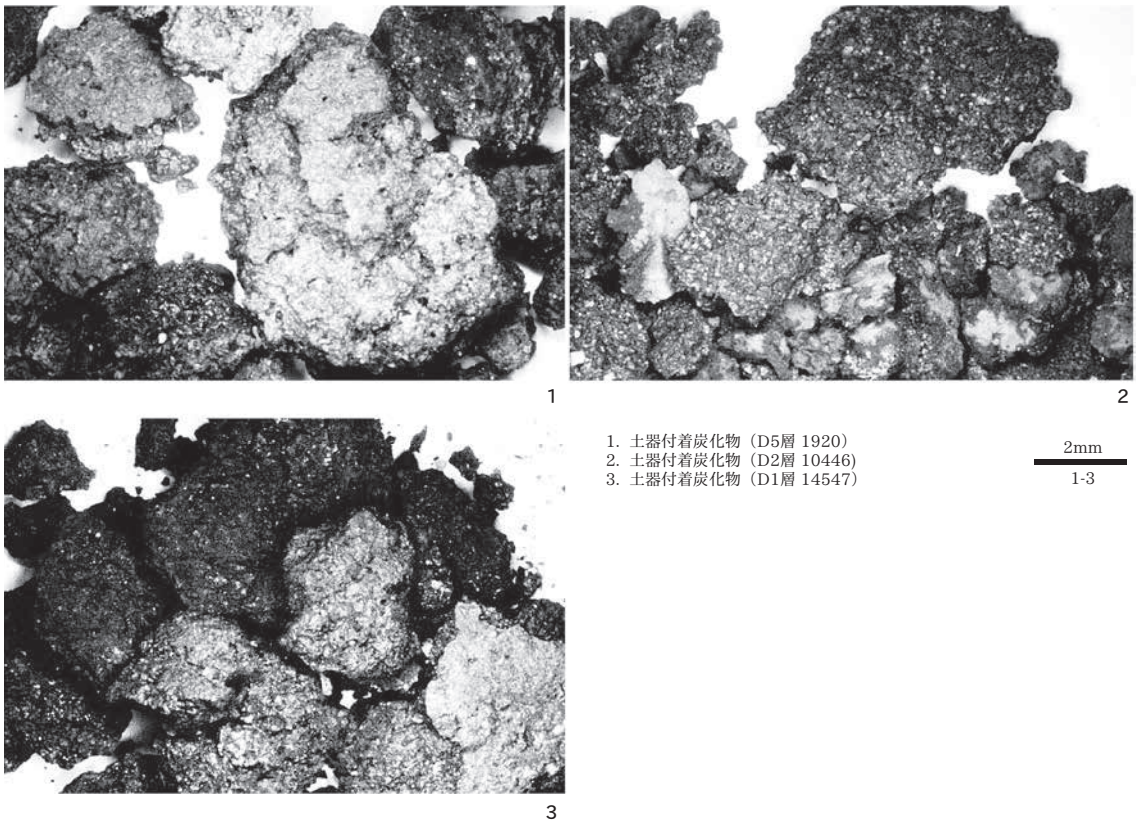
試料名（出土層位・取上 No.）		$\delta^{13}C$（‰）	$\delta^{15}N$（‰）	C（%）	N（%）	C/N
D5	1920	－23.1	－0.2	57.9	2.6	26.3
D2	10446	－23.8	－2.5	56.6	1.9	33.9
D1	15457	－24.0	0.0	53.4	2.4	26.1

第 7 表　炭素・窒素安定同位体比分析結果

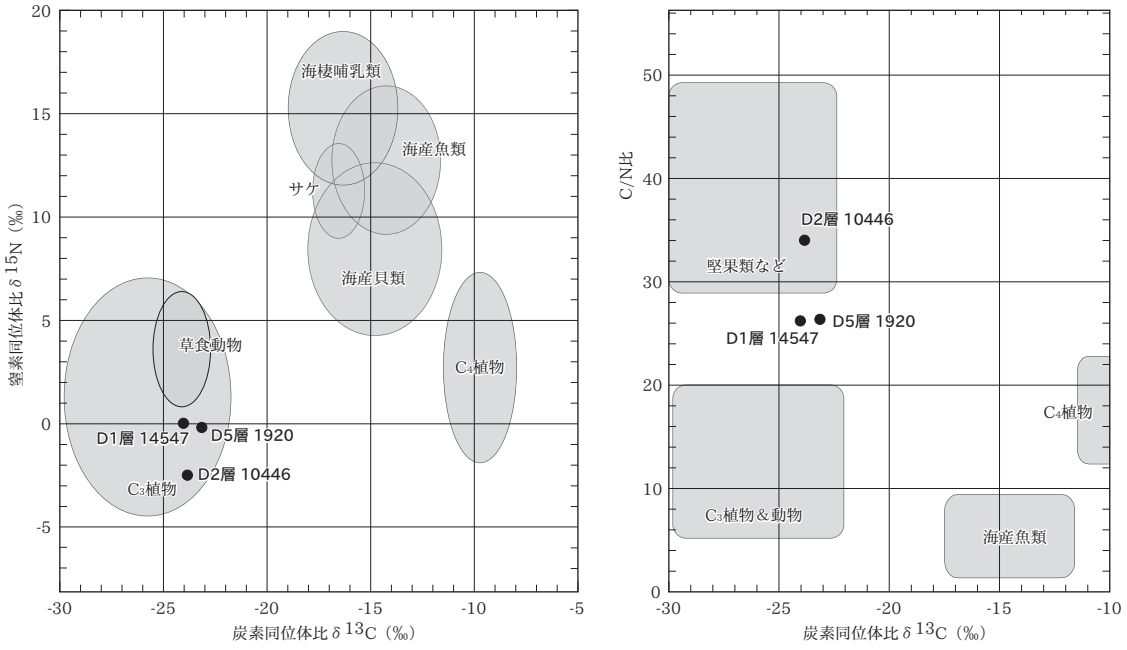
以上の土器付着炭化物 3 点が示す同位体比の領域は、これまでに測定した土器付着炭化物が示す値の中でも、一つのグループを構成する領域である。このグループは、比較的大形品の胴部下半内面から採取した炭化物が多いのが、特徴的である。

なお、新潟県内における調査事例のうち、信濃川流域における遺跡では、海から離れた山間地域において海棲生物的な組成が得られることがあり、サケ・マスの遡上との関係が指摘されている［Yoshida *et*

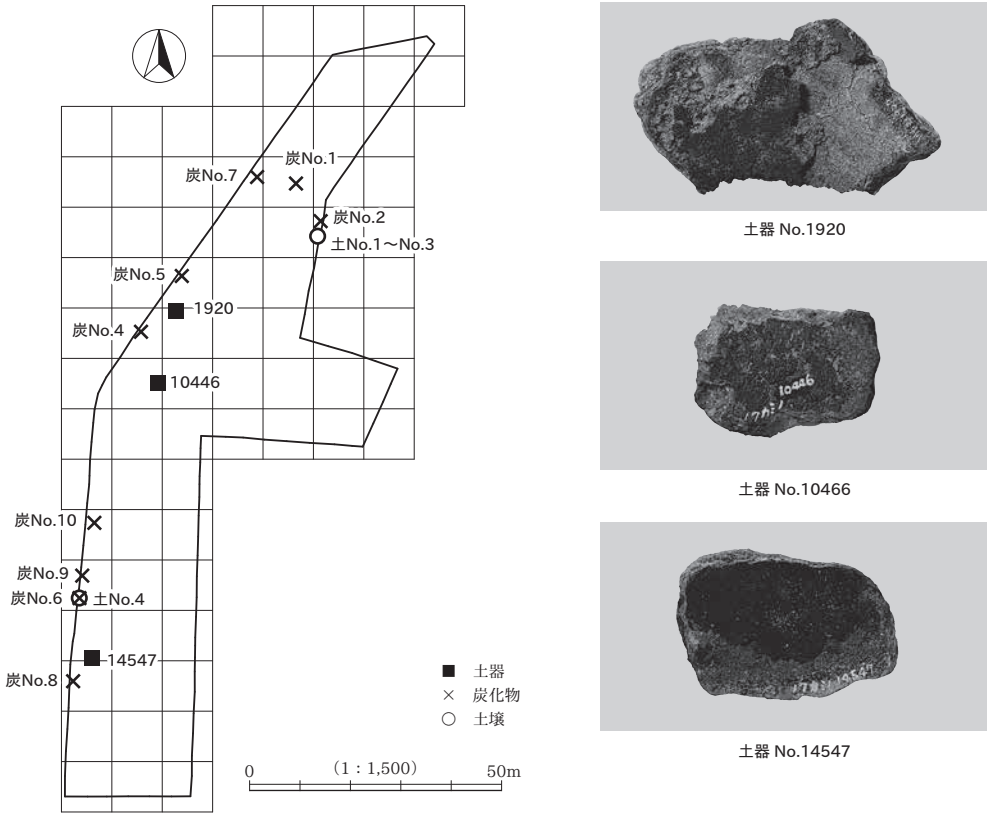
*al.*2013]。また、東北地方沿岸部の結果をみると、亀ヶ岡遺跡などでは、海棲生物側に寄る傾向が明らかとされている[Horiuchi *et al.*2015]。本遺跡の立地を踏まえると、海産物の利用も可能と考えられるため、さらに資料の蓄積による食性の検討が期待される。



第 25 図　土器付着炭化物



第 26 図　炭素・窒素安定同位体比分析結果と食材の比較



第 27 図　第Ⅵ章 1 ～ 3 の試料採取位置と炭化物付着土器

引用文献（第Ⅵ章　1 ～ 3）

Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

Horiuchi Akiko, Miyata Yoshiki, Kamijo Nobuhiko, Cramp L, Evershed PR, 2015, A dietary study of The Kamegaoka culture population during The Final Jomon period, Japan, using stable isotope and lipid analysis of ceramic residues. Radiocarbon, 57, 721-736.

小林謙一，2008，縄文土器の年代（東日本）．小林達雄（編）　総覧　縄文土器．株式会社アム・プロモーション，896-903.

小林謙一，2017，縄紋時代の実年代　－土器型式編年と炭素 14 年代－．同成社，263p.

新潟県，1991，土地分類基本調査　塩野町　5 万分の 1　国土調査．77p.

三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子，2011，日本産花粉図鑑．北海道大学出版会，824p.

中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232p.

中村　純，1980，日本産花粉の標徴　Ⅰ Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12，13 集，91p.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集，60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.

Yoshida Kunio, Kunikida Dai, Miyazaki Yumiko, Nishida Yasutami, Miyao Toru, Matuzaki Hiroyuki, 2013, Dating and stable isotope analysis of charred residues on the incipient Jomon Pottety（Japan）. Radiocarbon, 55, 1322-1333.

4　SZ1・SZ2 出土人骨について

波田野悠夏・鈴木敏彦（東北大学大学院歯学研究科）
奈良貴史（新潟医療福祉大学医療技術学部）

A　は　じ　め　に

本節は村上市上野遺跡から出土した人骨の人類学的調査の報告である。歯の計測は藤田（1949）に準拠した。歯の形態小変異は Matsumura（1995）及び金澤（2011）に準拠した。歯の咬耗度は Molnar（1971）に基づいて分類した。歯の病変の判断は、山本（1988）の基準によってエナメル質減形成の有無を確認し、WHO（1979）の基準によって齲蝕の有無を確認した。

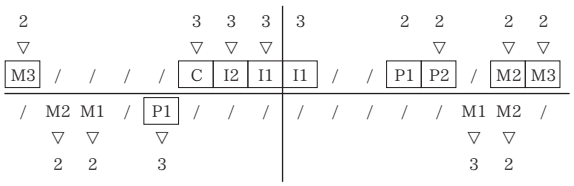
B　SZ1　人　骨

1）遺　存　状　況

保存状態は不良である。頭骨においては右側頭骨の外耳道部（第 28 図左上）と歯が同定できる（第 28 図左下）。同定できる歯は以下の歯式に示されるとおりである。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を示す。記号と数字の組み合わせが記入されているものが存在を確認された歯である。歯式に対応する上下の数字は Molnar（1971）の咬耗度を示す。歯種を外枠で囲んだ物はエナメル質減形成を認めた歯種である。

重複する歯は認められず、1 個体が埋葬されたものと思われる。全てが遊離歯である。上顎左側中切歯・第一小臼歯以外は歯冠のみ遺残する。咬耗度は前歯部で Molnar の 3 度、臼歯部で Molnar の 2 ～ 3 度を呈した。歯の計測値は第 8 表に示す。

四肢・体幹骨では、大腿骨骨幹部片のみが同定できた（第 29 図右）。



第 28 図　歯の遺存状況

		上野遺跡 No.5	
		右	左
歯冠幅（近遠心径）			
上顎	I1	8.01	7.72
	I2	7.20	−
	C	7.44	−
	P1	−	6.51
	P2	−	×
	M1	−	−
	M2	−	×
	M3	×	−
下顎	I1	−	−
	I2	−	−
	C	−	−
	P1	6.79	−
	P2	−	−
	M1	×	10.32
	M2	9.37	9.94
	M3	−	−

		上野遺跡 No.5	
		右	左
歯冠厚（唇・頬舌径）			
上顎	I1	6.68	6.88
	I2	×	−
	C	7.66	−
	P1	−	8.75
	P2	−	×
	M1	−	−
	M2	−	10.07
	M3	×	−
下顎	I1	−	−
	I2	−	−
	C	−	−
	P1	7.13	−
	P2	−	−
	M1	×	10.07
	M2	9.45*	8.87
	M3	−	−

−は該当する歯がないこと、*は近似値、×は破損・咬耗等のため計測値が得られないことを示す。

第 8 表　永久歯の計測値（mm）

2）年　　齢

上顎第三大臼歯が萌出済みであることからおよそ 18 歳以上、また咬耗状態を考慮すると壮年期後半から熟年（30 ～ 60 歳）に推察される。

3）性　　別

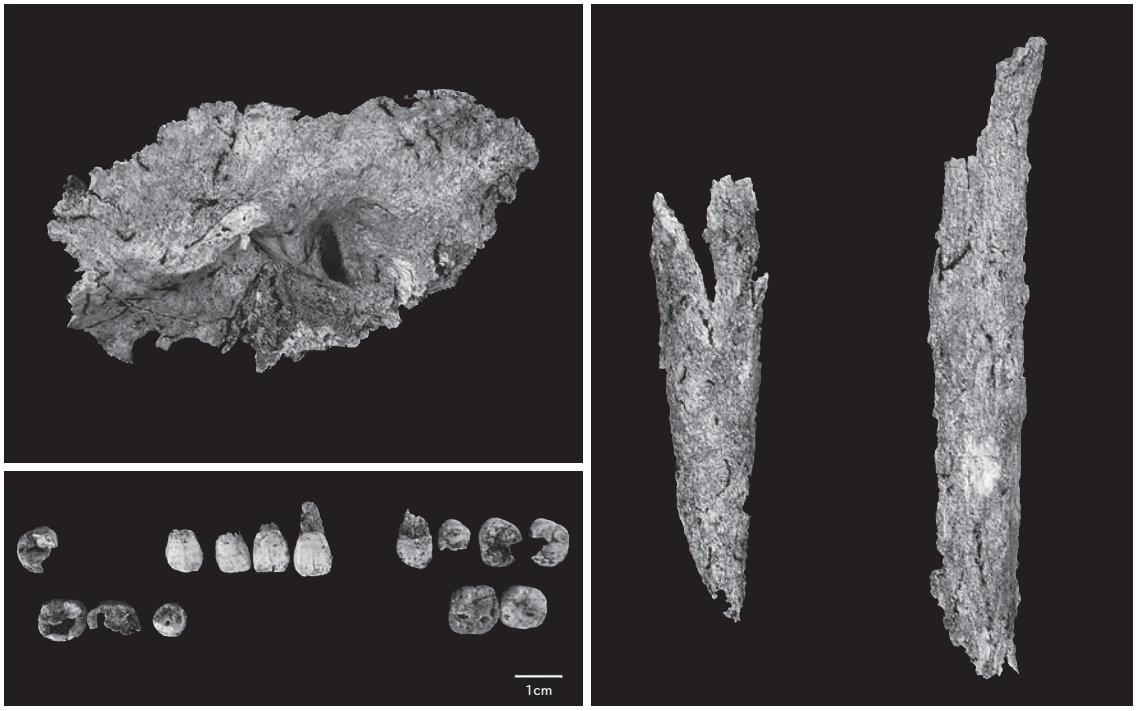
大腿骨の骨幹部がきゃしゃな印象を受けることと歯冠計測値の大きさが縄文・弥生・古墳・鎌倉の各時

代男性の平均値より小さい傾向にあるので（第 30・31 図）、女性の可能性が高い。

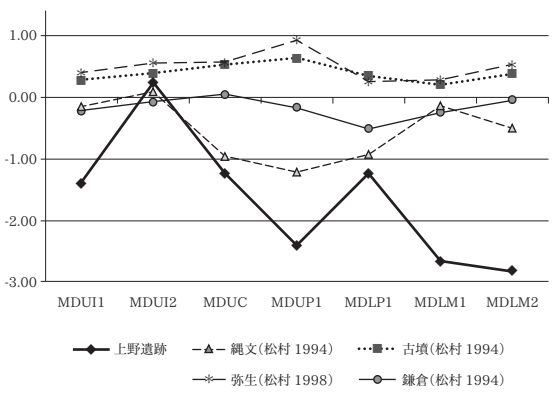
4）その他特記事項

歯冠の非計測的形質について、上顎中・側切歯にはシャベル形態を認めたがやや発達が弱く、唇側にはダブルシャベルは観察できなかった。下顎左側第二大臼歯の咬合面はＸ型であり、４咬頭性であったエナメル質減形成は上顎の全ての歯及び下顎右側第一小臼歯に観察され、出現頻度は 71.4% だった。エナメル質減形成は歯冠形成期の成長障害を示すストレス・マーカーとして有用であることが知られており、本個体は歯冠が形成される乳・幼児期に栄養不良や疾患などストレスを受容しやすい生活環境にあったことが伺えた。齲蝕は確認できなかった。

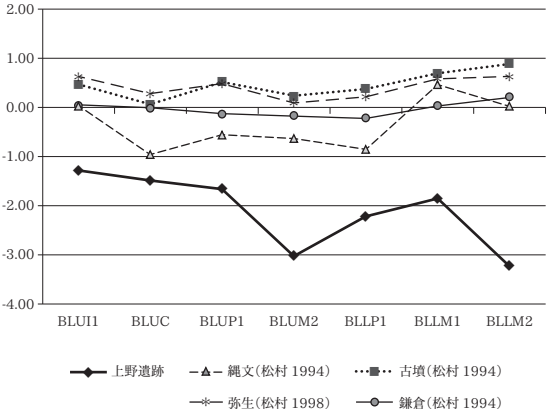
また、上顎左側小臼歯の舌側咬頭の一部分についてエナメル質の欠損が認められた。エナメル質周囲が粗造になっていないことから、齲蝕ではなく摩耗の一種と推察できた。



第 29 図　SZ1 出土人骨（左上：右側頭骨、左下：歯、右：大腿骨骨幹部）



第 30 図　近遠心径偏差折線
関東現代人 男性 基準［松村 1994］



第 31 図　頬舌径偏差折線
関東現代人 男性 基準［松村 1989］

C　SZ2　人　骨

1）遺　存　状　況

四肢骨片が多数遺存する。乾燥総重量 47g である。ほとんどの破片が灰白色から白色の色調を呈しており、高温で焼成されている人骨と思われる。四肢長骨片に輪状に走る亀裂がみられる。部位が確認できた骨は、椎骨、四肢長骨、手の骨などが確認できるが、細片化が著しいうえ、多くの破片が変形しているので、正確に部位が同定できたのは、胸椎椎体部、尺骨骨幹部片、手の基節骨などごく一部である（第 32 図）。頭骨片が確認されていない。成人男性の一個体の焼骨平均重量が約 2000g であることを考えると、この個体が男性ならば 2.5% 程度しか遺存していないことになる。

2）年　　齢

判断の基準となる部位が少ない。手の指骨近位部の化骨化が終了していることから成人段階に達していた。また、確認できる椎体部に加齢性の骨棘が観察されないことから老年段階の可能性は低い。したがって成人段階の壮年から熟年（20 ～ 60 才）程度と推定される。

3）性　　別

性別を推定できる部位が出土しておらず、不明である。

D　ま　と　め

2017 年の村上市上野遺跡から出土した人骨は、成人女性と推定される土葬人骨 1 体と成人の火葬人骨約 47g である。

第 32 図　SZ2 出土焼骨

参考文献

藤田 恒太．1949．歯の計測基準について．人類誌 61：27-31．

Matsumura H.1994.A microevolutional history of the Japanese people from a dental characteristics perspective. Anthropological Science, 102：93-118.

Matsumura H.1995. A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum monographs 9：1-130.

Matsumura H.1998. Native or Migrant Lineage?-The Aeneolithic Yayoi People in Western and Eastern Japan-. Anthropological Science, 106：17-25.

山本美代子．1988．日本人古人骨永久歯のエナメル質減形成．人類学雑誌，96：417-433

WHO（World Health Organization）. 1979. Oral health surveys–basic methods. 2nd edition. Geneva.

Ubelaker D.H. 1999. Human Skeletal Remains, Third Edition. Academic Press, San Diego.

Ubleker DH. 1989. Human skeletal remains：Excavation, Analysis, Interpretation（2nd edition）. p.172, Taraxacum, Washington.

Molnar S. 1971. Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American journal of Physical Anthropology, 34：175-190.

澤田純明．2010．エナメル質減形成からさぐる縄文・弥生時代人の健康状態．考古学ジャーナル，606：33-37.

金澤英作．2011．日本人の歯とそのルーツ．第三章日本人の歯のルーツ．わかば出版株式会社，東京，p143-189.

5　村上市上野遺跡における砂礫層の形成過程

卜部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所）

A　は　じ　め　に

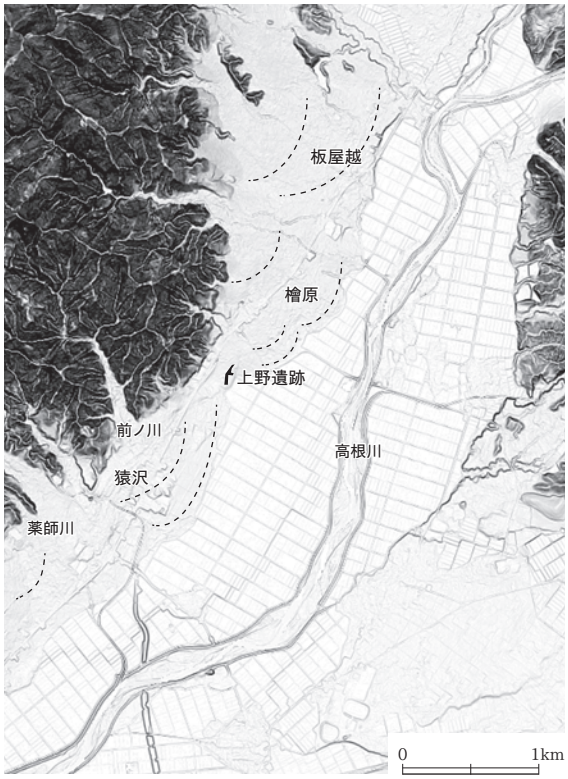
上野遺跡は、村上市猿沢に位置する縄文時代後期を主体とする遺跡である。本遺跡では、セクションを構成する複数の砂礫層中から、多くの遺物が産出することを特徴とする。このため、これらの砂礫層の供給起源を含めた形成過程について検討を行った。

B　地形・地質概要

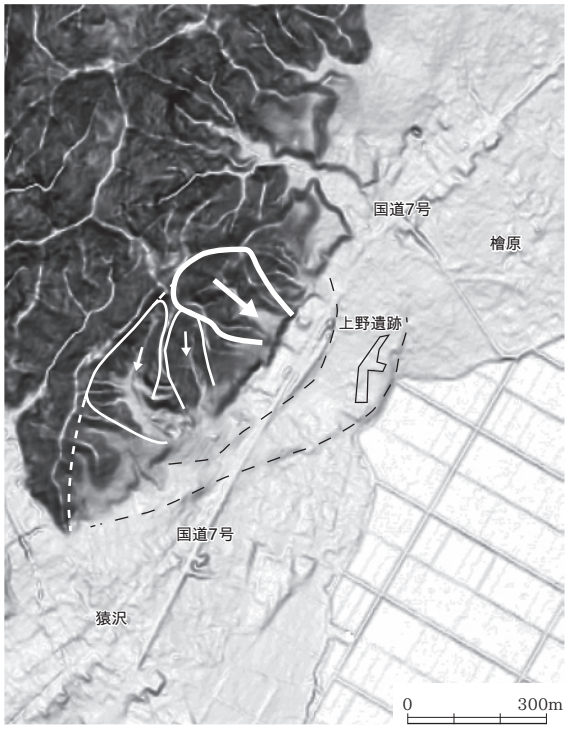
村上市朝日地区の高根川は、北北東－南南西方向にのびる沖積低地を南方に流下している。高根川の右岸と左岸の地形は、山地部を構成する地質の相違から大きく異なり、右岸側では、猿沢、檜原、板屋越地区を典型として、標高約 30m から 90m 程度の扇状地が広がっている（第 33 図）。これの扇状地は、高根川に流下する薬師川、前ノ川や男川など比較的流域面積の大きな河川によって形成されたものと考えられる。

上野遺跡は、高根川右岸の猿沢と檜原地区が立地する扇状地の中間的な位置に立地する（第 33 図）。遺跡周辺の地形は、遺跡の位置する標高約 30 ～ 50m の扇状地状の地形と北東南西方向の地形境界をはさんで複数の崩壊地形から構成される山地（複合した地すべり地形）から構成されている（第 34 図）。また、この地域の扇状地状の地形は、国道 7 号線付近と、遺跡付近の沖積低地と扇状地状の地形を末端とする 2 段の扇型の地形に区分できる。上野遺跡周辺の扇状地状の地形は、猿沢、檜原や板屋越地域の典型的な扇状地地形とは規模（面積）が大きく異なる。また、この 2 段の扇状地状の地形は、山地から流下する比較的流域面積の大きな河川によって形成されたものではなく、西側の崩壊地形の分布に対応した形で、各崩壊地形の末端に発達している。

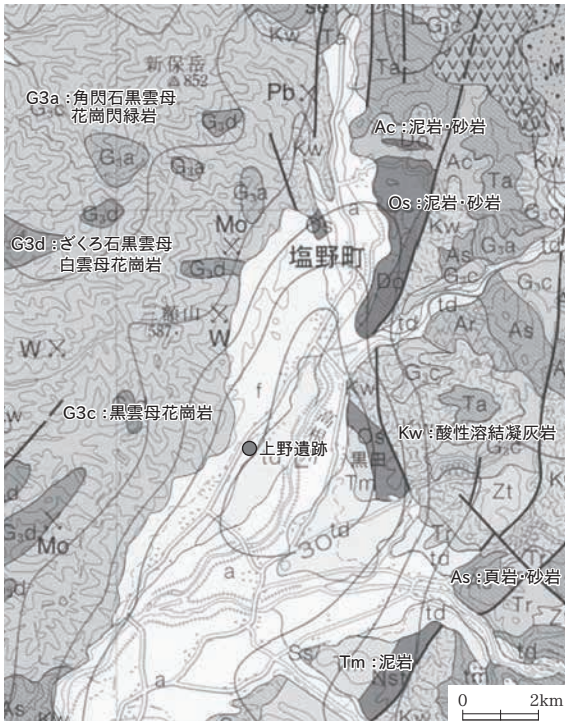
村上市朝日地区の高根川流域の地質は、高根川の沖積低地を挟んで右岸と左岸で大きく異なる（第 35 図）。左岸の地質は、中新世の泥岩、砂岩（Ac、Os、Tm）や酸性溶結凝灰岩（Kw）とジュラ紀と推定される頁岩や砂岩（As）などから構成されている。これに対して、上野遺跡の立地する右岸の地質は、白亜紀後期の岩船花崗岩と称される黒雲母花崗岩（G3c）（一部､角閃石やざくろ石を含む: G3a、G3d）から構成されている（第 35 図）。一般に、白亜紀などの古い地質時代の花崗岩は、風化しやすく崩壊地形や地すべりが発達し、土砂供給量が多くなるため、山地の山麓部には扇状地が発達しやすい。前述の地形の項のように、高根川右岸の猿沢、檜原、板屋越地区に扇状地が発達するのは、山地が花崗岩から構成されていることと密接な関係がある。また、上野遺跡西方の崩壊地形の発達する山地は、黒雲母花崗岩（G3c）から構成されていることがわかる。



第 33 図　上野遺跡周辺地域の地形
（国土地理院電子地形図（傾斜量図）に加筆）



第 34 図　上野遺跡付近の扇状地状の地形と崩壊地形の分布
（国土地理院電子地形図（傾斜量図）に加筆）



第 35 図　村上市朝日地区の高根川流域の地質図
（土谷ほか［1999］に加筆）

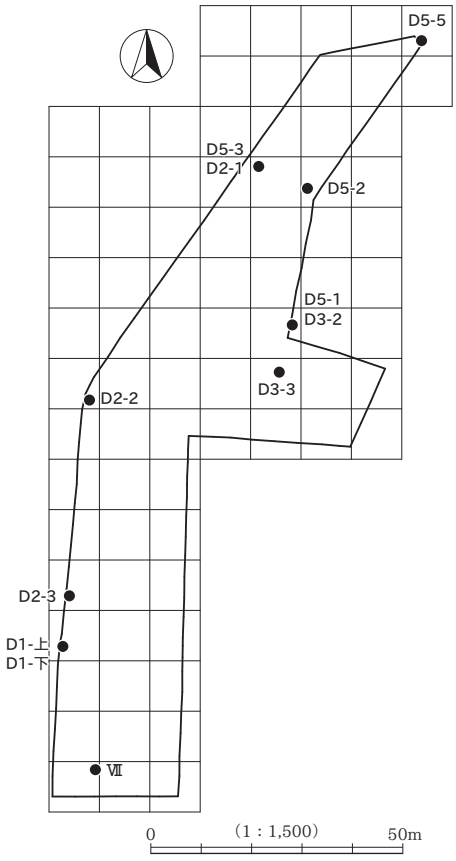
C　砂礫層試料の解析

上野遺跡の調査区では、遺物を含む複数の砂礫層が分布する。このうち遺物を含む特徴的な砂礫層は下位より D1 層～ D5 層に区分されている。

調査区の基本層位は、下位よりⅧ層、Ⅶ層（にぶい黄褐色砂）、D1 層、Ⅵ層（にぶい黄褐色シルト）、D2 層、Ⅴ層（褐色砂質シルト）、D3 層、Ⅳ層（褐色砂質シルト）、D4 層、Ⅲ層（褐色砂質シルト）、D5 層、Ⅱ層（褐色土）、Ⅰ層（黒色土）に区分される。

解析を行うための砂礫層の試料は、下位より D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の複数地点において採取した。また、比較として、Ⅶ層において試料を採取した（第 36 図）。

採取した試料は、16、8、4、2、1、0.5、0.25、0.125、0.063mm の篩を用いて、篩分けを行い、各篩に残った試料の重量を測定して、重量 % による粒度組成を検討した。次に、篩分けした試料について、顕微鏡を用いて構成粒子の形状と種類の観察を行った。



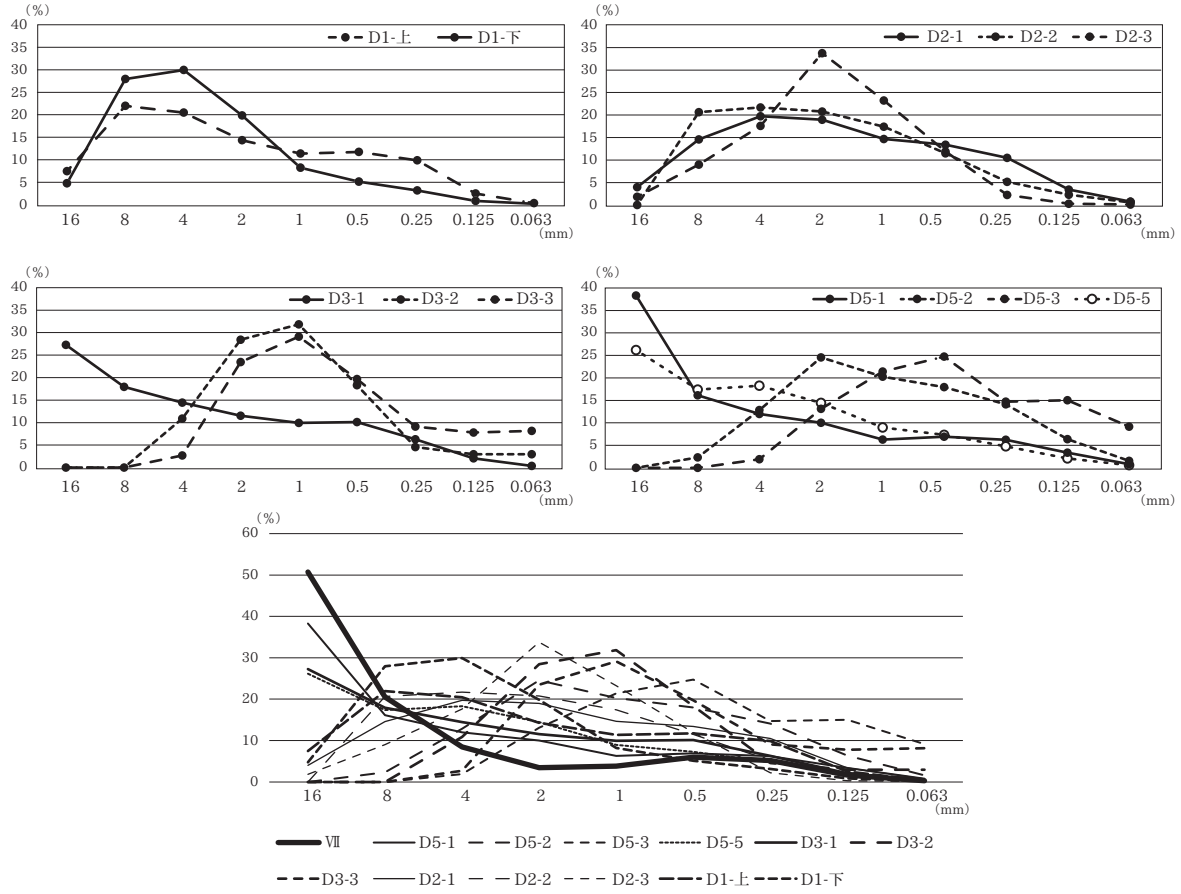
第 36 図　調査区における砂礫層試料の採取位置

1）粒　度　組　成

各試料の粒度組成を第 37 図に示す。各試料について、粒度階ごとの重量 % の分布から粒度組成の特徴について述べる。D1 層の試料は、8 ～ 4mm の粒度階が卓越する。下層（D1- 下）と上層（D1- 上）を比較すると、上層（D1- 上）の試料の方がやや粗い粒度階の重量 % が少なく、0.5 ～ 0.25mm の粒度階の重量 % が多いことから、全体にやや細粒である。D2 層の試料は、8 ～ 2mm の粒度階の重量 % が 20% 程度を示す。D3 層の試料は、V-1 試料で 16 ～ 8mm の粒度階の重量 % が多いのに対して、V-2、V-3 試料は 2 ～ 1mm の粒度階が多く、3 地点の中で西側に位置する V-1 試料（地点）が粗粒であることを示している。D5 層の試料は、全体には 2 ～ 0.25mm の粒度階が多いが、D5-1、D5-5 試料（地点）では 16 ～ 8mm の粒度階の重量 % も多くなっている。D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の全体をみると、下位の D1 層が相対的に粗粒であり、上位の D5 層になるほど細粒の粒度階の構成比率が多くなっている。なお、比較試料であるⅦ層の河川流路の砂礫層は、D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の全試料よりも 16 ～ 8mm の粒度階が卓越し、2mm 以下の細粒な粒度階が少ない特徴がある。

2）構成粒子の形状と組成

D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層とⅦ層の試料の 1mm の粒度階試料の構成粒子を第 38 図に示す。D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層の粒子は、黒雲母を含む花崗岩片や斜長石からなり、円磨度は 0.1 ～ 0.2（角～亜角）を示す。一方、Ⅶ層の粒子は、斜長石、花崗岩片、泥岩片、砂岩片、凝灰岩片などから構



第 37 図　各砂礫層試料の粒度組成

成され、円磨度は、泥岩片や砂岩片で 0.7（円磨）、斜長石片や花崗岩片で 0.5 ～ 0.6（円）を示す。

D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層とⅦ層の試料の 0.25mm の粒度階試料の構成粒子を第 39 図・第 40 図に示す。D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層の粒子は、斜長石を多く含み、黒雲母、石英と花崗岩片から構成され、円磨度は 0.1 ～ 0.2（角～亜角）を示す。D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層の各採取地点の粒子は、構成粒子の種類や円磨度にほとんど差異がみられない。一方、Ⅶ層の粒子は、斜長石、泥岩片、砂岩片、薄褐色岩片などから構成され、円磨度は、泥岩片や砂岩片で 0.5（円）、斜長石片や花崗岩片で 0.3 ～ 0.4（亜円）を示す。Ⅶ層の 0.25mm の粒度階は、1mm の粒度階試料と比較して、やや円磨度が低い傾向がある。

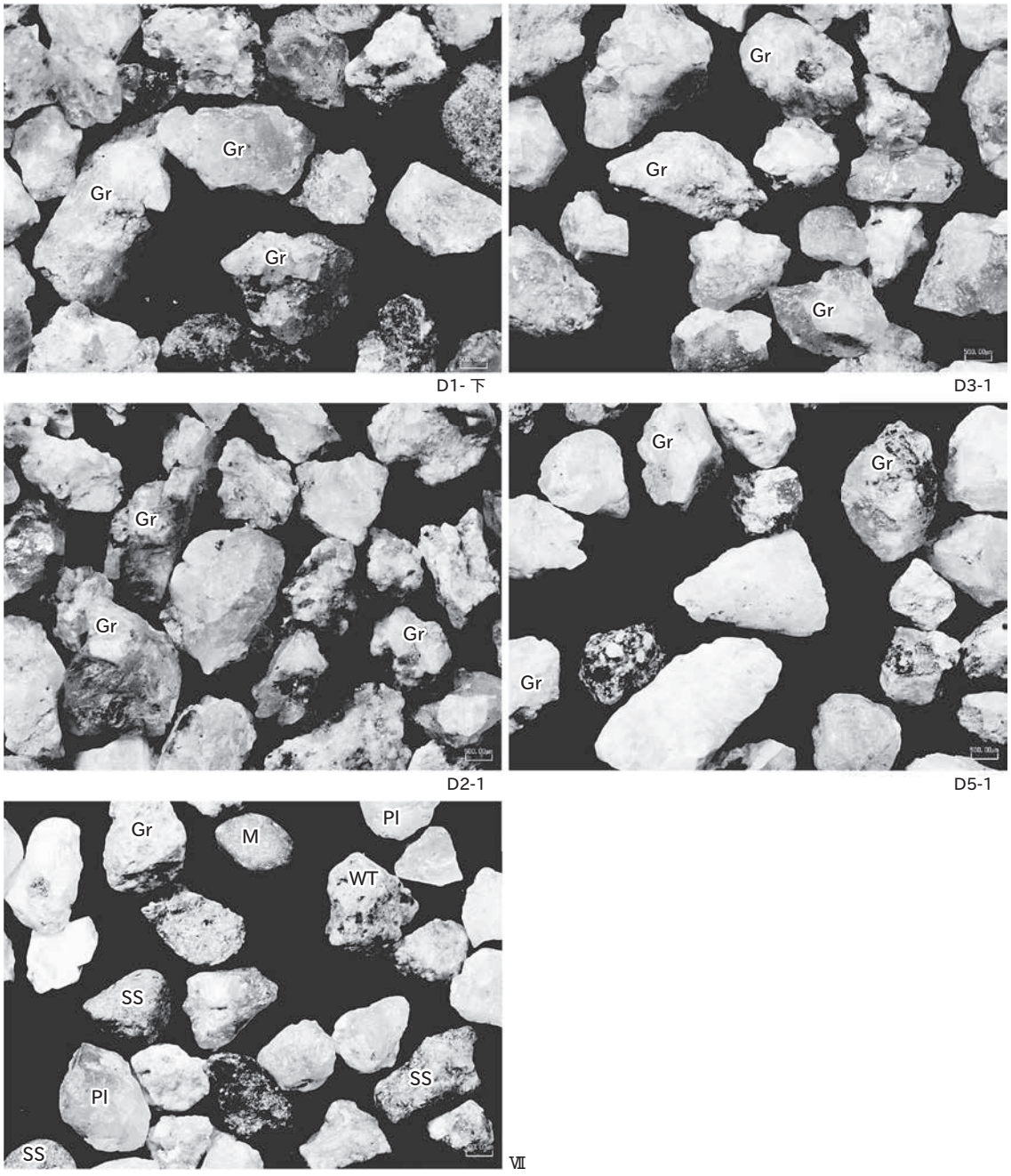
このように、D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層とⅦ層は、各粒度階において構成粒子や円磨度が大きくことなる。D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の各層の構成粒子の特徴は、遺跡の西側の山地を構成する黒雲母花崗岩を起源とする粒子のみからなり、円磨度が非常に低く運搬距離が短いことを示す。また、Ⅶ層は、高根川左岸の山地の地質を起源とする粒子を含み、ある程度の運搬距離があるため、粒度階の大きい粒子や軟質な粒子（泥岩など）で円磨度が大きくなっている。

D　砂礫層の起源と形成過程

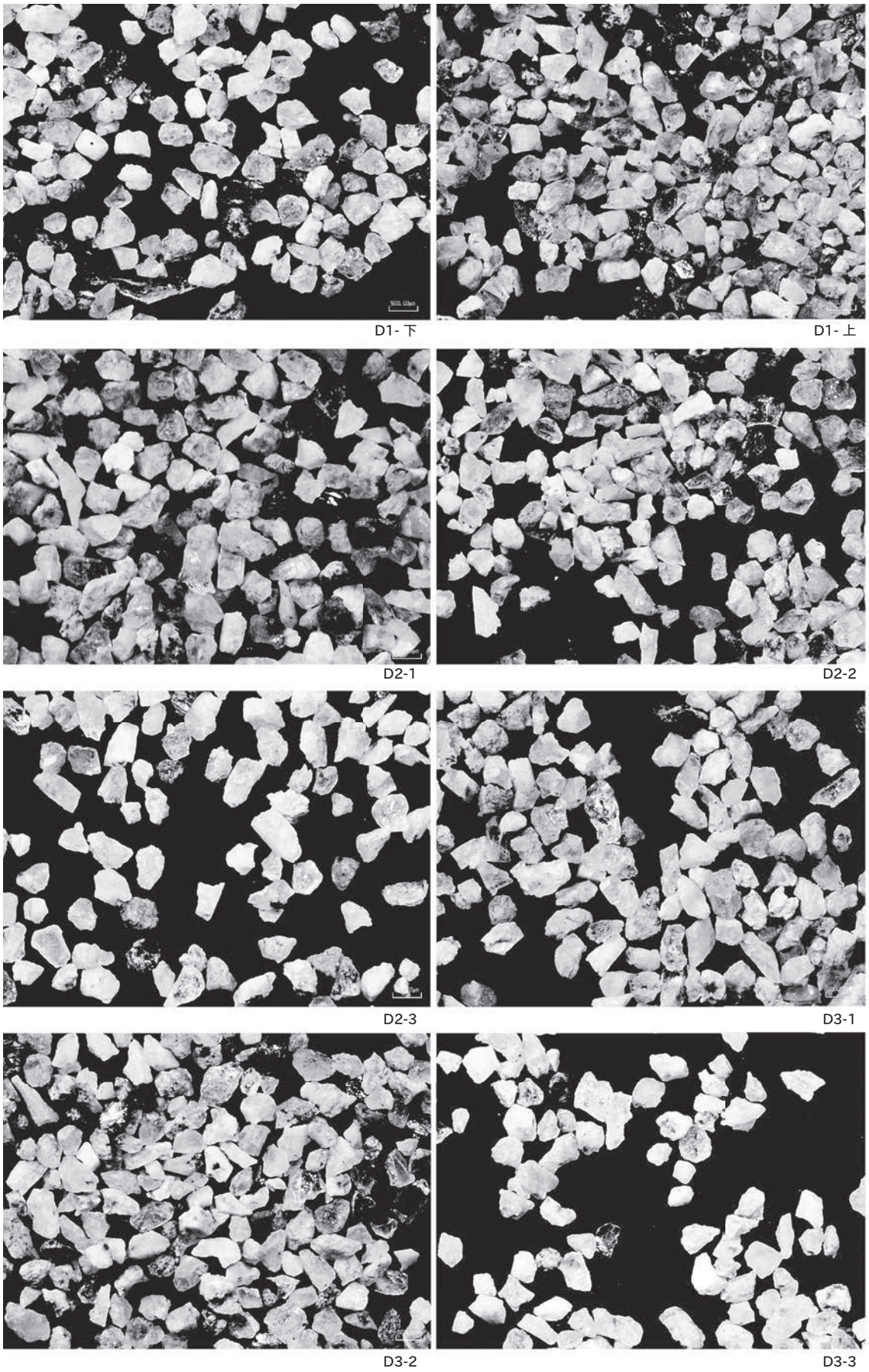
遺物を多く含む D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の形成過程について検討を行う。上野遺跡の西方の山地の地質は、岩船花崗岩と称される黒雲母花崗岩からなり（第 35 図）、典型的な稜線からの崩壊地形が認め

られる（第 34 図）。また、崩壊地形の山麓部には、扇状地状の地形がある（第 41 図）。この崩壊地形の末端部の扇状地状の地形は、猿沢や檜原地区を形成しているような扇状地と分布面積や規模が異なり、また、現在の檜原地区に認められる扇状地を流下する河川では、形成できない位置にある。このことから、崩壊地形の山麓部の扇状地状の地形は、崩壊堆積物によって形成された地形であると判断でき、上野遺跡の発掘地点は、この崩壊堆積物のマウンドの東方延長部に位置する。

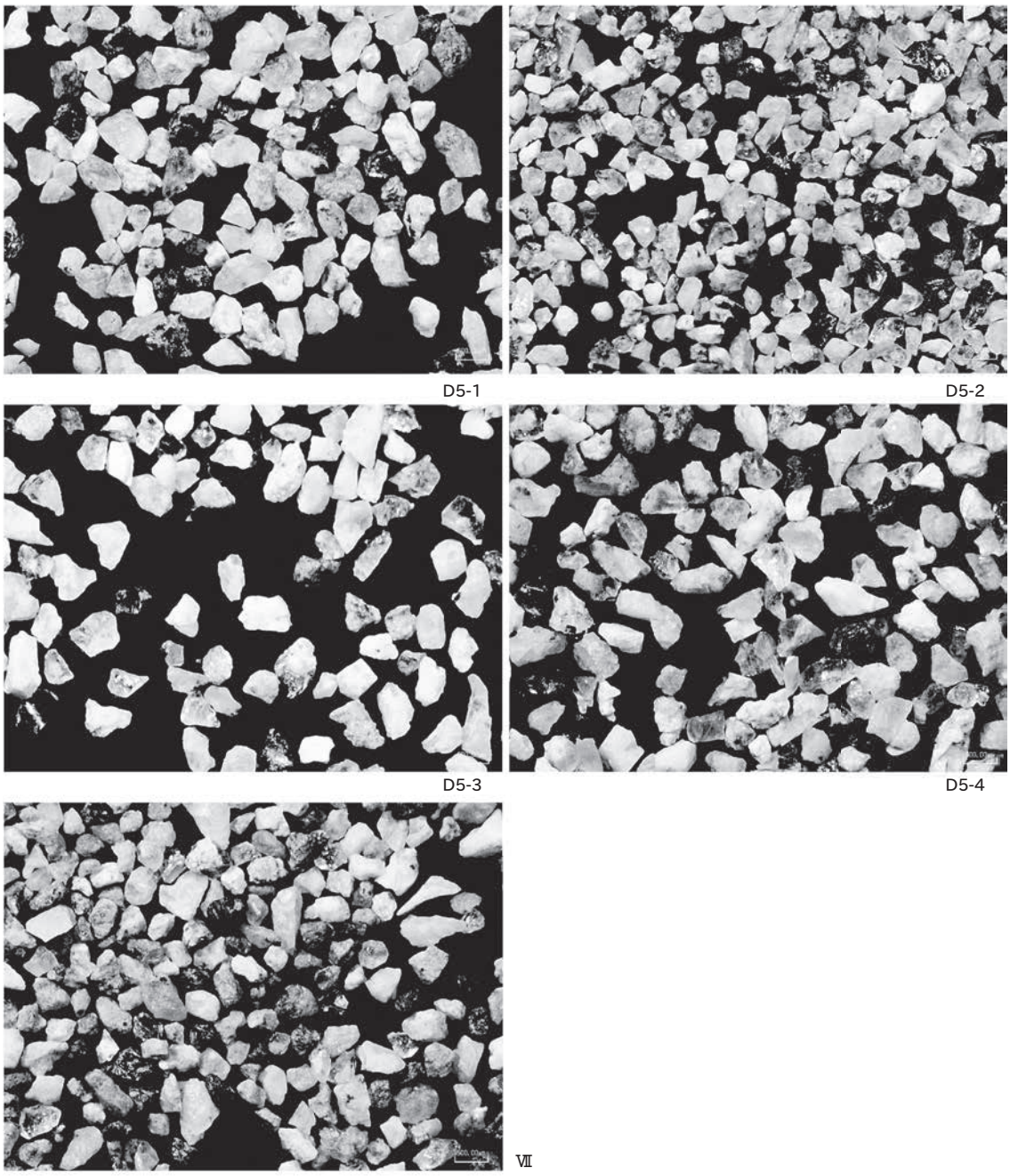
D1 層、D2 層、D3 層、D5 層の構成粒子は、山地を構成する黒雲母花崗岩を起源とする粒子のみから構成され、円磨度が非常に低いことから運搬距離は短いことが推定できる（第 38 図）。遺跡周辺の地形環境、砂礫層の構成粒子から判断すると、D1 層、D2 層、D3 層、D5 層は遺跡西方の崩壊堆積物を起源とする



第 38 図　各砂礫層試料の 1mm 粒度階の構成粒子
Gr：花崗岩、Pl：斜長石、M：泥岩、SS：砂岩、WT：凝灰岩



第 39 図　D1 層～ D3 層の 0.25mm 粒度階の構成粒子



第 40 図　D5 層、Ⅶ層の 0.25mm 粒度階の構成粒子

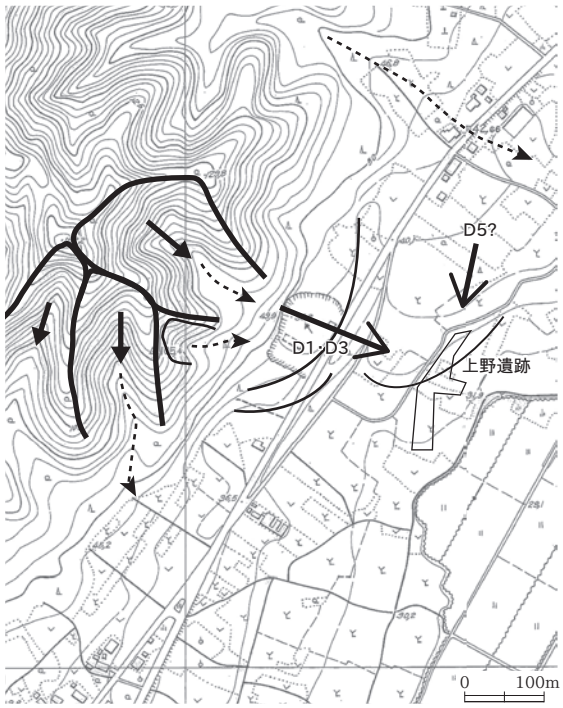
ことが明らかである。また、これらのうち下位の D1 層ほど粗粒であることから、下位ほど、初生的な崩壊堆積物を起源とし、上位ほど崩壊堆積物がさらに 2 次的に移動した堆積物である可能性がある。また、D3 層は、遺跡の西方（D3-1）地点ほど粗粒であり、D3 層が遺跡の西側から供給されたことを示唆する。

一方、現在の上野遺跡の周辺の地形は、北方の檜原地区を形成する扇状地地形の南方延長部に位置している（第 33 図）。遺跡セクションにみられる D5 層は、D5-1 地点と北方の D5-5 地点の試料が粗粒な堆積物をやや多く含むことから、遺跡西方の崩壊堆積物を起源とする堆積物ではなく、北方の檜原地区を形成する扇状地の形成プロセスを反映したものである可能性がある。

このように、遺物を多く含む砂礫層のうち D1 層、D2 層、D3 層は、遺跡西方の崩壊堆積物を起源としていることは明らかであり、含まれる遺物は、遺跡発掘地点より西方に立地していた生活空間から再堆

積したものであると考えられる。また、全体の地形形成プロセスからみると、遺跡西方の山地の崩壊は、河川環境から扇状地状の環境に変化するD1層等の下位層の形成時期であり、その後のD2層、D3層の形成の際に再び崩壊が発生したのではなく、山麓部に分布する初生的な崩壊堆積物が、比較的短期間の集中した時期に再移動したものと考えられる。

なお、D1層、D2層、D3層、D5層は、砂礫質であるため単層に区分されているが、堆積物の形成プロセスからみると頻繁に土砂が供給される環境ではないことから、D1～D3層の間層であるⅥ層、Ⅴ層、Ⅳ層は、下位の砂礫質部分と一連の堆積作用により運搬され、上位ほど細粒堆積物が多く含まれるため、間層として層位区分できたものである可能性がある。イベントによって地層が形成される堆積環境では、層相による層位区分と堆積物そのものの形成過程を合わせて考慮する必要がある。



第41図　上野遺跡付近の地形と砂礫層の供給方向
（5千分の1国土基本図に加筆）

引用文献

土谷信之・高橋　浩・柳沢幸夫・山元孝広・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・内藤一樹（1999）20万分の1地質図幅「村上」．地質調査所.

第Ⅶ章　調査のまとめ

1　中・近世の墓

土葬墓（SZ1）と火葬墓（SZ2）という葬法の異なる二つの墓を検出した。

SZ2 は調査時に中世墓と認識していたが、焼骨に伴う炭化材が 17 世紀中葉以降の放射性炭素年代値を示し（第Ⅵ章 2）、近世墓に渡来銭が伴う事例も珍しくはないことから、近世墓と見解を改めた。位置は調査区西壁に接しており、調査区外の西側に墓域が展開する可能性がある。試掘確認調査の 28-135 トレンチにおいて熙寧元寶が表採されている点もそれを示唆する。

SZ1 は人骨の鑑定により、被葬者は女性の可能性が高いという結果が得られた。（第Ⅵ章 4）。構築年代は不明とせざるを得ないが、立地や葬法において SZ2 との関連性が希薄な点や、共伴した 6 枚の渡来銭の初鋳年がすべて 12 世紀以前である点から、中世に遡る可能性が高い。さらに銭貨の初鋳年のまとまりを重視するならば、文献史料では 14 世紀までしか遡れない出羽街道の成立時期の問題とも関わってくる。今回は中世の土地利用痕跡の存在について事前の認識が薄く、十分な対応が取れなかったが、今後の調査はこの反省を踏まえて臨む必要がある。

2　縄文時代の環境と集落

A　集落の立地

調査区内に縄文時代の遺構は存在しないが、後期前葉の南三十稲場式を主体とする多量の土器と少量の土製品、石器・石製品が出土した。出土遺物のほとんどは 5 回にわたり調査区に流入した土石流による堆積物（D1 層～ D5 層）に含まれる。D1 ～ D3 は調査区の北西側から、D4・D5 は北東側から流入しており、南北に流れる旧河川の右岸と左岸に存在した集落をそれぞれ襲ったと考えられる（第 14 図）。D1 ～ D3 については、調査区の北西方向に虚空蔵山の山裾の崩壊の痕跡が確認できることから、ここが発生源と考えられる（第Ⅵ章 5）。

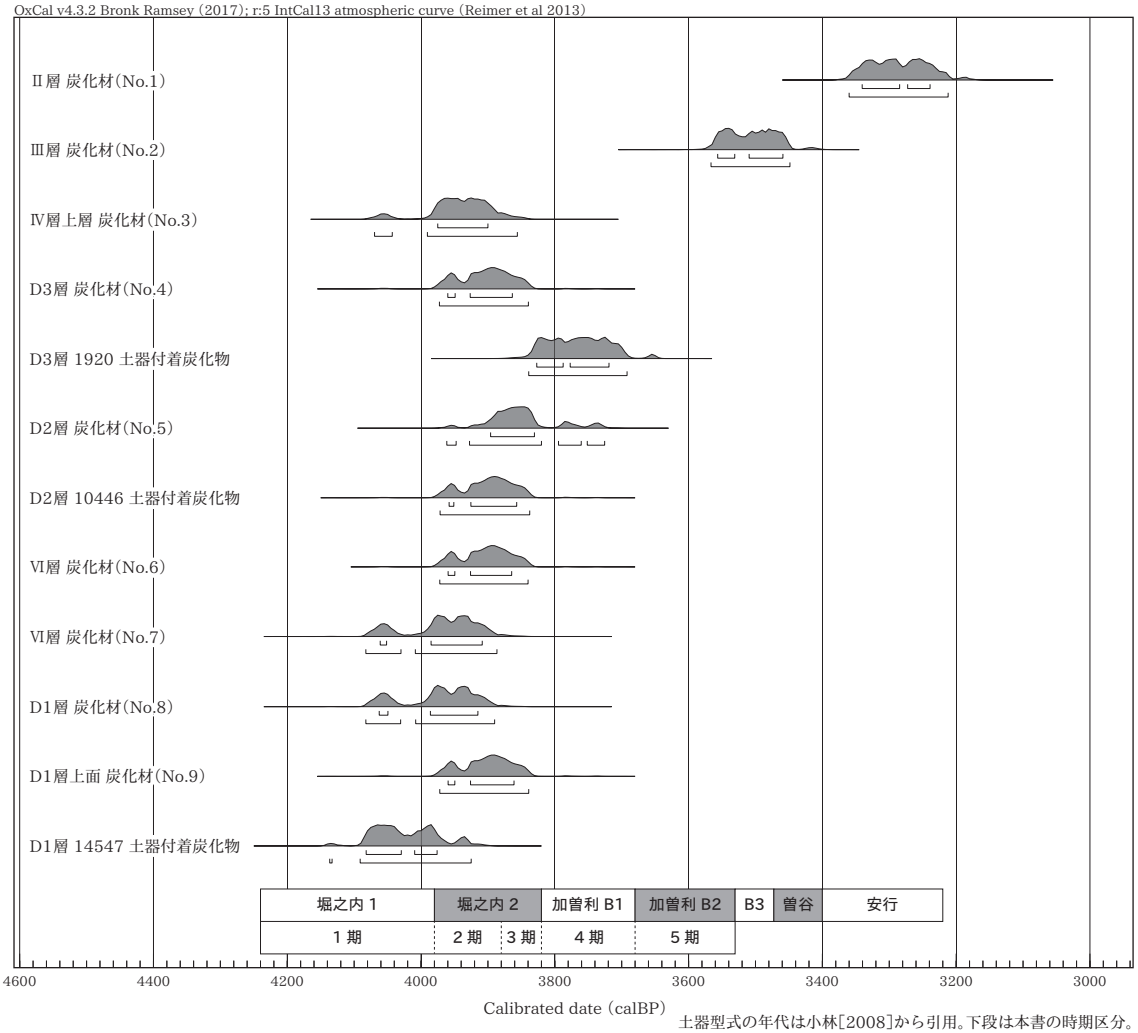
D4 層・D5 層出土遺物の供給源は周知の埋蔵文化財包蔵地としての「上野遺跡」の中心部と推定され、今後の調査対象範囲に含まれる。一方、D1 層～ D3 層出土遺物の供給源は朝日温海道路の計画範囲からは外れるものの、後述する D1 層出土遺物の様相から、調査区の至近に「上野遺跡」とは異なる居住域の存在が予測される。今後、周辺に開発が及ぶ際には、遺跡の存在を考慮した対応が求められる。

B　土石流の暦年代と集落の関係

調査区内の各層位及び土器から炭化物を採取し、AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した（第Ⅵ章 2）。土器付着炭化物は保存状態の良いものを任意に選んだため、土石流発生以前の年代の 1 点としか評価できない。また、土石流堆積物中の炭化材についても、土器と同様集落に伴う可能性があり、発生年代を示すとは限らない。こうした資料的な限界を踏まえながら、第 42 図には測定結果と東日本を中心とした縄文時代後期の較正年代［小林 2008］及び本書での時期区分の関係を示した。

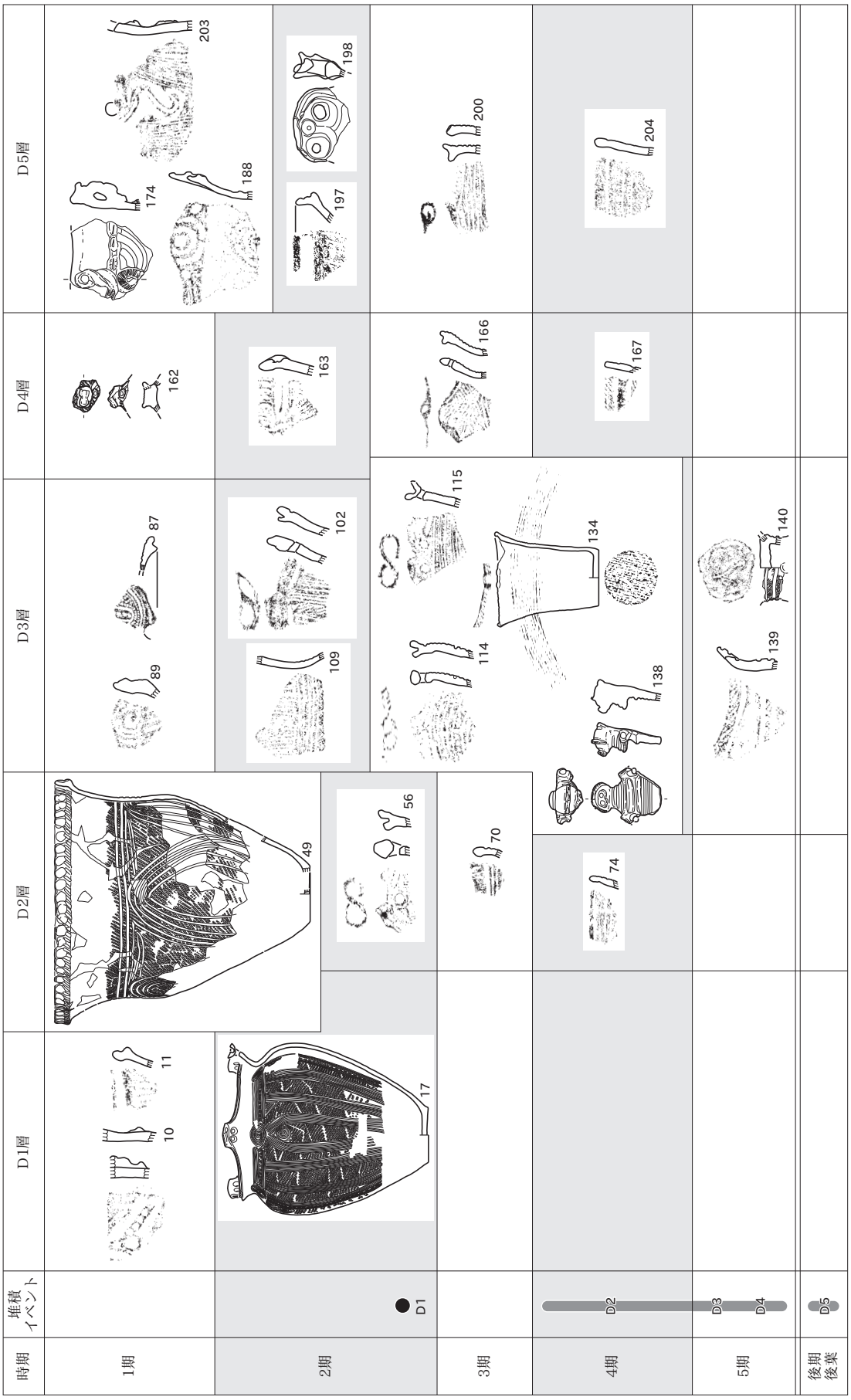
第 42 図によれば、D1 層炭化物 3 点の年代値の確率分布のピークが重複するのは堀之内 2 式期の前半であり、D2 層・D3 層はそれよりやや新しい値を示す。土器の型式学的検討からは、D1 層は他層と異なり、堀之内 2 式の古・中段階と並行関係にある南三十稲場式新段階（2 期）より新しい段階を含まないことが判明している（第Ⅴ章 2）。こうした異なるアプローチからの所見を総合すると、D1 の発生時期と堆積物に包含される土器の年代の下限はほぼ一致すると理解でき、土石流は集落をリアルタイムで襲った可能性が高い。また、D1 層出土土器には同一個体がまとまって出土し完形に復元できる個体が多く、それほど遠くから流されてきたとは考えにくいため、集落は調査区の至近に存在すると推定される。

人工遺物をほとんど含まないⅡ層・Ⅲ層炭化物の測定値は堆積時期に近似する年代と解釈でき、これを基準とすると、D2 ～ D4 の発生時期は 5 期以前、D5 の発生時期は後期後葉の 3400calBP 頃に置ける。また、D2 層には 4 期の土器がわずかに含まれることから D2 の発生時期の上限が定まり、土器編年と堆積イベントの関係は第 43 図のように整理できる。D1 を除き、土石流の発生と集落の存続時期の関係は不明であるが、「上野遺跡」に関しては、D4 層・D5 層出土土器が 1 期を主体とし 5 期を含まないことから（第 3 表）、土石流発生以前に廃絶していた可能性が高い。



土器型式の年代は小林[2008]から引用。下段は本書の時期区分。

第 42 図　放射性炭素年代測定暦年較正値と土器型式



第 43 図　土器編年と堆積イベントの関係

C　上野遺跡から考える縄文時代後期の遺跡動態

縄文時代後期に頻発した土石流災害は、調査区を南北に流れる河川縁辺に存在した集落に重大な影響を及ぼした。D3 の発生時には河川が完全に埋没していたことが遺物の出土状況から確認でき（第Ⅲ章 4）、最後の土石流である D5 の発生前に調査区周辺での生活は終焉を迎えていたと考えられる。今回の調査区に集落そのものは存在しなかったものの、以上のような周辺における複数の集落の存在とその廃絶の一因が明らかになった。

地質学的な見地からは、D2 層・D3 層は、D1 を引き起こした遺跡西方の山地の崩壊によって山麓に蓄積された堆積物が再移動したものと捉えられるという（第Ⅵ章 5）。すなわち、D1 の発生期である縄文時代後期前葉の中頃（2 期）に最も大きな環境変化が想定される。このことは、各層とも後期中葉（4 期以降）の遺物が極めて少ない点からも傍証される（第 3 表）。

第Ⅱ章 2 で概観したように、三面川水系平野部では、「拠点的集落」である長割遺跡が後期前葉で終焉し、晩期へ継続する古四王林遺跡は後期後葉以降の遺物で占められるというように、後期中葉は遺跡動態の画期と認識できる。こうした地域的動静とどのように関わるかは今後の検討課題であるが、後期前葉における遺跡の衰退要因を捉えられたことは今回の調査の成果と言える。

要　　約

1　上野遺跡は新潟県村上市猿沢に所在し、高根川右岸の扇状地に立地する。調査前は荒地であった。

2　調査は朝日温海道路の建設に伴い、平成 29 年度に実施した。調査面積は 3,355m^2 である。

3　縄文時代の遺跡が主な調査対象であったが、その過程で中・近世の墓を 2 基検出した。葬法は土葬と火葬であり、それぞれ渡来銭が 6 枚と 1 枚共伴した。

4　調査区内に縄文時代の遺構は存在しないが、後期前葉の南三十稲場式を主体とする多量の土器と少量の土製品、石器・石製品が出土した。

5　縄文時代の遺物のほとんどは 5 回にわたり調査区に流入した土石流堆積物に含まれる。出土遺物の位置情報をもとに土石流の流入経路を復元し、調査区周辺に複数の居住域が存在したことを示した。

6　縄文時代の集落は、調査区内を南北に流れる河川の縁辺に存在したが、相次ぐ土石流による周辺の環境変化により衰退したと考えられる。

引用・参考文献

秋田かな子　1997　「石神類型覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告』7　東海大学校地内遺跡調査委員会

伊藤正一　1980　「諸城跡の分布」『朝日村史』 朝日村教育委員会

上原甲子郎　1959　「新潟県岩船郡古四王林遺跡」『日本考古学年報』12　日本考古学会

奥三面を考える会　2001　『三面川流域の考古学』1

金内　元　2009　「下越地方における縄文時代後期前葉末～中葉の土器について」『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会

金内　元　2013　「南三十稲場式土器を再考する」『三面川流域の考古学』第 11 号　奥三面を考える会

金子優子　2002a　「第Ⅴ章 2B（3）後期前葉」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 新潟県朝日村教育委員会・新潟県

金子優子　2002b　「第Ⅶ章 1A（1）後期前葉の土器様相」『朝日村文化財報告書第 22 集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』 新潟県朝日村教育委員会

國島　聡　1988　「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について－いわゆる『三仏生式』の再検討－」『新潟考古学談話会会報』第 1 号

小林謙一　2008　「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学 2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－』 同成社

小林　克ほか 1989　『秋田県文化財調査報告書第 181 集 八木遺跡発掘調査報告書』 秋田県埋蔵文化財センター

小松　彰　1996　「出羽街道の概説」『新潟県歴史の道調査報告書第 10 集 浜通り・出羽街道』 新潟県教育委員会

酒井亜紀　2002　「第Ⅴ章Ｃ（4）石匙」『朝日村文化財報告書第 22 集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）本文編』 新潟県朝日村教育委員会

坂上有紀　2011　「遺跡をとりまく環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 長割遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

品田高志　1996　「新潟県の様相」『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会

品田高志ほか 2001　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第 37 集 十三本塚北』 柏崎市教育委員会

品田高志　2002　「新潟県における縄文後期前葉期の土器群－柏崎市十三本塚北遺跡を中心にして」『第 15 回縄文セミナー 後期前半の再検討』 縄文セミナーの会

上越市史編さん委員会　2003　『上越市史』別編 1　上杉氏文書集 1

鈴木道之助　1991　『図録石器入門辞典＜縄文＞』 柏書房

高木　晃ほか 2012　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 589 集 川目Ａ遺跡第 5 次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

高橋保雄ほか 1998・1999　「岩船郡朝日村古四王林遺跡出土の縄文時代後・晩期の遺物について（上）・（下）」『新潟考古』9・10　新潟県考古学会

滝沢規朗　2011a　「第Ⅴ章 ２Ａ3）分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 長割遺跡』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2011b　「第Ⅶ章 １Ａ1）b「敷物圧痕」について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 長割遺跡』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗ほか 2002　『朝日村文化財報告書第 22 集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県

滝沢規朗ほか 2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 224 集 長割遺跡』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

田中英司　2004　『石器実測法 情報を描く技術』 雄山閣

田中耕作　1990　「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報 第 5 号』 新潟県考古学談話会

田中耕作・渡邊裕之　1999　「第 2 章 第 2 節 第 5 項 後期」『新潟県の考古学』 高志書院

谷口康浩　2003　「縄文時代中期における拠点集落の分布と領域モデル」『考古学研究』 第 49 巻第 4 号　考古学研究会

富樫秀之ほか 2002　『朝日村文化財報告書第 21 集 アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会・新潟県

長岡市立科学博物館　1957 『長岡科学博物館考古研究室調査報告書第 1 冊 三佛生』

新潟県教育委員会　2017 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 272 集　平成 26・27 年度県内遺跡試掘・確認調査』

新潟県教育委員会　2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 280 集　平成 28 年度県内遺跡試掘・確認調査』

新潟県農地部　1989 『土地分類基本調査　村上』

日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会 2016 『第Ⅰ分科会　津軽海峡圏の縄文文化研究報告資料集』 日本考古学会

松永篤知　2008　「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第 92 巻第 2 号　日本考古学会

山崎忠良ほか 2002　『元屋敷遺跡Ⅲ』朝日村文化財報告書第 23 集　新潟県朝日村教育委員会・新潟県

山田洋一ほか 1986　『青森県埋蔵文化財調査報告書第 97 集 大石平Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会

横山勝栄　1976　『熊登遺跡』 新潟県岩船郡朝日村教育委員会

横山勝栄　1980　「縄文時代」『朝日村史』 朝日村教育委員会

観察表・図版凡例

観察表に掲載した遺物は土器・土製品・石器・石製品・銭貨があり、それぞれの遺物の特徴に応じて観察項目を設けた。観察表の記載方法は以下の通りとする。なお、遺構については数が少ないため凡例を割愛した。

法量　遺物の計測部位・名称は下図の通りとする。

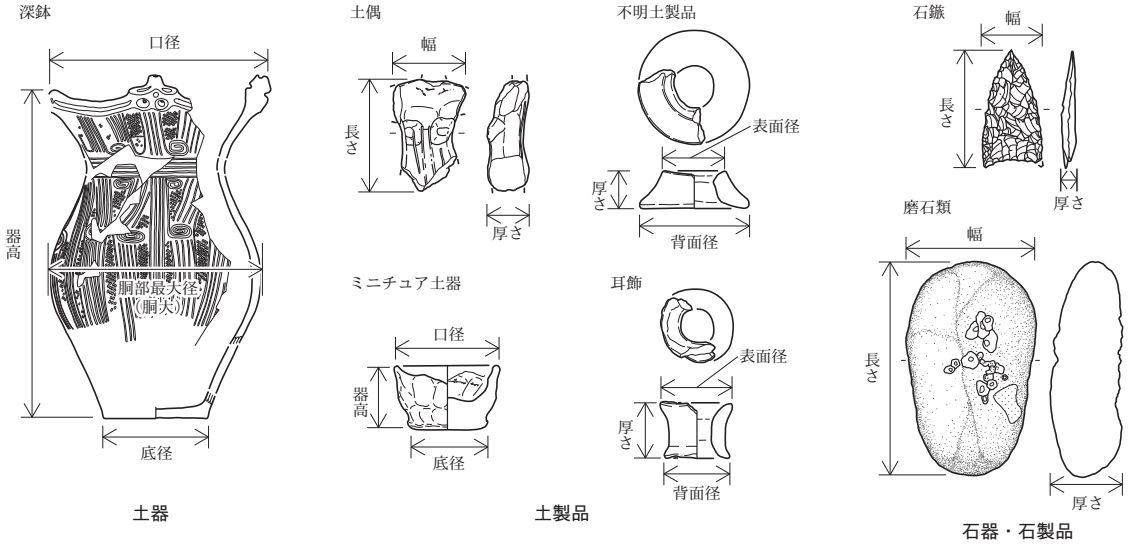
胎土　土器・土製品の胎土は、『長割遺跡』を参考に以下のように分類した。

1類　きめ細かい生地土に、細かな混和材が認められるもの。
2類　きめ細かい生地土に、大きめの混和材や雲母が認められるもの。
3類　大粒の白色粒子（石英、流紋岩・花崗岩）を顕著に含み、長石・雲母を伴うもの。
4類　雲母・白色粒子・長石を含むが、3類に比べて白色粒子が顕著でないもの。
5類　海綿骨針が特に多量に認められるもの。

色調　色調は、黒斑やスス・コゲなどの影響のない範囲において以下のように分類した。

1類　橙色～赤褐色　　2類　黄橙～黄色　　3類　灰色～白色　　4類　コゲ茶色　　5類　黒色

残存　土器は、口縁部・底部を含む破片については推定される円周における割合を計測し、円周を36分割した際の分子に換算して記載した。例えば「口」の値が9であれば口縁部が1/4残存していることを表す。その他の遺物は残存部位または残存状況を簡潔に記述した。なお、銭貨はすべて完形のため割愛した。



遺物の計測部位と名称

中世遺構観察表

図版No.	遺構No.	位置	確認面	長径	短径	深さ	平面形	断面形	主軸	出土遺物	動・植物遺存体	重複	備考
3	SZ1	8C5・10、9C1・6	Ⅱ	112	88	31	楕円形	台形状	N-14° -W	銭貨	人骨		6枚の銭貨が銹着して出土。
2	SZ2	6A14・19	Ⅱ	(41)	(49)	12	円形	皿状	N-22° -W	銭貨	人骨		過半が消失するため平面形状は推定。

銭貨観察表

図版No.	報告No.	分類	出土地点	層位	法量（cm・g）				初鋳年	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
4	1	開元通寶	SZ1	2	2.34	2.35	0.12	3.06	621年（唐）	背文に「潤」
4	2	熙寧元寶	SZ1	2	2.46	2.46	0.10	3.25	1068年（北宋）	篆書
4	3	淳化元寶	SZ1	2	2.41	2.40	0.11	3.18	990年（北宋）	真書
4	4	皇宋通寶	SZ1	2	2.30	2.32	0.11	2.85	1039年（北宋）	篆書

図版No.	報告No.	分類	出土地点	層位	法量（cm・g）				初鋳年	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
4	5	元豊通寶	SZ1	2	2.44	2.46	0.09	2.76	1078年（北宋）	篆書
4	6	天聖元寶	SZ1	2	2.51	2.50	0.10	2.26	1023年（北宋）	真書
4	7	開元通寶	SZ2	1	2.32	2.33	0.09	2.00	621年（唐）	

縄文土器観察表（1）

図版No.	報告No.	器種	大分類	細別	出土地点	層位	文様			時期	法量（cm）				胎土	色調	残存率		備考
							口縁部・頸部	胴部	地文		口径	器高	底径	胴大			口	底	
4	8	浅鉢?	三十稲場式		3A23	D1	刺突　横位沈線 縦位・弧状集合沈線			1					1	1	1		
4	9	浅鉢?	三十稲場式		2A25	D1	刺突　横位沈線			1					1	1	3		
4	10	深鉢	三十稲場式		3A25	D1		隆帯　刺突　円形窩文		1					4	3			
4	11	深鉢	南三十稲場式	A	3A9	D1	縦位沈線			1					1	1	2		
4	12	深鉢	南三十稲場式	A	4A17	D1		縦位沈線	縦位LR	1					2	4			
4	13	深鉢	南三十稲場式		4A11・ 4A21	D1	縦位集合沈線		横位LR?	1～2					3	5	3		
4	14	深鉢	南三十稲場式		3A6	D1	集合沈線		横位LR	1～2					4	4			
4	15	深鉢	南三十稲場式		3A11	D1		集合沈線	横位LR?	1～2					2	1			
4	16	深鉢	南三十稲場式		2A25	D1		集合沈線	横位LR	1～2					1	1			
4	17	深鉢	南三十稲場式	B	2A14・ 2A15・ 2A20・ 3A11	D1	8字状突起 穿孔　刺突　沈線 横位集合沈線　円形刺突列　渦巻文	縦位集合沈線	縦位LR	2	26.8	35.4	9.4	29.3	1	2	35	36	
4	18	深鉢	南三十稲場式	B	2A8・ 2A19	D1	リボン状突起　穿孔 縦位集合沈線　渦巻文	縦位集合沈線 渦巻文	縦位LR	2	23.7	37.9	11.2	23.0	1	2	8	8	
4	19	深鉢	南三十稲場式	B	2A19	D1	楕円形文　斜位集合沈線			2					4	1	3		
4	20	深鉢	南三十稲場式	B	2A10	D1	楕円形文　斜位集合沈線			2					2	4	6		
4	21	深鉢	南三十稲場式	B	2A10	D1	楕円形文　斜位集合沈線			2					1	2	3		
4	22	深鉢	南三十稲場式	B	2A15	D1	穿孔　楕円形文　縦位集合沈線			2					1	4	4		
4	23	深鉢	南三十稲場式	B	3A6	D1	楕円形文　斜位集合沈線　縄文充填		横位LR	2					2	4	1		
5	24	深鉢	南三十稲場式	B	2A14	D1	刻み目　楕円形文　縦位集合沈線 縄文充填		横位RL	2					1	4	3		
5	25	深鉢	南三十稲場式	B	4A12	D1	刻み目　楕円形文　縦位集合沈線		縦位LR	2					1	1	2		
5	26	深鉢	南三十稲場式	B	3A13	D1	刻み目　楕円形文　縦位集合沈線 縄文充填		縦位LR	2					2	4	4		
5	27	深鉢	南三十稲場式	B	2A19	D1	横位集合沈線	渦巻文　縦位集合沈線　縄文充填	縦位LR	2					4	1			
5	28	深鉢	南三十稲場式	B	3A9	D1		集合沈線　縄文充填	横位LR	2					1	1			
5	29	深鉢	南三十稲場式	B	4A19	D1		集合沈線		2					4	4			
5	30	深鉢	南三十稲場式	B	5A17	D1		縦位集合沈線	横位LR	2					4	4			
5	31	深鉢	南三十稲場式	B	3A18	D1		縦位集合沈線	縦位LR	2					4	2			
5	32	深鉢	南三十稲場式	B	3A7	D1		縦位集合沈線 縄文充填	縦位LR	2					3	1			
5	33	深鉢	非在地		3A12	D1	突起　刻み目　沈線　円形刺突 縦位沈線		横位RL						1	1	6		
5	34	深鉢	非在地		4A14	D1	隆帯　刺突　縦位沈線								3	1			
5	35	深鉢	その他		3A11・ 3A12	D1	条痕	条痕			34.2	49.1	10.7	40.1	5	1	6	27	
5	36	深鉢	その他		2A10	D1					21.7				1	4	5		
5	37	深鉢	その他		3A8	D1	縦位沈線								1	4	3		
5	38	深鉢	その他		3A16	D1	穿孔								1	4	2		焼成後穿孔
5	39	深鉢	その他		2A24	D1			横位LR						2	1	4		
5	40	深鉢	その他		4A20	D1		縦位集合沈線							4	2			
5	41	深鉢	その他		3A13	D1		格子目状沈線							1	4			
5	42	深鉢	その他		3A8	D1							11.4		1	2		25	
6	43	深鉢	その他		3A23	D1			横位LR				12.2		4	1		36	底：網代編み
6	44	深鉢	その他		2A14・ 3A15	D1			横位LR				10.6		4	2		11	
6	45	深鉢	その他		2A19	D1							11.2		3	2		4	
6	46	深鉢	三十稲場式		4B1	D2	8字状突起　鎖状文　縦位沈線		横位LR	1	30.2				3	1	6		
6	47	深鉢	三十稲場式		11C7	D2		隆帯　刺突列		1					4	1			
6	48	蓋?	三十稲場式		10C13	D2	沈線			1					1	3	1		
6	49	深鉢	南三十稲場式	A	6A18	D2	指頭圧痕　刻み目　横位沈線	縦位沈線		1	46.9	50.2	10.9	39.6	1	1	30	36	
6	50	深鉢	南三十稲場式	A	9C10	D2	刺突　横位凹線		縦位LR	1					3	5	1		
6	51	深鉢	南三十稲場式	A	7B2	D2		縦位・横位沈線	横位LR	1					4	4			
6	52	深鉢	南三十稲場式	A	11C11	D2		縦位沈線	縦位LR	1					1	2	1		
6	53	深鉢	南三十稲場式	A	11C11	D2		沈線　縄文磨消	横位LR	1					4	4			

縄文土器観察表（2）

図版No.	報告No.	器種	大分類	細別	出土地点	層位	文様			時期	法量（cm）				胎土	色調	残存率		備考
							口縁部・頸部	胴部	地文		口径	器高	底径	胴大			口	底	
6	54	深鉢	南三十稲場式	A	9B24	D2	刻み目　穿孔　縦位沈線　縄文磨消		横位LR	1					2	2	3		
6	55	深鉢	南三十稲場式	B	11C6	D2	横位・縦位沈線　縄文充填		横位RL	2					1	4	1		
6	56	深鉢	南三十稲場式	B	10C24	D2	8字状突起　穿孔　横位沈線 縦位集合沈線			2					2	5	3		
6	57	深鉢	南三十稲場式	B	10B16	D2	8字状突起　穿孔　横位沈線 斜位集合沈線		縦位LR	2					1	2	4		
6	58	深鉢	南三十稲場式	B	7B25	D2	横位沈線　縦位集合沈線　縄文充填		縦位LR	2					1	1	4		
6	59	深鉢	南三十稲場式	B	10D2	D2	沈線　斜位集合沈線　縄文充填		縦位LR	2					3	1	4		
6	60	深鉢	南三十稲場式	B	9B20	D2	横位沈線　刻み目　斜位集合沈線			2					3	2	2		
6	61	深鉢	南三十稲場式	B	10C13	D2	円形刺突列　横位沈線　穿孔? 横位集合沈線		横位LR	2					1	4			
7	62	深鉢	南三十稲場式	B	9B25	D2	横位集合沈線	縦位集合沈線	縦位LR	2					1	5			
7	63	深鉢	南三十稲場式	B	9B23	D2		横位・縦位集合沈線	横位LR	2					1	2			
7	64	深鉢	南三十稲場式	B	9B10	D2	横位沈線	弧状・縦位集合沈線	縦位LR?	2					4	1			
7	65	深鉢	南三十稲場式	B	9B2	D2	横位・縦位集合沈線		縦位LR	2					1	1			
7	66	深鉢	南三十稲場式	B	9C8	D2	横位・縦位集合沈線		縦位LR	2					3	4			
7	67	深鉢	南三十稲場式	B	9B23	D2		横位集合沈線 円形刺突列	横位LR	2					3	4			
7	68	深鉢	南三十稲場式	B	11D5	D2		集合沈線		2					1	4			
7	69	深鉢	南三十稲場式	B	10C6	D2		渦巻文　刺突 横位・縦位集合沈線	縦位LR	2					1	4			
7	70	深鉢	南三十稲場式	B	9C9	D2	刻み目　横位沈線　横位集合沈線			3					1	5	2		
7	71	深鉢	南三十稲場式	B	9C10	D2	刻み目　横位沈線　横位集合沈線			3					1	4	3		
7	72	深鉢	南三十稲場式	B	9C10	D2	刻み目　横位集合沈線			3					4	4	2		
7	73	深鉢	非在地		10C9	D2	U字状沈線　横位沈線　縄文磨消		横位LR	2～3					1	2	5		
7	74	深鉢	非在地		8A23	D2	横位沈線　縄文充填		横位LR	4					1	2	2		
7	75	深鉢	その他		6A18	D2	指頭圧痕			1	30.2	39.1	8.3	27.5	1	1	10	36	
7	76	深鉢	その他		10C11	D2			横位L						1	5			
7	77	深鉢	その他		10C11	D2			縦位L						3	5	3		
7	78	深鉢	その他		8B5	D2		縦位沈線							4	1			
7	79	深鉢	その他		11C11	D2			横位L						1	4			
7	80	深鉢	その他		10C19	D2		縦位沈線							4	1			
7	81	深鉢	その他		10C6	D2							9.0		4	2		6	底：飛びござ目編み
7	82	深鉢	その他		10C17	D2							10.8		1	3		6	底：飛びござ目編み
7	83	深鉢	その他		9B19	D2							11.2		3	2		5	底：飛びござ目編み
7	84	深鉢	その他		10B16	D2							11.3		2	2		4	底：飛びござ目編み
7	85	深鉢	その他		11C6	D2							8.8		4	1		6	
7	86	深鉢	その他		10C22	D2							9.6		4	1		11	
7	87	蓋	三十稲場式		7B10	D3	沈線　刺突			1					1	4	1		
7	88	蓋	三十稲場式		9B23	D3	沈線　刺突			1					4	1	1		
7	89	深鉢	南三十稲場式	A	8B16	D3	渦巻文　沈線			1					4	2	2		
7	90	深鉢	南三十稲場式	A	8B16	D3		沈線	横位LR	1					4	1			
7	91	深鉢	南三十稲場式		9C8	D3	円形刺突　横位沈線		横位LR	1					1	4	2		
7	92	深鉢	南三十稲場式		9E20	D3	指頭圧痕			1					4	1	3		
7	93	深鉢	南三十稲場式		10B11	D3	8字状突起　内面：沈線		横位LR	1					4	4	2		
7	94	深鉢	南三十稲場式		10C14	D3	刺突			1					4	2	1		
7	95	深鉢	南三十稲場式		10C17	D3	刺突		縦位LR	1					1	4	1		
7	96	深鉢	南三十稲場式	B	8B18	D3	円形窩文　横位沈線　縦位集合沈線		縦位LR?	2					1	2	2		
7	97	深鉢	南三十稲場式	B	9D5	D3	刻み目　横位集合沈線			2					1	4	1		
7	98	深鉢	南三十稲場式	B	9D10	D3	横位沈線　縦位集合沈線			2					2	4	1		
7	99	深鉢	南三十稲場式	B	10D6	D3	刺突　縦位集合沈線			2					3	1	2		
7	100	深鉢	南三十稲場式		10C22	D3	横位沈線　刻み目		横位LR	2					1	2	1		
7	101	深鉢	南三十稲場式		10C20	D3	刻み目　楕円形文　縦位沈線		縦位LR	2					2	4	2		
7	102	深鉢	南三十稲場式	B	9B23	D3	8字状突起　穿孔　横位沈線 縦位集合沈線		縦位LR	2					2	2	2		
7	103	深鉢	南三十稲場式	B	9C12	D3	刻み目　指頭圧痕　楕円形文 縦位集合沈線		縦位LR?	2					3	2	1		
7	104	深鉢	南三十稲場式		9D7	D3	刻み目　穿孔　楕円形文			2					2	1	2		
7	105	深鉢	南三十稲場式	B	9B20	D3	斜位集合沈線　横位集合沈線 横位沈線			2					1	4	1		
7	106	深鉢	南三十稲場式	B	9C5	D3	刻み目　横位沈線　縦位集合沈線		縦位LR?	2					3	2	2		
8	107	深鉢	南三十稲場式	B	10B24	D3	横位沈線　縦位集合沈線 内面：刻み目　横位沈線		横位LR?	2					4	2	1		
8	108	深鉢	南三十稲場式	B	9C4	D3	集合沈線		横位LR	2					2	2			
8	109	深鉢	南三十稲場式	B	10C18	D3	横位・縦位集合沈線		縦位LR	2					2	4			
8	110	深鉢	南三十稲場式	B	10C4	D3		縦位集合沈線 縄文充填	縦位LR	2					2	4			
8	111	深鉢	南三十稲場式	B	10C11	D3		縦位集合沈線	縦位LR	2					4	1			
8	112	深鉢	南三十稲場式	B	9C20	D3	8字状突起　刻み目　横位集合沈線			3					1	5	2		
8	113	深鉢	南三十稲場式	B	10C20	D3	8字状突起　横位集合沈線　刻み目			3					2	5	2		
8	114	深鉢	南三十稲場式	B	8B9	D3	8字状突起　刻み目　円形刺突列 横位沈線　横位集合沈線			3					2	4	3		

縄文土器観察表（3）

図版No.	報告No.	器種	大分類	細別	出土地点	層位	文様			時期	法量（cm）				胎土	色調	残存率		備考
							口縁部・頸部	胴部	地文		口径	器高	底径	胴大			口	底	
8	115	深鉢	南三十稲場式	B	9B2	D3	8字状突起　穿孔　横位沈線 横位集合沈線			3					2	4	3		
8	116	深鉢	南三十稲場式	B	10C21	D3	8字状突起　円形刺突列　横位集合沈線			3					1	4	4		
8	117	深鉢	南三十稲場式	B	10D2	D3	円形突起　刻み目　穿孔　集合沈線		横位LR	3					1	5	2		
8	118	深鉢	南三十稲場式	B	10C9	D3	円形突起　刻み目　横位集合沈線			3					2	4	4		
8	119	深鉢	南三十稲場式	B	9C23	D3	円形突起　刻み目　縦位沈線 横位集合沈線			3					1	5	1		
8	120	深鉢	南三十稲場式	B	10C21	D3	円形突起　刻み目　横位集合沈線			3					1	4	2		
8	121	深鉢	南三十稲場式	B	10C13	D3	刻み目　横位集合沈線			3					1	2	2		
8	122	深鉢	南三十稲場式	B	10C24	D3	刻み目　横位集合沈線　縦位沈線			3					5	2	2		
8	123	深鉢	南三十稲場式	B	10D19	D3	刻み目　横位集合沈線			3					1	4	1		
8	124	深鉢	南三十稲場式	B	10D2	D3	刻み目　横位集合沈線			3					1	4	1		
8	125	深鉢	南三十稲場式	B	10D7	D3	横位沈線　横位集合沈線			3					2	4	1		
8	126	深鉢	南三十稲場式	B	10C17	D3	斜位・横位集合沈線			3					1	4	1		
8	127	深鉢	南三十稲場式	B	9D10	D3	横位沈線　横位集合沈線			3					1	4	2		
8	128	深鉢	南三十稲場式	B	10B11	D3	横位沈線　横位集合沈線			3					2	4	1		
8	129	深鉢	南三十稲場式	B	8D10	D3	横位集合沈線			3					1	2	2		
8	130	深鉢	南三十稲場式	B	10C18	D3	横位集合沈線			3					1	1			
8	131	深鉢	非在地		8G3	D3	隆帯　円形窩文　逆U字状沈線			1～2					2	1	1		
8	132	深鉢	非在地		10C1	D3	矢羽根状刻み目　横位集合沈線								1	4	2		
8	133	深鉢?	非在地		9C6	D3	内面：横位集合沈線　弧線文			2～3					4	2	1		浅鉢の可能性有り
8	134	深鉢	非在地		11E9	D3	刻み目　突起	横位集合沈線 区画文		3	9.3	10.7	5.7		1	4	27	36	底：飛びござ目編み
8	135	深鉢	非在地		7A25	D3		連鎖状文		3					1	1			
8	136	深鉢	非在地		8B18	D3		沈線　縄文磨消	横位LR	3					1	4			
8	137	深鉢	非在地		7・8A・B	D3		横位集合沈線 連鎖状文		3					1	4			
8	138	深鉢	非在地		9D10	D3	突起　8字状貼付文　横位沈線			3					1	4			
8	139	深鉢	非在地		9C7	D3	円形刺突　横位沈線　縄文充填		縦位LR	5					4	1	4		
8	140	台付	非在地		10C13	D3		刺突　横位沈線　縄文磨消　穿孔	縦位LR	5					2	1			底：木葉痕（網状葉脈）
8	141	台付	その他		11C17	D3									4	2			
8	142	深鉢	その他		9D8	D3									5	4	2		
8	143	深鉢	その他		9E11	D3			横位LR						4	1	2		
8	144	深鉢	その他		10C12	D3	横位沈線		横位LR						1	4	1		
8	145	深鉢	その他		10C3	D3	穿孔								4	4	3		
8	146	深鉢	その他		11D5	D3					24.8				1	2	14		
9	147	深鉢	その他		13E2	D3			横位LR						3	5	2		
9	148	深鉢	その他		10B18	D3			横位LR						4	2			
9	149	深鉢	その他		9B17	D3							12.6		2	1		9	底：飛びござ目編み
9	150	深鉢	その他		8B19	D3							10.5		1	3		6	底：飛びござ目編み
9	151	深鉢	その他		9C25	D3							10.2		1	1		6	底：ござ目編み
9	152	深鉢	その他		7A24	D3							7.4		1	1		23	底：木葉痕（網状葉脈）
9	153	深鉢	その他		10C10	D3							9.4		3	2		23	
9	154	深鉢	その他		6A19・10B18	D3							11.0		2	1		10	
9	155	深鉢	その他		10D2	D3							9.9		4	1		7	
9	156	深鉢	その他		9B18	D3							5.4		1	2		12	
9	157	深鉢	その他		10B6	D3							9.2		3	2		21	
9	158	深鉢	三十稲場式		15G3	D4	貼付文　蓋受け状口縁			1					1	4		2	
9	159	深鉢	三十稲場式		16G21	D4		沈線	縦位LR	1					3	2			
9	160	深鉢	三十稲場式		15F24	D4	隆帯　円形刺突　円形窩文			1					3	1	4		
9	161	蓋	三十稲場式		15F24	D4		円形刺突		1					1	2			
9	162	蓋	三十稲場式		15G19	D4		突起　円形刺突　沈線		1					1	2			
9	163	深鉢	南三十稲場式	B	16G21	D4	刻み目　楕円形文　縦位沈線		縦位LR	2					3	1	2		
9	164	深鉢	南三十稲場式	B	15G10	D4	横位沈線　横位集合沈線			2					3	4	2		
9	165	深鉢	南三十稲場式	B	15G3	D4		縦位集合沈線		3					1	4			
9	166	深鉢	南三十稲場式	B	16G21	D4	穿孔　集合沈線　円形突起			3					1	4	8		
9	167	深鉢	非在地		15G10	D4	横位沈線　縄文磨消		横位LR	4					1	2	1		
9	168	深鉢	非在地		16G16	D4	横位沈線　縄文充填		横位LR						1	1	5		
9	169	深鉢	その他		16G6	D4			横位LR?						3	2	2		
9	170	深鉢	その他		16G21	D4					9.1				1	1	5		
9	171	深鉢	その他		15G10	D4									1	4	5		
9	172	深鉢	その他		15G8	D4							5.3		3	4		10	
9	173	深鉢	その他		16G21	D4							5.3		1	1		13	
9	174	深鉢	三十稲場式		15G8	D5	橋状把手　鎖状文　刻み目			1					4	1	3		
9	175	深鉢	三十稲場式		9G1	D5	8字状突起　鎖状文　円形窩文 沈線		横位LR	1					1	2	2		
9	176	深鉢	三十稲場式		8G5	D5	突起　刻み目　楕円形文			1					2	1	1		
9	177	深鉢	三十稲場式		9G2	D5	刺突　橋状把手			1					1	4	3		
9	178	深鉢	三十稲場式		9G3	D5	橋状把手　刻み目　刺突			1					4	1	3		

縄文土器観察表（4）

図版No.	報告No.	器種	大分類	細別	出土地点	層位	文様			時期	法量（cm）				胎土	色調	残存率		備考
							口縁部・頸部	胴部	地文		口径	器高	底径	胴大			口	底	
9	179	深鉢	三十稲場式		15G12	D5	橋状把手　刻み目　沈線　刺突			1					4	1			
9	180	深鉢	三十稲場式		11E17	D5		隆帯　刺突	横位LR	1					1	1			
9	181	深鉢	三十稲場式		9G2	D5	隆帯　刻み目　沈線			1					1	2			
9	182	深鉢	三十稲場式		11E12	D5		隆帯　刺突　円形窩文		1					1	1			
9	183	深鉢	三十稲場式		9G6・8G5	D5		刺突		1					1	1			
9	184	深鉢	三十稲場式		9G4	D5		突瘤文		1					1	2			
9	185	深鉢	三十稲場式		9G14	D5		刺突		1					1	4			
9	186	深鉢	三十稲場式		9G1	D5		刺突　沈線		1					1	2			
9	187	注口	三十稲場式		15G7	D5	橋状把手　刻み目			1					4	2	3		
10	188	深鉢	南三十稲場式	A	14E24	D5	沈線　円形窩文　円形刺突			1					4	1	4		
10	189	深鉢	南三十稲場式	A	9G2	D5	円形窩文　沈線			1					3	1			
10	190	深鉢	南三十稲場式	A	16G21	D5	沈線			1					4	2			
10	191	深鉢	南三十稲場式		16G16	D5	穿孔			1					1	4	1		
10	192	深鉢	南三十稲場式	A	15H5	D5	横位沈線			1					1	1	1		
10	193	深鉢	南三十稲場式	A	15G8	D5		沈線　縄文磨消	横位LR	1					1	2			
10	194	深鉢	南三十稲場式	A	15F1	D5		縦位沈線		1					3	4			
10	195	深鉢	南三十稲場式	A	11E17	D5		沈線		1					1	2			
10	196	深鉢	南三十稲場式	B	11E24	D5	楕円形文　斜位集合沈線			2					4	3	2		
10	197	深鉢	南三十稲場式	B	9G14	D5	楕円形文　縦位集合沈線		横位LR?	2					2	4	1		
10	198	深鉢	南三十稲場式		11E19	D5	円形突起　穿孔　円形窩文　刺突			2					1	2	2		
10	199	深鉢	南三十稲場式	B	15G13	D5		集合沈線　縄文充填	横位LR	2					4	1	1		
10	200	深鉢	南三十稲場式	B	9G3	D5	円形突起　刻み目　横位集合沈線			3					1	4	3		
10	201	深鉢	南三十稲場式	B	9G3	D5	横位沈線　円形刺突　横位集合沈線		縦・横位LR	3					4	1	4		
10	202	深鉢	非在地		9E13	D5	隆帯　円形窩文　沈線　縄文磨消		横位LR	1					2	1			
10	203	深鉢	非在地		9F4	D5	縦位条痕　隆帯　凹線　円形窩文			1					3	1			
10	204	深鉢	非在地		11E17	D5	横位集合沈線　縄文磨消			4					1	2	2		
10	205	深鉢	非在地		11E16	D5	刻み目								1	1	1		
10	206	深鉢	非在地		9G1	D5	刻み目								1	1	1		
10	207	深鉢	その他		16H2	D5			横位RL?						1	2			
10	208	深鉢	その他		11E17	D5			横位LR						4	2			
10	209	深鉢	その他		16G16	D5	渦巻文　隆帯								1	1			
10	210	台付	その他		10E21	D5									3	1			
10	211	深鉢	その他		12E24	D5							4.4		1	1		36	底：飛びござ目編み
10	212	深鉢	その他		13E21	D5							8.8		1	1		36	
10	213	深鉢	その他		15G6	D5							5.3		1	2		36	

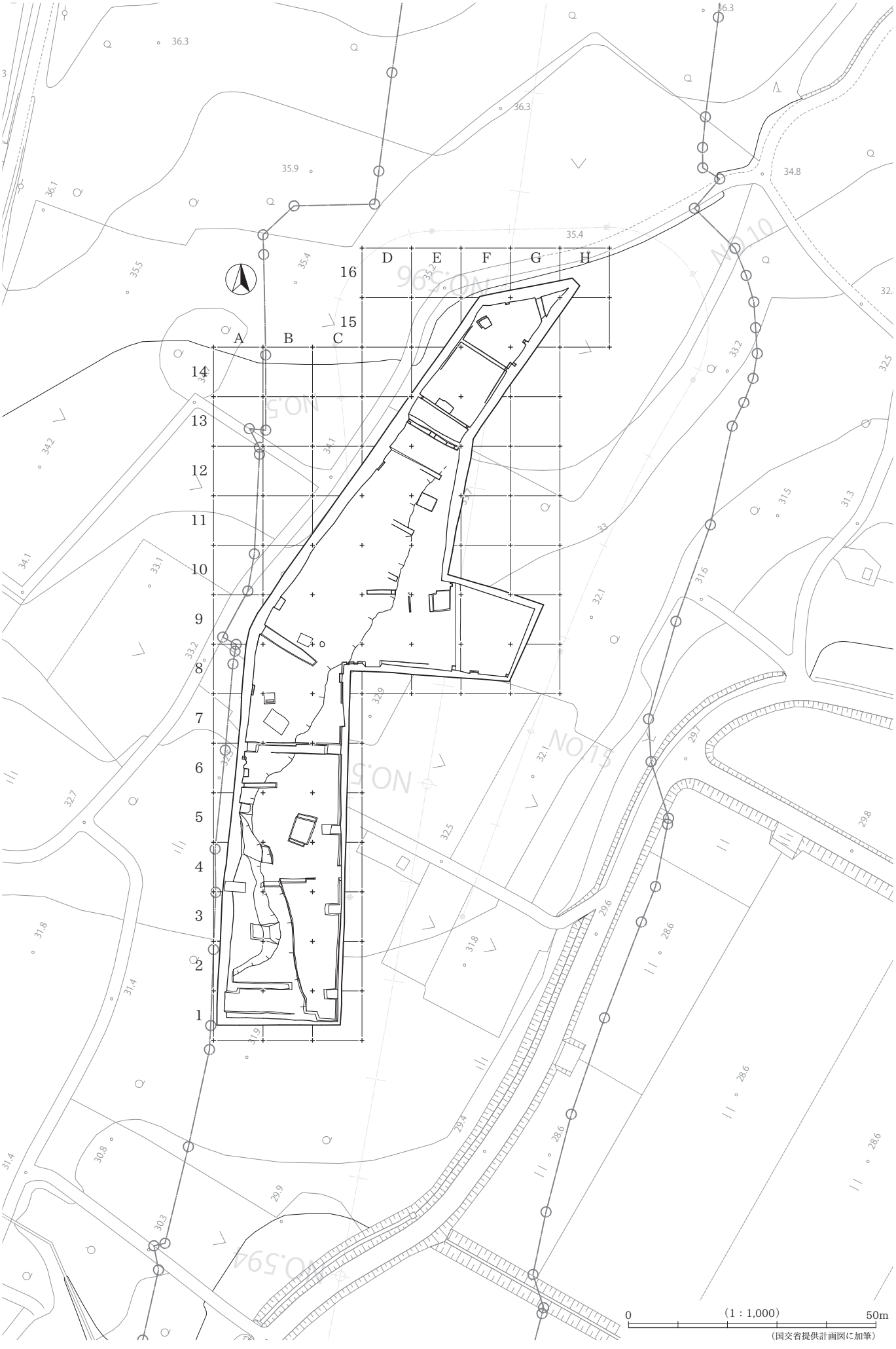
土製品観察表

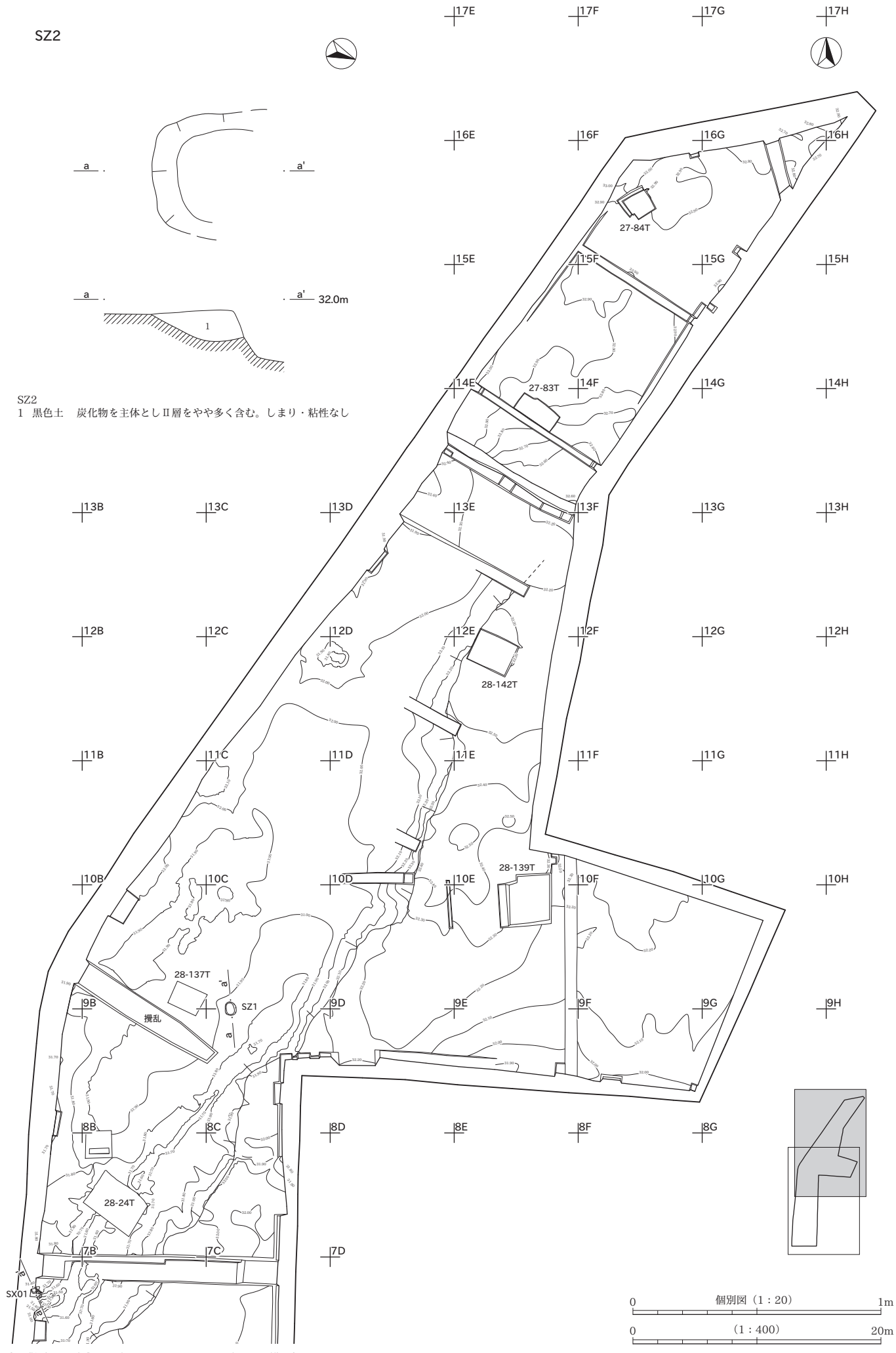
図版No.	報告No.	器種	出土位置	層位	残存	法量（cm・g）					紋様	成形・調整	胎土	色調	残存率		備考
						長さ 口径 表面径	幅 底径 背面径	厚さ 器高	重量	胴大					口径 表面径	底径 背面径	
10	214	土偶	4A15	D1	頭部～頸部破片	6.1	4.4	3	41.26		眉・鼻梁は粘土紐貼付	ナデ	4	1			
10	215	土偶	15G20	D5	胴部四肢欠損	5.5	3.6	2.1	28.95		縦位沈線	指頭押圧・ナデ	5	1			
10	216	土偶	15F25	D5	腕部	3.9	3.1	1.5	10.58		側縁に刻み目	ナデ	3	2			
10	217	ミニチュア土器	11C6	D2	底部～胴部破片		4.0	1.8	21.91			粘土円盤＋輪積み成形	3	2		36	
10	218	ミニチュア土器	12E10	D5	底部～口縁部破片	5.0	3.6	3.1	23.92			手づくねに近い成形	2	1	1	21	
10	219	不明土製品	10C22	D3	過半欠	3.2	5.4	1.9	10.25			外内面ナデ	4	1	9	9	環状
10	220	不明土製品	8E13	Ⅱ	過半欠	3.3	9.9	2.8	20.49			外内面ミガキ	4	1	4	7	環状
10	221	土錘	3A11	D1	完形	3.5	1.7	1.35	7.25		長軸方向に紐掛け用の溝	ナデ	3	3			
10	222	耳飾	9F10	D5	半損	2.4	2.2	1.9	3.21			外面縦位のミガキ、内面粗雑なミガキ	1	2	9	18	

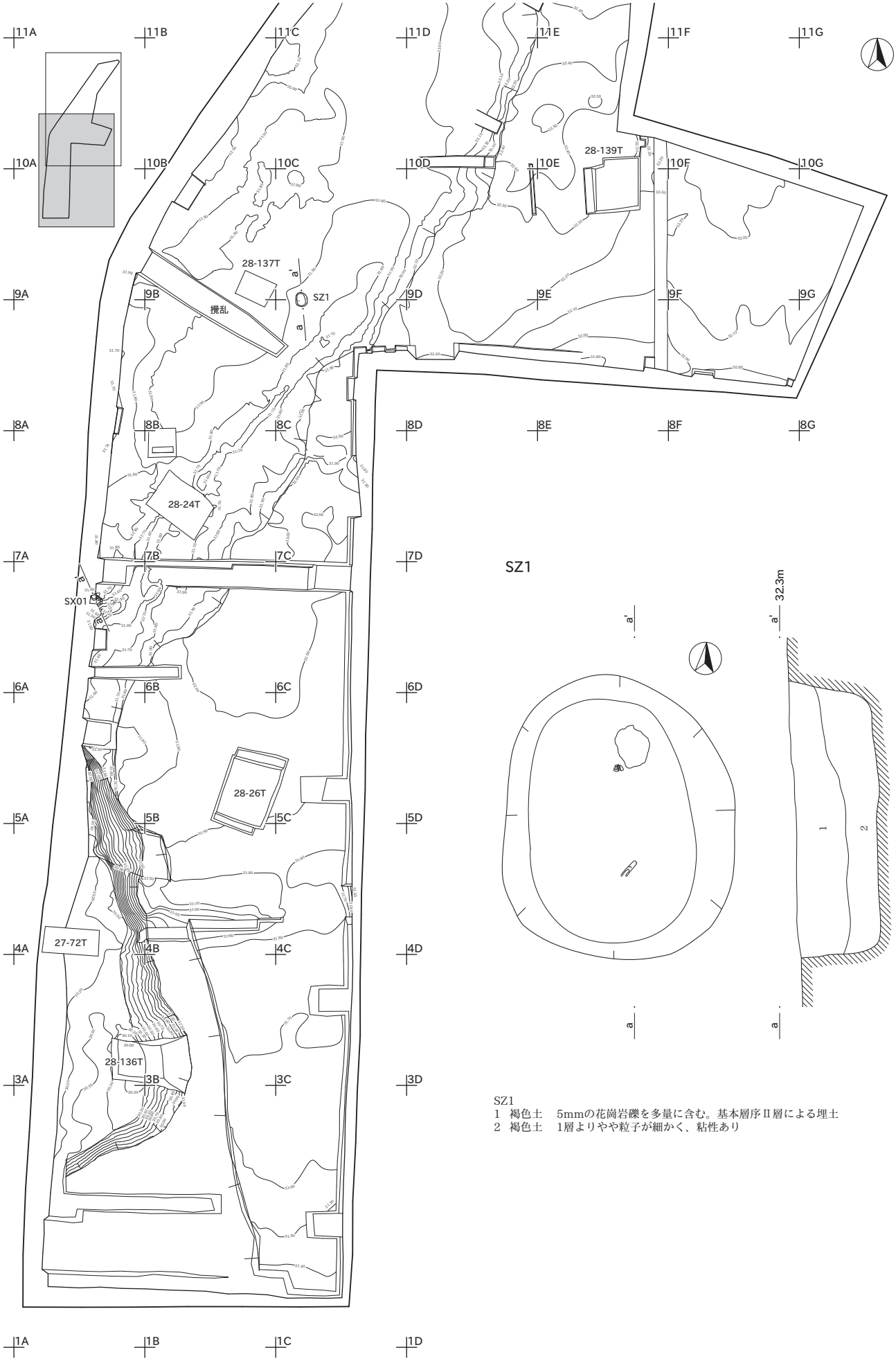
石製品観察表

図版No.	報告No.	器種	出土地点	層位	残存	法量（mm・g）				石材	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ		
11	223	石鏃	10C9	D2	略完形	29.0	15.0	3.5	1.32	頁岩	
11	224	石鏃	13E21	D1	完形	19.5	13.0	2.8	0.56	頁岩	
11	225	石鏃	排土	不明	完形	24.0	17.0	5.0	1.60	玉髄	
11	226	石鏃	15G	不明	両脚欠	21.0	12.6	3.5	0.80	頁岩	被熱か
11	227	石匙	9E1	D3	完形	54.5	79.0	11.5	35.53	頁岩	
11	228	板状石器	16G21	D5	完形	41.0	47.0	8.5	17.50	凝灰岩	
11	229	磨製石斧	16G22	D5	刃部欠	56.0	45.0	26.0	84.23	輝緑岩	
11	230	不明石製品	11E17	D5	完形	72.0	56.0	23.0	17.87	軽石	浮子か
11	231	凹石	10D6	D5	完形	141.0	85.0	44.5	735.90	安山岩	
11	232	凹石	13E	D5	半損	67.0	60.0	29.0	134.71	凝灰岩	
11	233	敲石	8E13	不明	完形	111.5	49.0	27.0	181.88	安山岩	
11	234	磨石	14F	D3	過半欠	149.0	156.0	50.5	1379.20	石英斑岩	

図　　版


A
B
C
D
E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
(1 : 1,000)
50m
(国交省提供計画図に加筆)


SZ2
a
a'
32.0m
1
SZ2
1 黒色土　炭化物を主体としⅡ層をやや多く含む。しまり・粘性なし
17E
17F
17G
17H
16E
16F
16G
16H
15E
15F
15G
15H
14E
14F
14G
14H
13B
13C
13D
13E
13F
13G
13H
12B
12C
12D
12E
12F
12G
12H
11B
11C
11D
11E
11F
11G
11H
10B
10C
10D
10E
10F
10G
10H
9B
9D
9E
9F
9G
9H
8B
8C
8D
8E
8F
8G
7B
7C
7D
27-84T
27-83T
28-142T
28-139T
28-137T
28-24T
SZ1
撹乱
SX01
個別図（1：20）
0
1m
（1：400）
0
20m



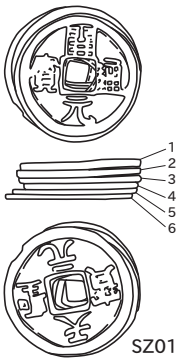
SZ1
1　褐色土　5mmの花崗岩礫を多量に含む。基本層序Ⅱ層による埋土
2　褐色土　1層よりやや粒子が細かく、粘性あり

0　個別図（1：20）　1m

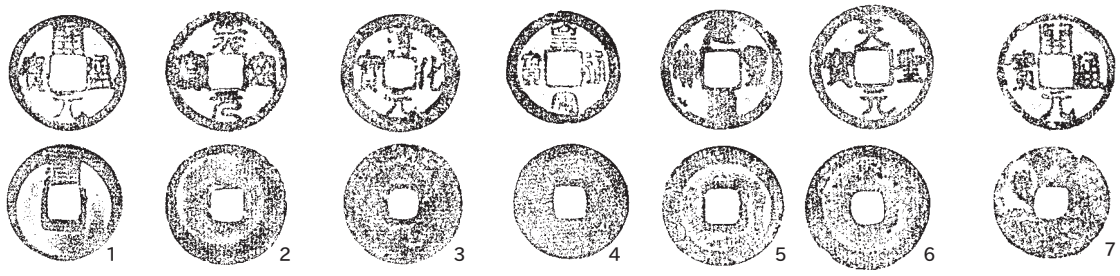
0　（1：400）　20m

中世の銭貨（1～7）

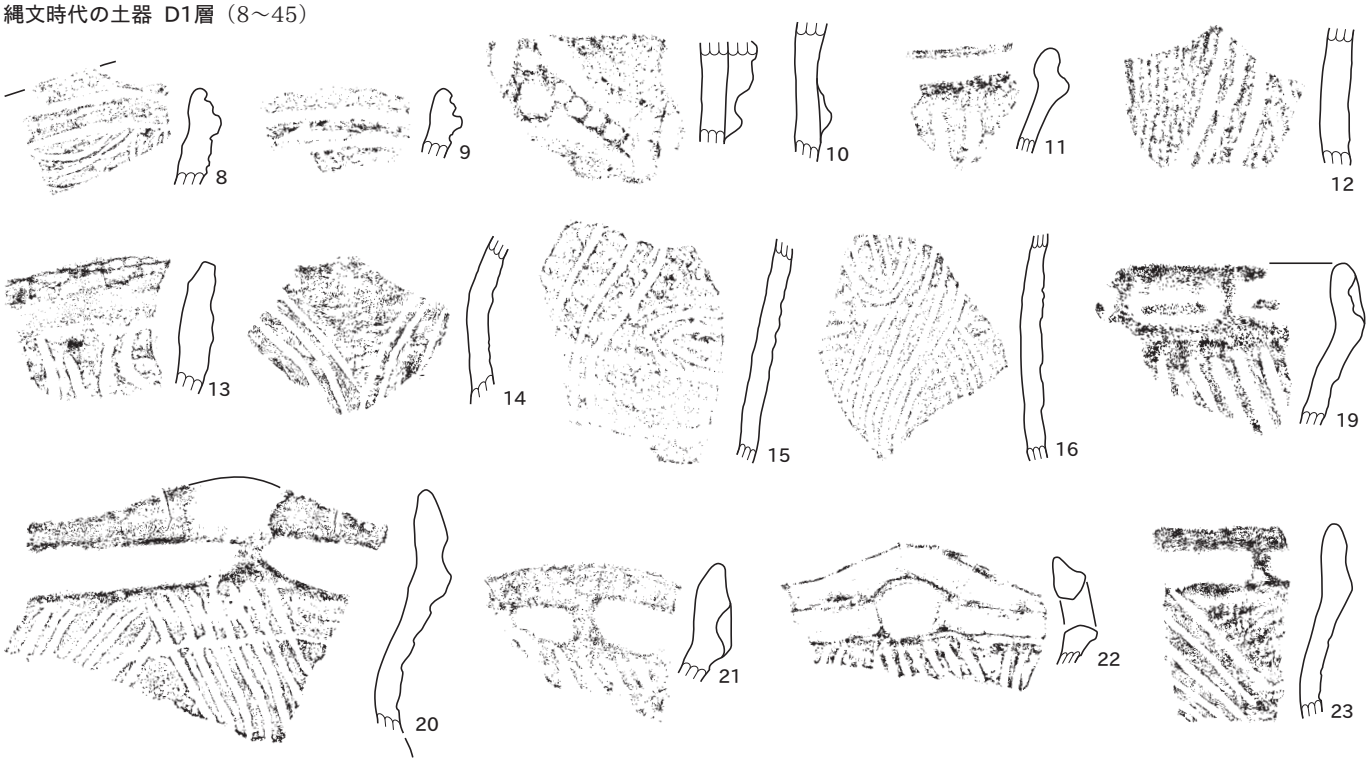
SZ1

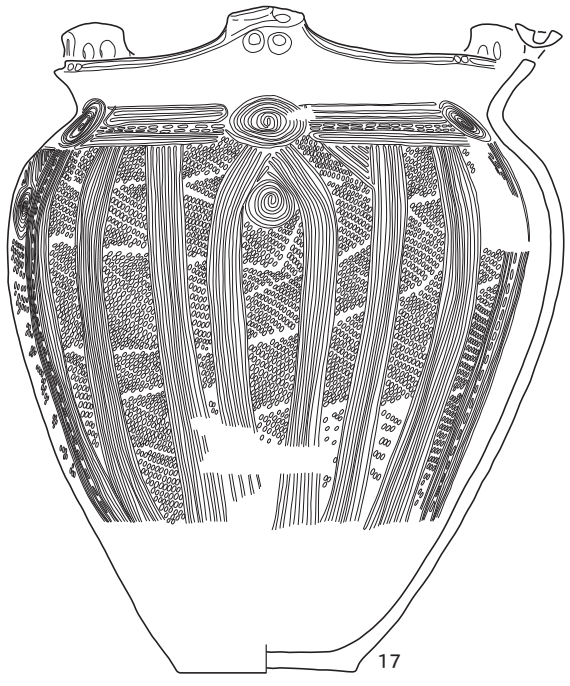


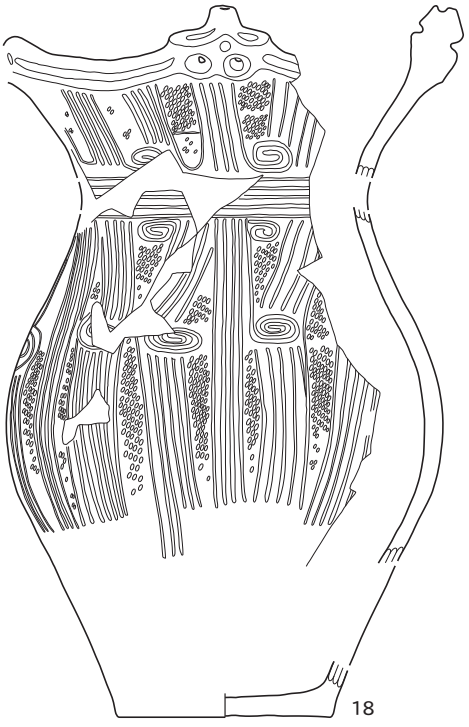
SZ2



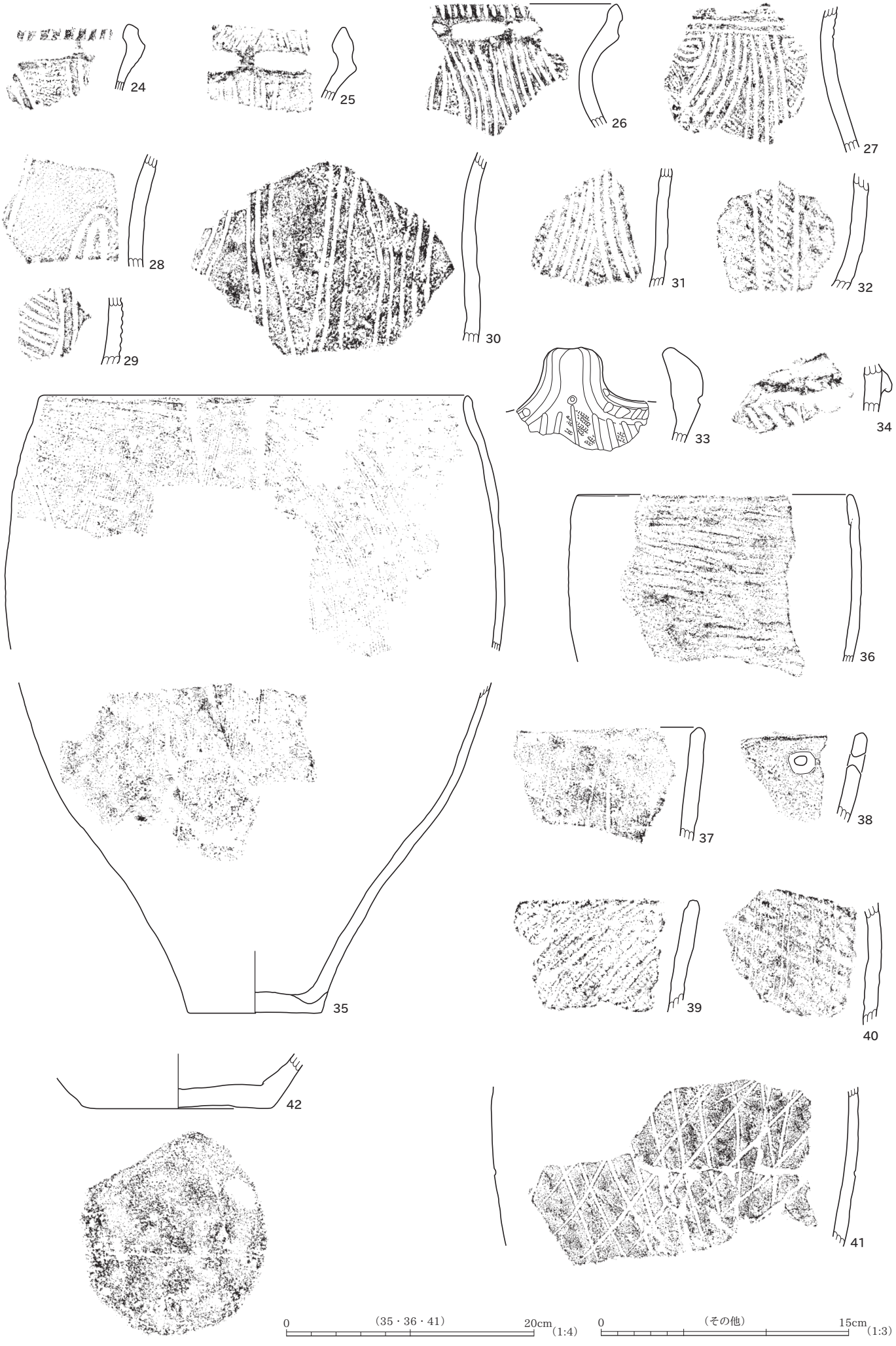
縄文時代の土器 D1層（8～45）

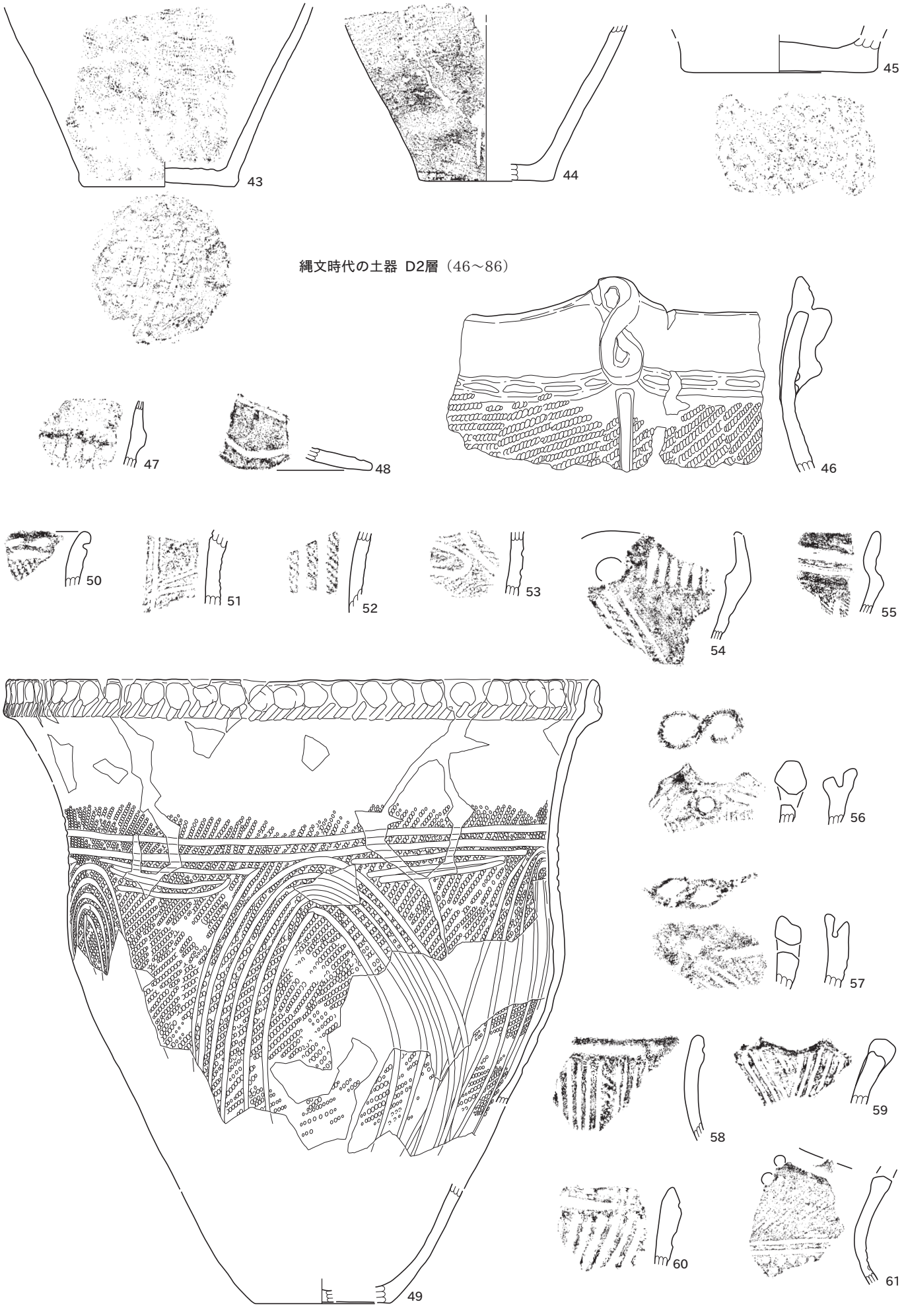


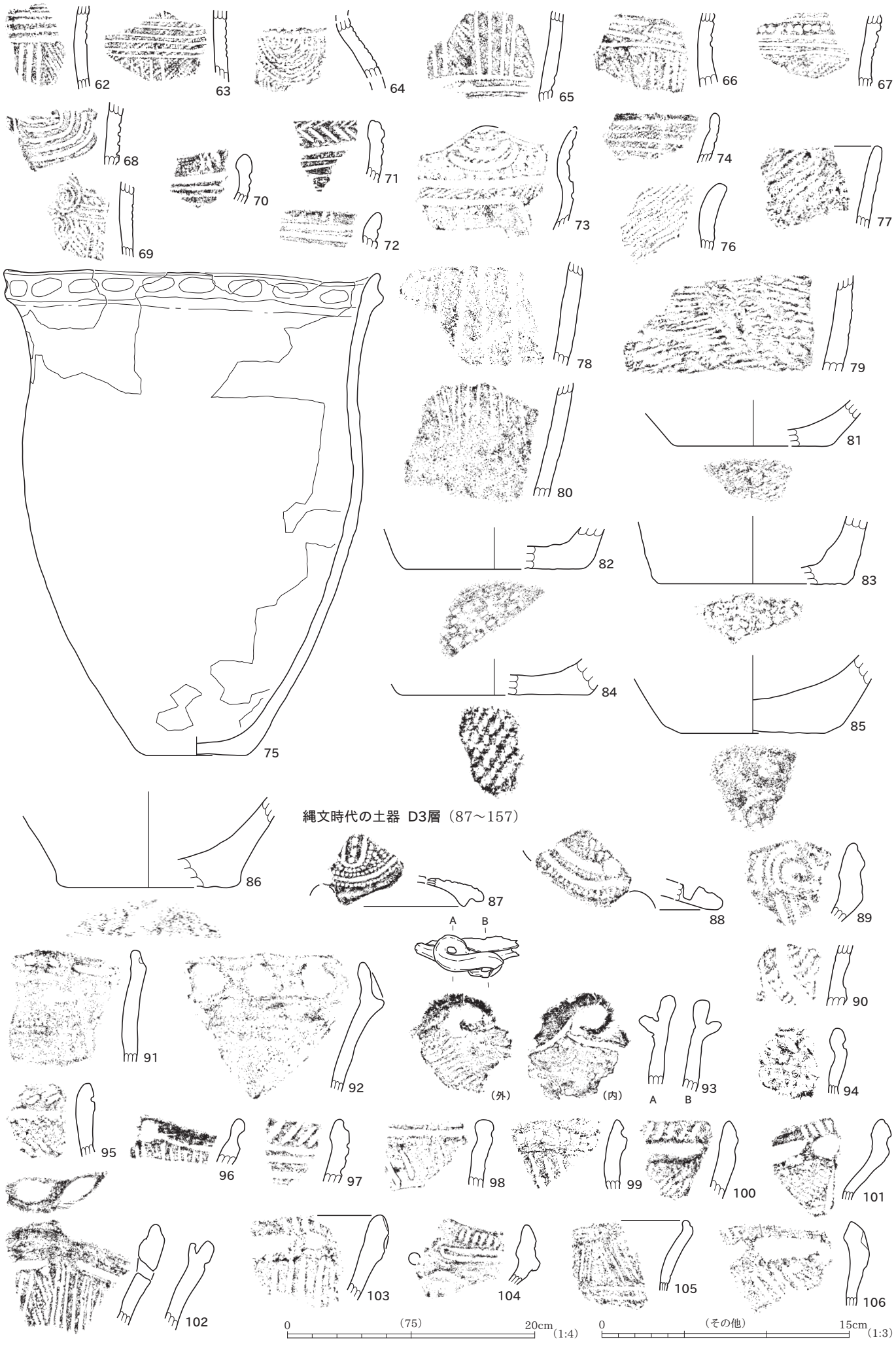




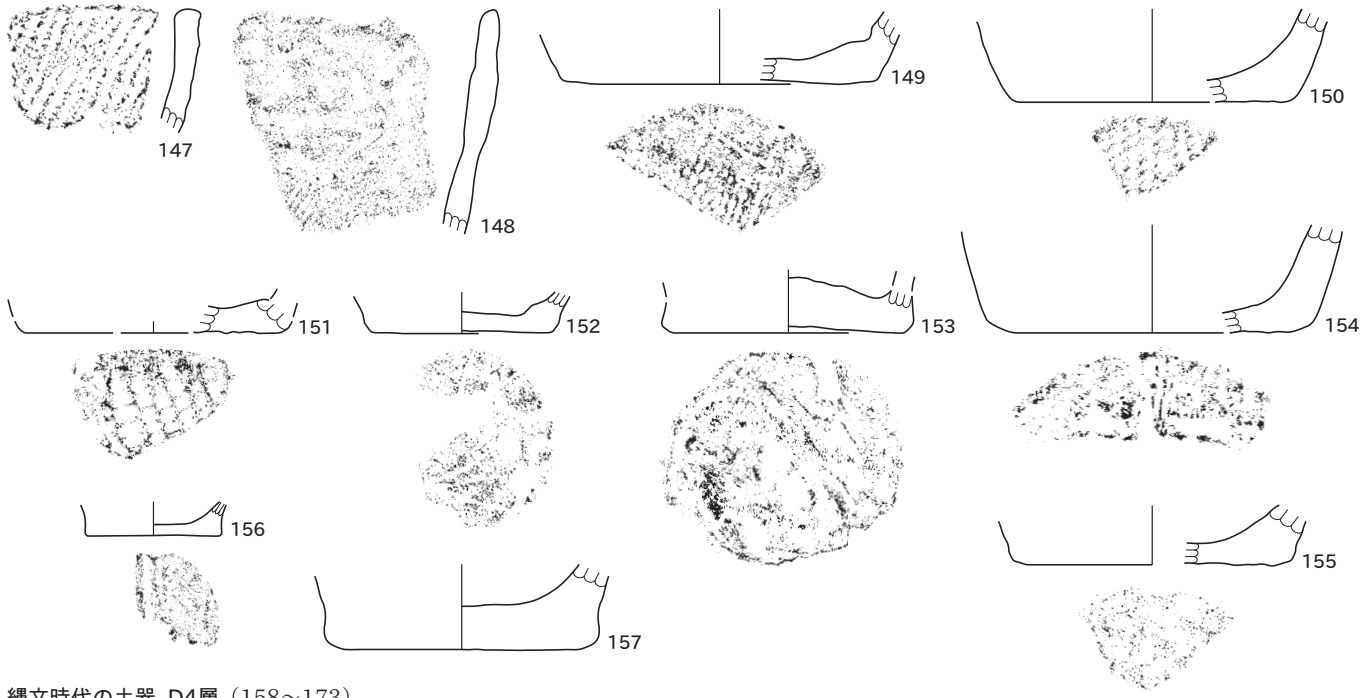
0　（17・18）　20cm（1:4）　0　（1～7）　6cm（2:3）　0　（その他）　15cm（1:3）


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
（35・36・41）
20cm
(1:4)
0
（その他）
15cm
(1:3)

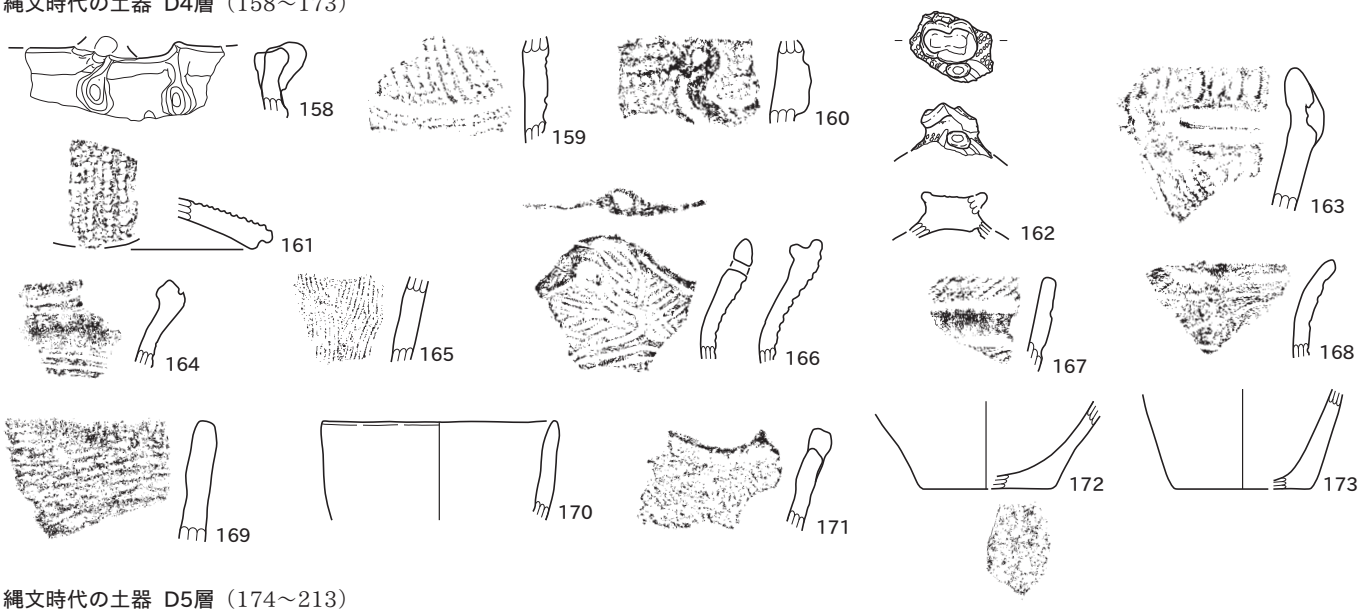

縄文時代の土器 D2層（46～86）
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
（43・44・49）
20cm
(1:4)
0
（その他）
15cm
(1:3)


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
76
77
75
78
79
80
81
82
83
84
85
86
縄文時代の土器 D3層（87～157）
87
88
89
A
B
91
92
90
94
95
96
97
98
99
100
101
93
A
B
(外)
(内)
102
103
104
105
106
0
(75)
20cm
(1:4)
0
(その他)
15cm
(1:3)

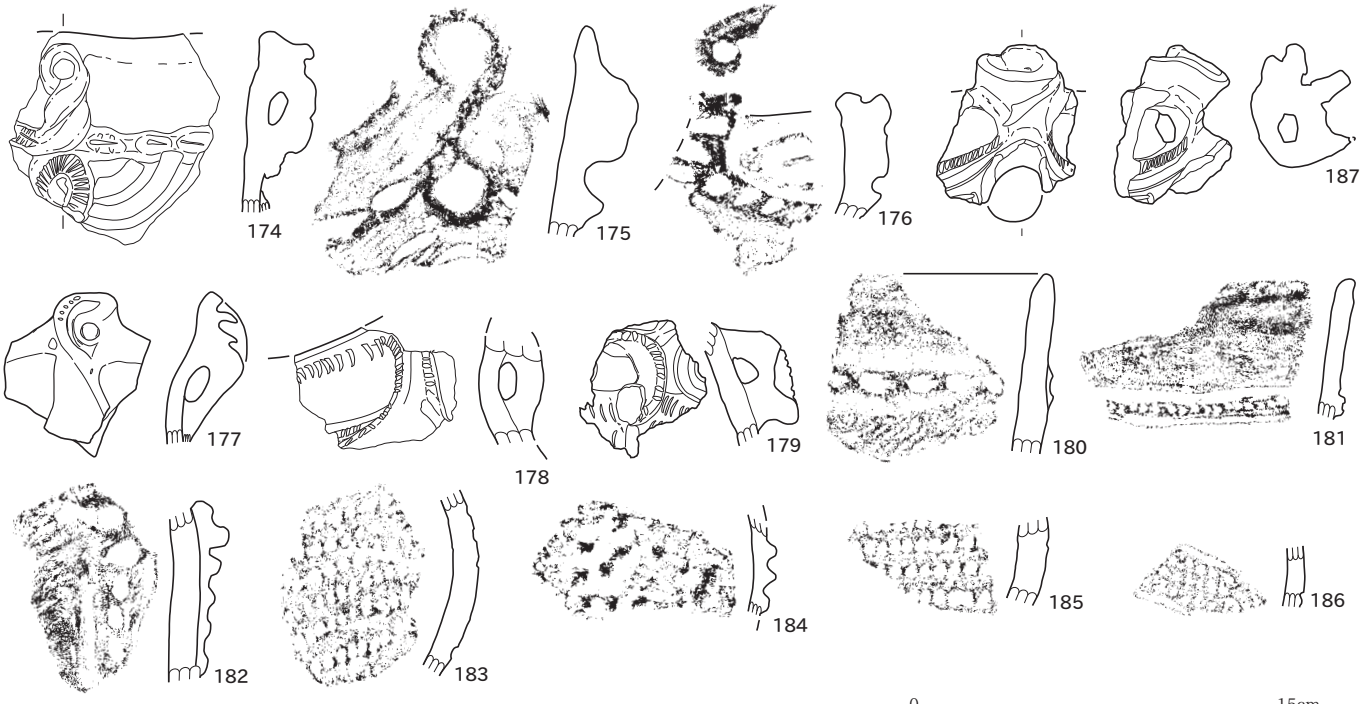
（外）
（内）
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
（内）
135
136
137
138
134
143
144
145
139
140
141
142
146
0
(146)
20cm
(1:4)
0
15cm
(1:3)



縄文時代の土器 D4層（158～173）

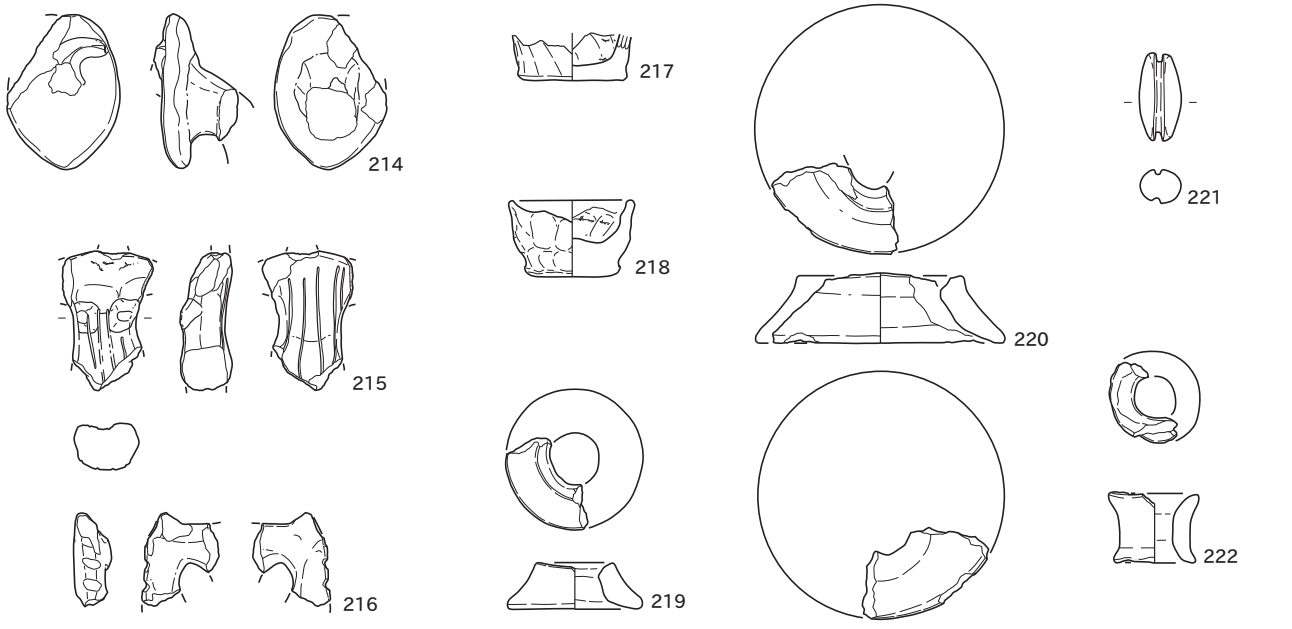


縄文時代の土器 D5層（174～213）

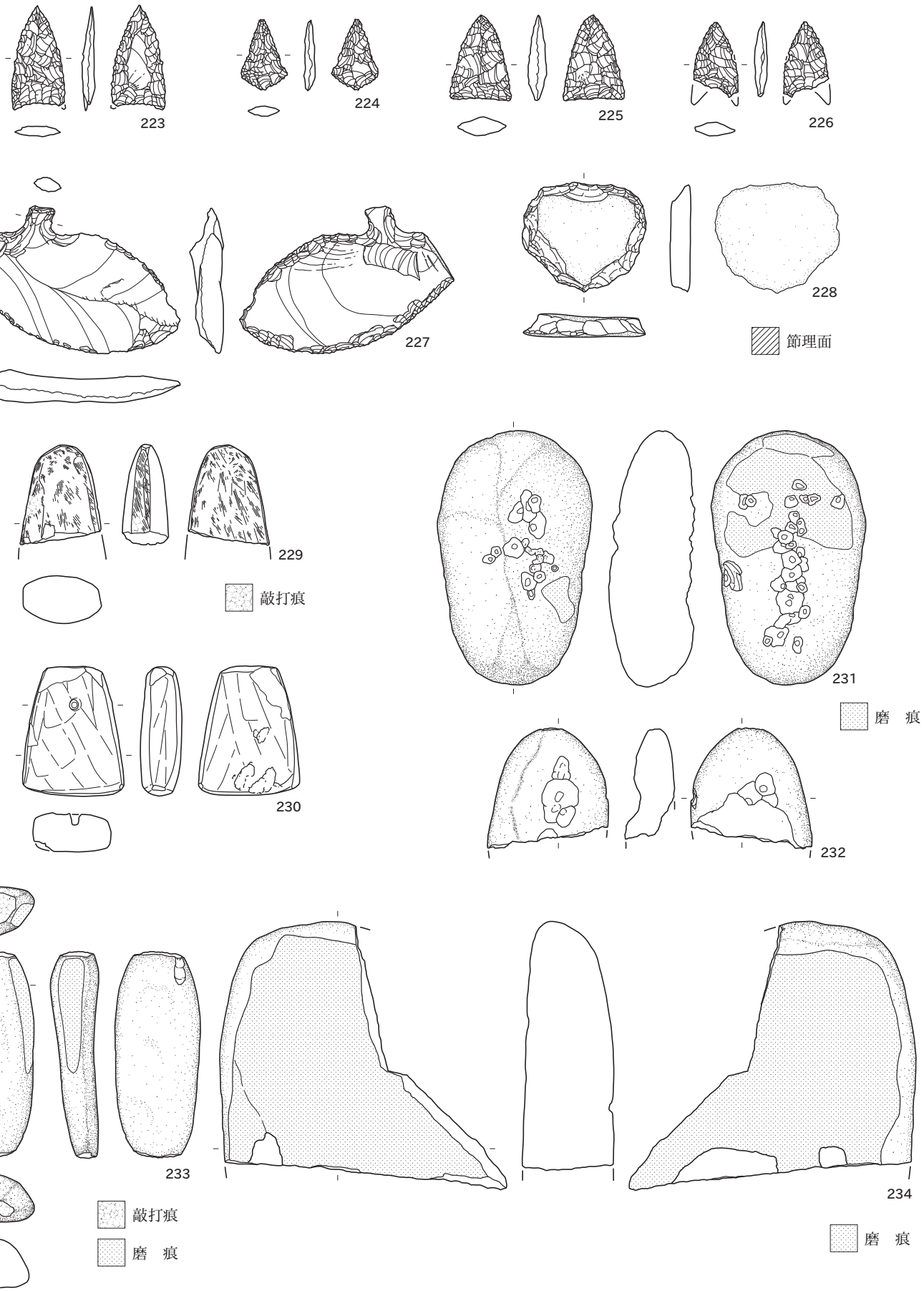


0　15cm（1:3）

縄文時代の土製品（214～222）



縄文時代の石器・石製品（223～234）

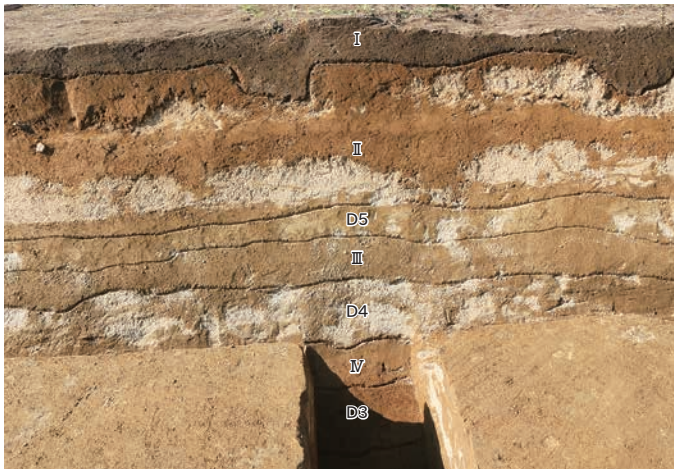


調査区遠景（南東から）

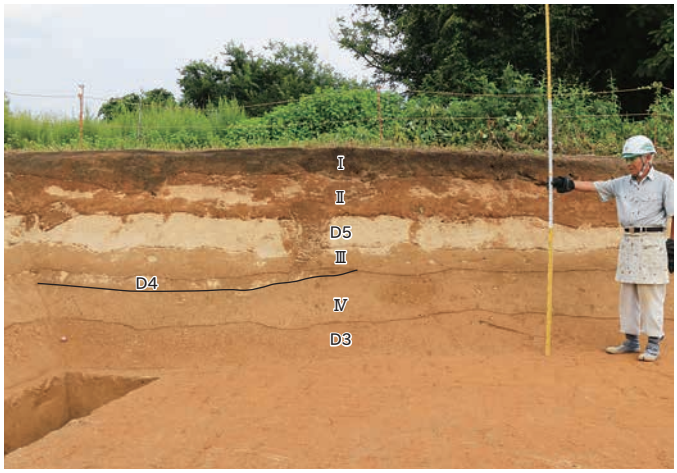
調査区全景（上が北西）

調査区遠景（北東から）

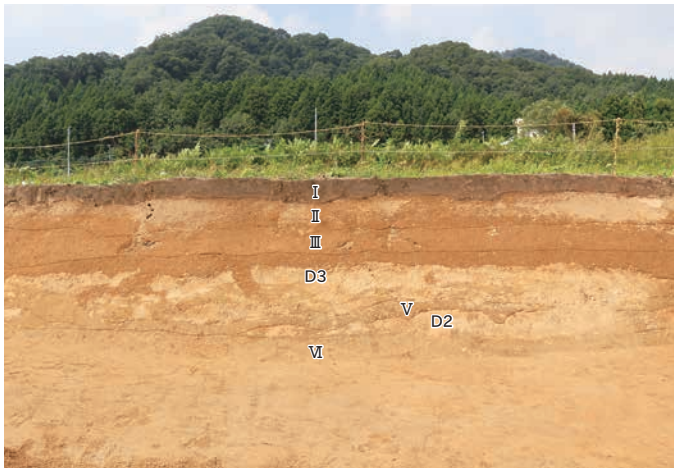
調査区遠景（南から）



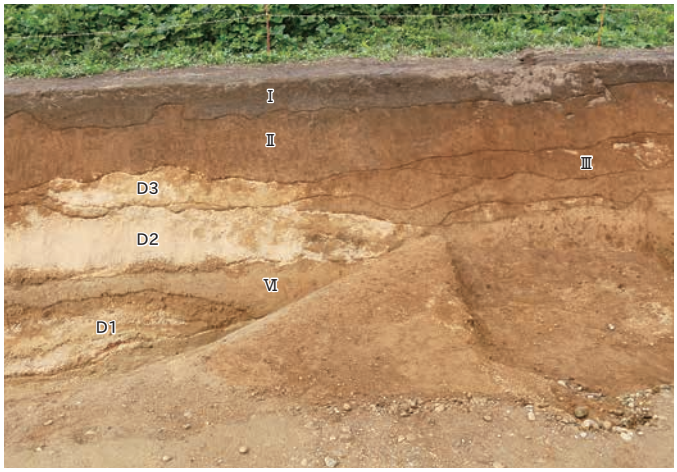
14F グリッド　層序（北西から）



12F グリッド　層序（西から）



10B グリッド　層序（南東から）

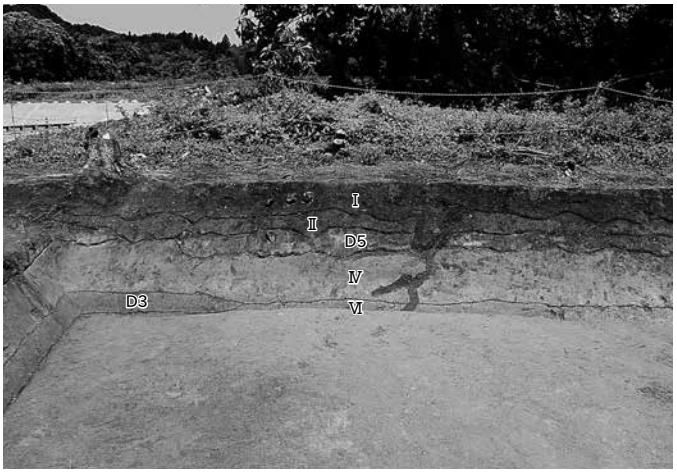


5A グリッド　層序（西から）

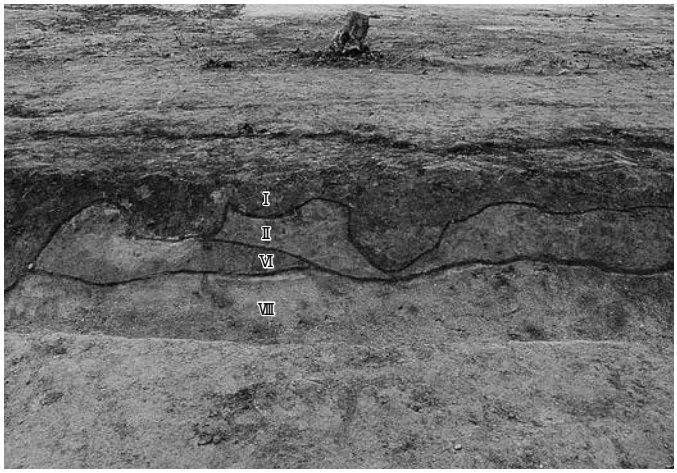
2A グリッド　D1 層　図版 4-17 出土（南から）

6A グリッド　D2 層　図版 6-49・75 出土（東から）

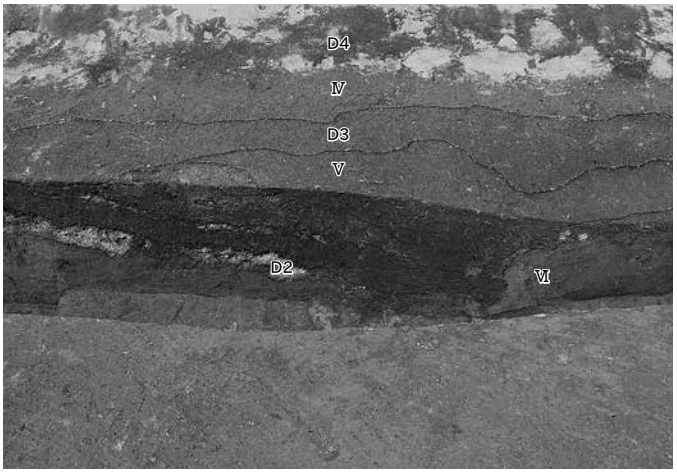
拡張区全景（南西から）



10F グリッド　層序（南から）



2C グリッド　層序（西から）



13E グリッド　旧河川セクション（南西から）

6B グリッド　旧河川セクション（南から）

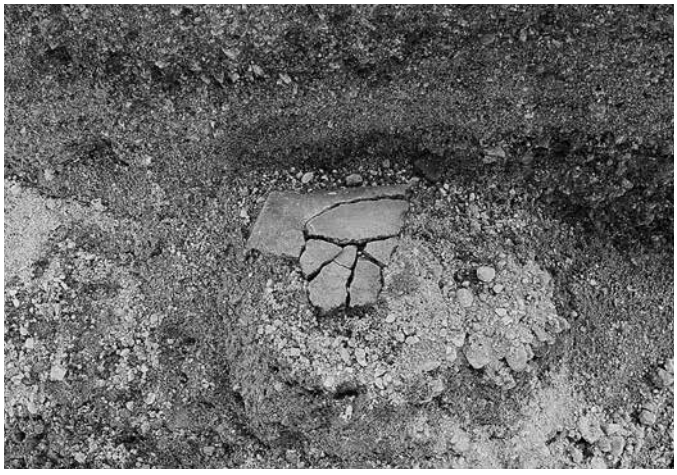
3B グリッド　旧河川セクション（南から）

2A グリッド　D1 層　図版 4-18 出土（南から）

2A グリッド　D1 層　図版 4-20 出土（東から）

3A グリッド　D1 層　遺物出土（北東から）

3A グリッド　D1 層　図版 5-35 出土（西から）



2A グリッド　D1 層　図版 6-44 出土（西から）

10C グリッド　D3 層　図版 8-145 出土（北西から）

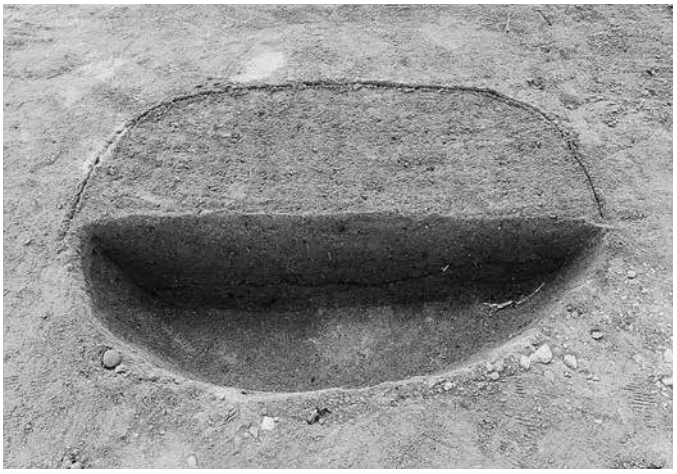
11E グリッド　D3 層　図版 8-134 出土（西から）

11E グリッド　D5 層　図版 11-230 出土（南から）

13E グリッド　D5 層　図版 10-212 出土（南から）

10E グリッド　D5 層　遺物出土（南から）

10E グリッド D5 層　No.210 出土（南から）

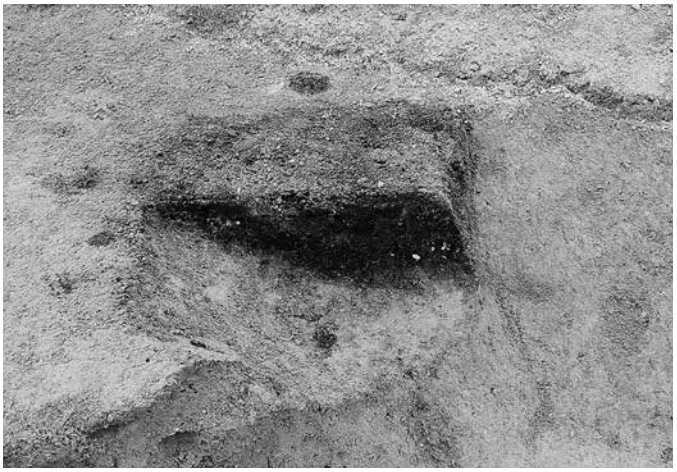


SZ1　セクション（東から）

SZ1　人骨出土（西から）

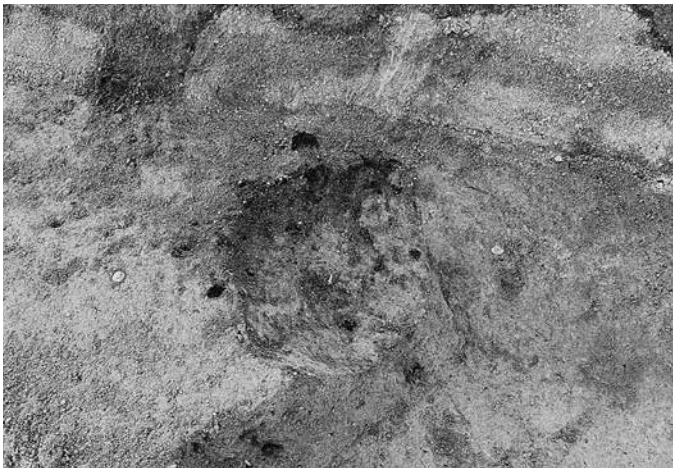
SZ1　頭骨接写（西から）

SZ2　検出（東から）



SZ2　セクション（東から）

SZ2　図版 4-7 出土（東から）



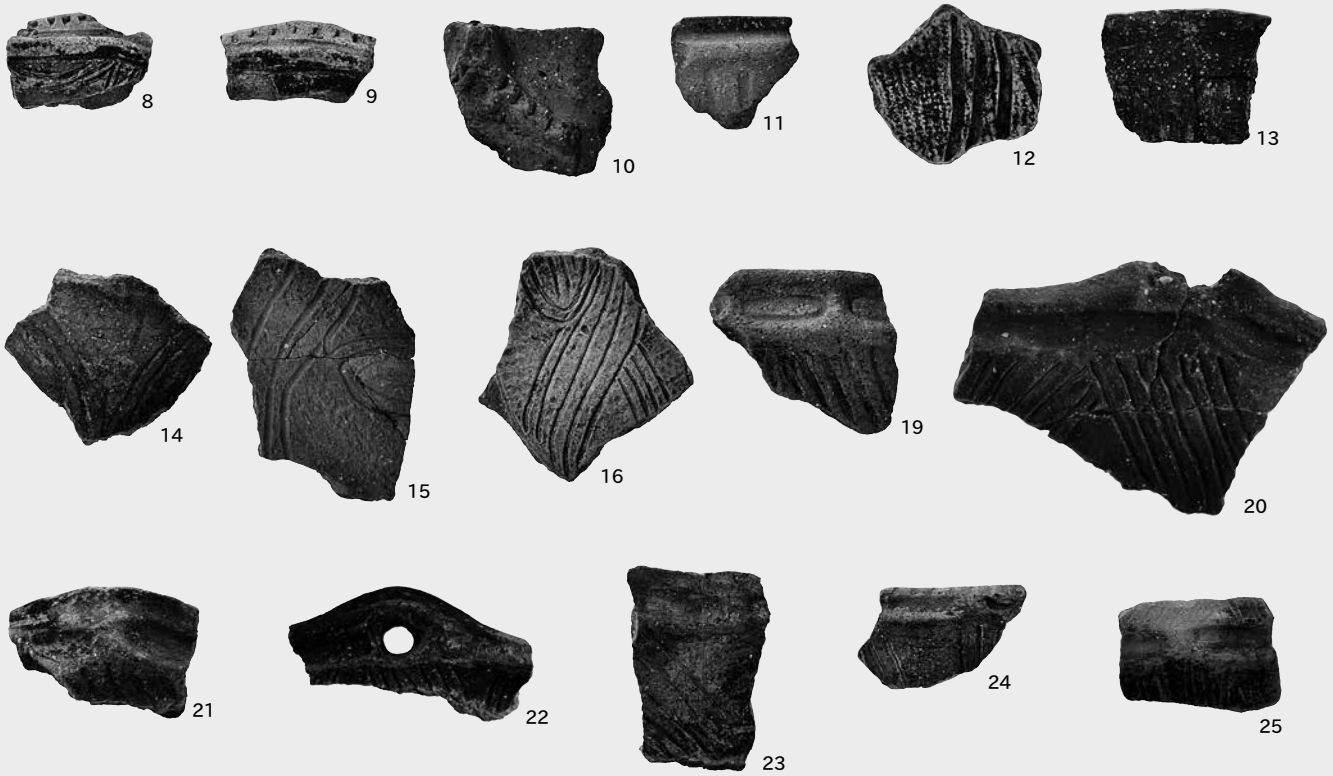
SZ2　完掘（東から）

土器

土製品・石器・石製品

中世の銭貨（1～7）

縄文時代の土器　D1層（8～45）



17・18　〔1:4〕
1～7　〔2:3〕
その他　〔1:3〕

26

27

28

29

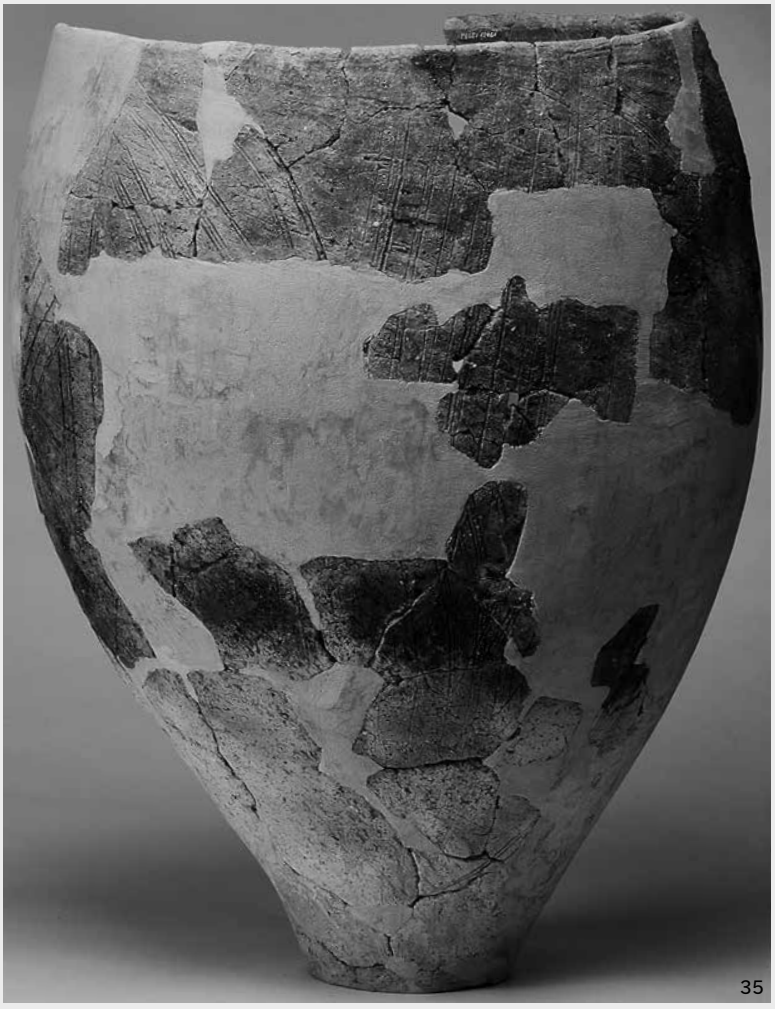
30

31

32

33

34


35

37

38

39

40

36

42

41

35　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

45

44

43

縄文時代の土器　D2層（46～86）

47

48

46

50

51

52

53

54

55

56

57

49

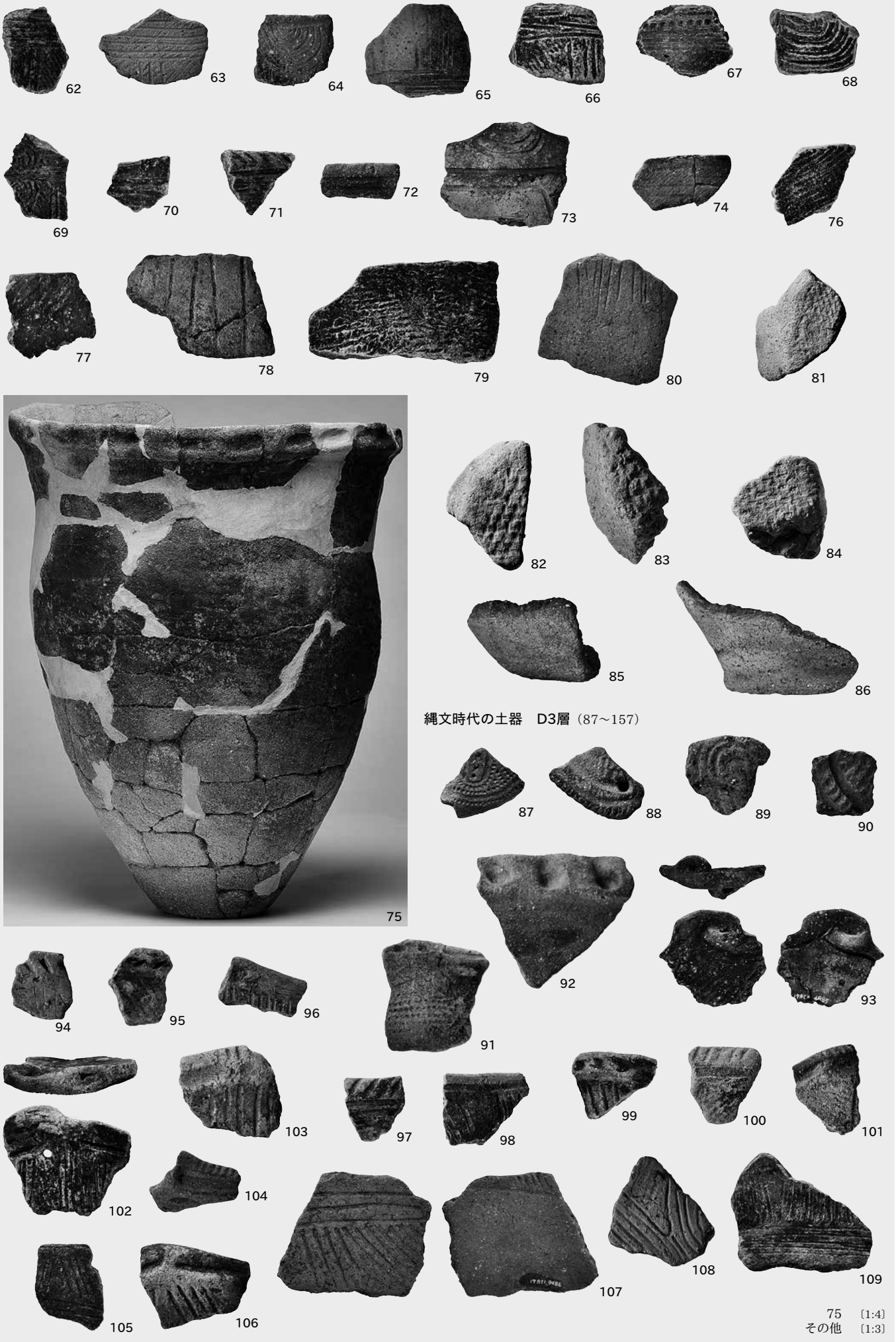
58

59

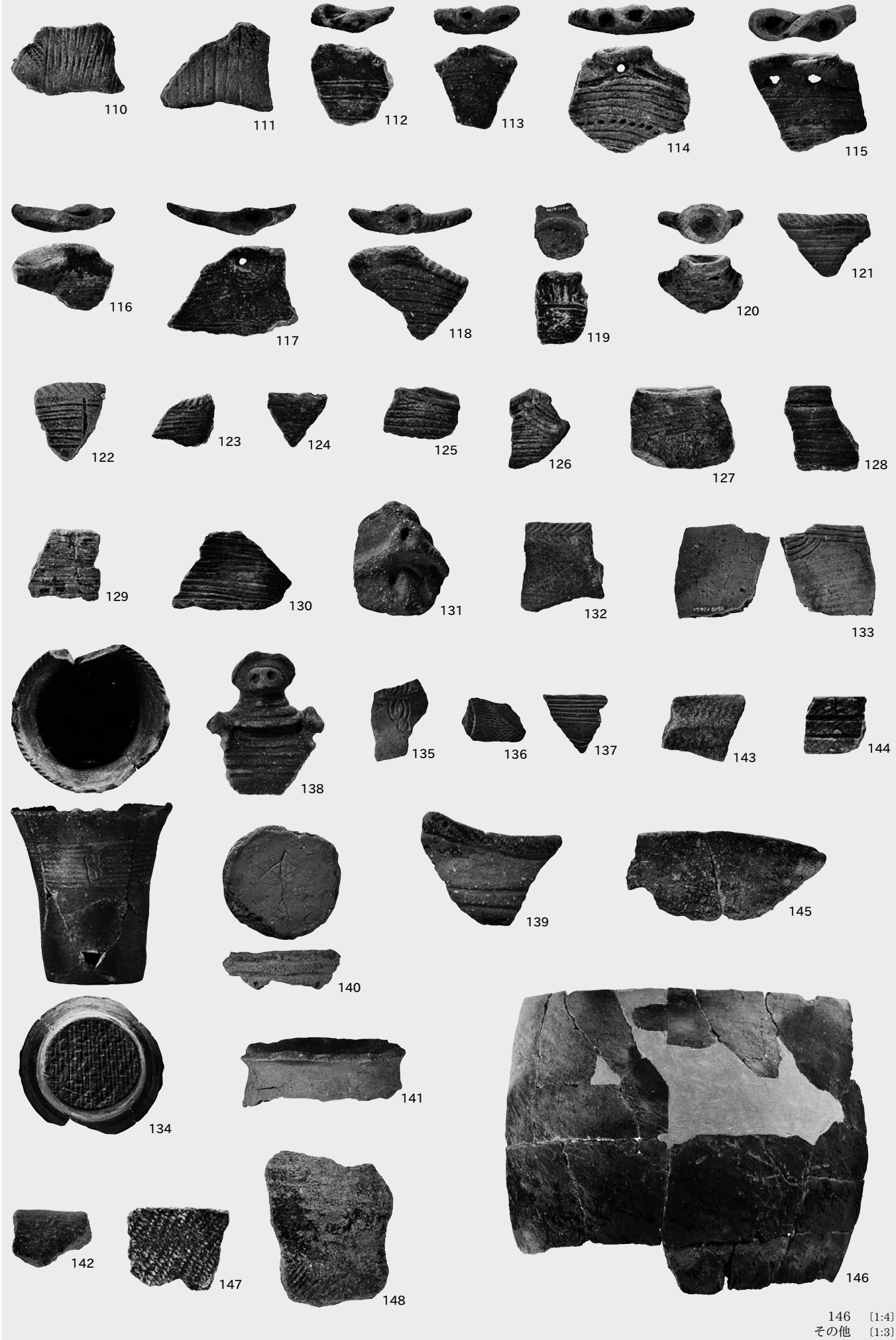
60

61

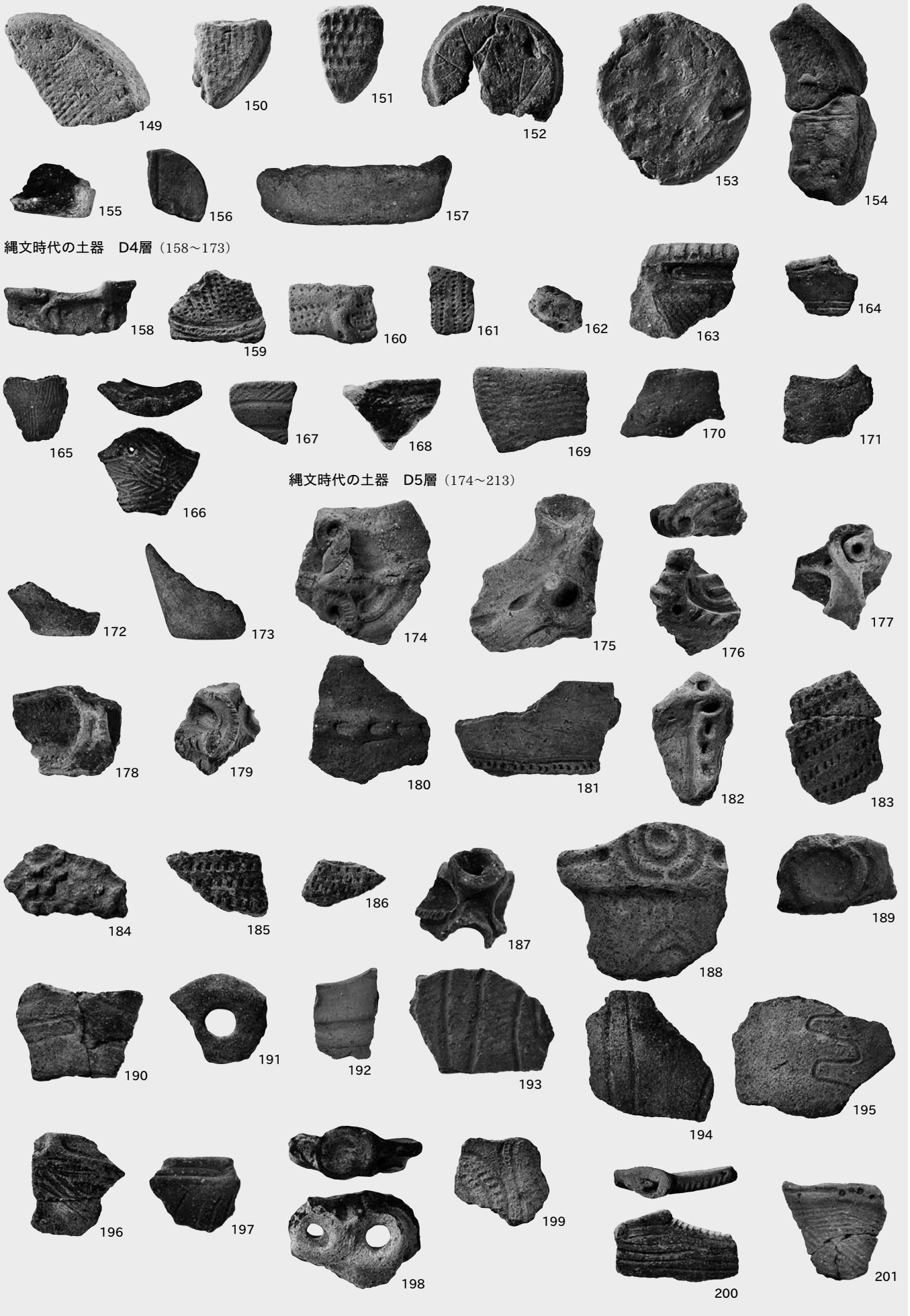
43・44・49　〔1:4〕
その他　〔1:3〕


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
縄文時代の土器　D3層（87～157）
87
88
89
90
75
92
93
94
95
96
91
103
97
98
99
100
101
102
104
105
106
107
108
109

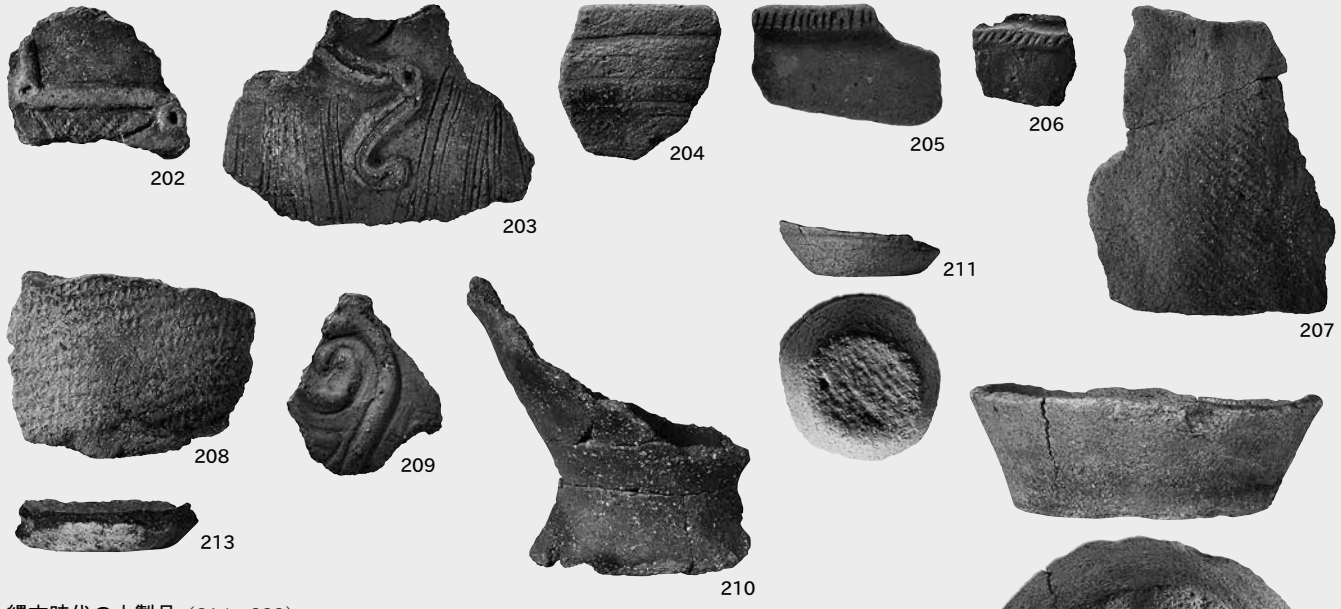
75　〔1:4〕
その他　〔1:3〕


110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148

146　〔1:4〕
その他　〔1:3〕

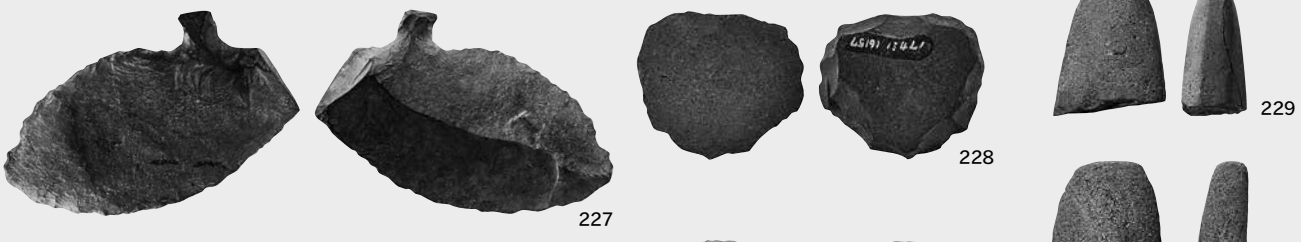

149
150
151
152
153
154
155
156
157
縄文時代の土器　D4層（158～173）
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
縄文時代の土器　D5層（174～213）
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201

全て　〔1:3〕



縄文時代の土製品（214～222）

縄文時代の石製品（223～234）



223～226　〔2:3〕
222・227・228　〔1:2〕
その他　〔1:3〕

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみのいせきいち　だいいちじちょうさ
書　　名	上野遺跡Ⅰ　第１次調査
副 書 名	日本海沿岸東北自動車道（国道７号朝日温海道路）関係発掘調査報告書
巻　　次	1
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 281 集
編著者名	小野本敦（公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）、櫻井和哉・宮嶋佑也（小柳建設株式会社）、斎藤崇人・田中義文・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）、波田野悠夏・鈴木敏彦（東北大学大学院）、奈良貴史（新潟医療福祉大学）、卜部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所）
編集機関	公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒 956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2019（平成 31）年３月１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上野（かみの）遺跡	新潟県村上市猿沢（にいがたけんむらかみしさるさわ）	15212	608	38° 17′ 28″	139° 31′ 46″	20170525 ～ 20171122	3,355	日本海沿岸東北自動車道（国道７号朝日温海道路）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野遺跡	遺物包含地	中･近世(12 世紀以降)	墓２基	銭貨	
	遺物包含地	縄文時代（後期）		土器・土製品、石器・石製品	

要　約

高根川右岸の扇状地に立地する。縄文時代の遺跡が主な調査対象であったが、その過程で中・近世の墓を２基検出した。葬法は土葬と火葬であり、それぞれ渡来銭が６枚と１枚共伴した。

縄文時代の遺物は、後期前葉の南三十稲場式を主体とする多量の土器と少量の土製品、石器・石製品であり、そのほとんどは５回にわたり調査区に流入した土石流堆積物に含まれる。出土遺物の位置情報をもとに土石流の流入経路を復元し、調査区周辺に複数の集落が存在したことを示した。縄文時代の集落は調査区内を南北に流れる河川を基盤とする生活を営んでいたが、相次ぐ土石流による周辺の環境変化により衰退したと考えられる。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 281 集
日本海沿岸東北自動車道（国道７号朝日温海道路）関係発掘調査報告書１

上 野 遺 跡 Ⅰ　第１次調査

2019(平成31)年２月28日印刷
2019(平成31)年３月１日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒 950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956－0845　新潟市秋葉区金津 93 番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社 新潟印刷
〒 950－0134　新潟県新潟市江南区曙町３丁目５－５
電話　025（383）3900